東京立正女子短期大学紀要

第 25 号

目　次

大学におけるオーラル・コミュニケーション能力育成に関する考察
……田　島　富美江　(1)
「やはり」の分析 (3) ―― 関連性理論の視点から……小　泉　ゆう子　(22)
荒れ地としての郊外
―― Anthony Burgess, *The Right to an Answer* (1)
……鈴　木　順　子　(40)
〈寄生〉と労働者階級……横　田　由起子　(61)
最後の問い―― "Ode to the West Wind" 小論……佐　藤　由　紀　(84)
スペインの君主制 ……佐　藤　修一郎　(95)
グラフの曲面への双埋め込み可能性の特徴付け ……遠　藤　敏　喜 (115)
三奏本『金葉和歌集』所載，寂照の「とどまらん」の和歌から（その一）
――『宝物集』の関連説話におよぶ……西　脇　哲　夫 (134)
『遠野物語』における「家」と異界 ―― 民俗宗教の世界観(一) ――
……紙　谷　威　廣 (142)
総目録 …… (122)

1997

東京立正女子短期大学

大学におけるオーラル・コミュニケーション能力育成に関する考察

田　島　富美江

はじめに

何年英語を学んでも一向に話せない英語教育に対する批判は，非常にきびしいものがある。現在の社会状勢が，話すことの必要性を求めていることは事実であるが，そのような社会的な要求は別としても，「話すこと」は「聞くこと」と共に，言語習得上の最も基本的な技能であることから，上記の批判は当然のことであり，近年は大学内部からも「聞き」「話す」技能の育成を中心とする改革の声が起っている。

東京大学における教養英語の改革は画期的であったが，それ以前に長い，苦しい準備期間があったと聞いている。大学英語教育学会（JACET）においても，長期にわたって改革に取り組み，すでに1992年にはその手引書（1）が纒められている。また，個々の大学・短大においても，すでに改革を実施した大学や，その途上にあってカリキュラムや授業内容を検討している大学の例が，出版物や口頭発表を通じて世に問う風潮が出てきたことは，英語教育界においては一応の進歩であるといって良い。

本稿では，日本人学生の弱点である「聞き」「話す」能力，すなわち，口頭によるコミュニケーション能力の育成に関して，その位置づけを根本から問い直すと同時に，大学（以下，短期大学を含む）におけるオーラル・コミュニケーション能力育成の基本を考察することを目的とする。

Ⅰ　国際化とオーラル・コミュニケーション

大学レベルにおいては，未だに訳読法が大勢を占めているが，訳読法のすべてが悪であるということはあり得ない。なぜならば，英語教育が大学教育の一環として存在するならば，それは知的活動の基礎となるものでなければならないからである。訳読法は，解釈力，想像力，類推力，思考力などを伸ばし，論理的な考え方を身につけるためには非常に効果のある方法の１つであることには疑問をはさむ余地はない。しかしながら，現今のように他の国々との人的交流が拡大し，互いに共存を望む社会状況，国際状勢の中では，「読み」，「書く」能力の育成だけでは充分ではなく，「聞く」，「話す」能力，すなわち，オーラル・コミュニケーション（以下，OC）能力の育成にも重要性がおかれなければならないのである。したがって，JACETの手引きにもあるように，次のように言うことができる。

> 「大学における外国語教育の目的は，当該言語の言語運用能力の養成をはかることによって異言語文化を体験し，異なる人間の世界を発見し，人格的な陶冶をはかることにある。従って，大学における外国語（英語）教育の実施にあたっては，言語運用能力つまり人間の言語によるコミュニケーション能力の養成を第一とすべきである。外国語によるコミュニケーション能力とは「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を基礎とする総合的な能力である。このコミュニケーション能力は「外国語科目」によって養うべきものである。……」[1]

上の記述は，JACETが英語教育改善を目指して纏めたものであり，コミュニケーションを広義で捉え，４技能すべてをコミュニケーションの基礎とし，異文化を理解し国際的視野を拡大する必要性を説いている。

高等学校を対象とする学習指導要領においてもその目標の項には

「外国語（英語）を理解し，外国語で表現する能力を養い，外国語（英語）で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てると共に，言語や文化に対する関心を高め，国際理解を深める。」[2]

とあり，特に「聞くこと」および「話すこと」の言語活動の指導を充実する観点から，オーラル・コミュニケーションの科目が取り入れられるようになった。

中学校外国語（英語）科の目標は，概略に留めるが，上記「高等学校における目標の基礎を培う。（上点は筆者）」と述べられていて，「聞くこと」「話すこと」の指導の充実を図るため，「聞くこと」と「話すこと」とを独立させ，言語活動を4領域で構成している。

これらを見る限りわが国では英語学習の初期の段階から，4技能の中でも特に「聞くこと」「話すこと」，すなわち，オーラル・コミュニケーションをおろそかにせず，それらの学習を通じて異文化に触れ，理解する能力を養うことが必要であることを改めて明確にしたと考えられる。言語習得の上からも国際情勢の面からも，上記のような大学英語教育の目的や，中学・高校の指導要領は，まさに当を得たものと言えよう。

次に，大学の英語教育に関して補足しておきたい。

大学における英語教育は，4技能（「能力」，「領域」でもよい），すなわち「聞き」「話し」「読み」「書く」能力のバランスを失うことなく学習し，それらが融合して英語力という1つの統一体*になるまでに高めることである。統一体とは英語をあやつる力，という意味での語学力を養うだけでは不充分であり，同時に英語の背景にある文化を理解し，異文化を容認し，広い視野をもった人間を育成することであると考えられる。単に，文法や作文の指導に留まらず，その過程においてさまざまな知識を獲得させ，思考力を伸ばすことによって人間形成に努めることは，まさに英語教育のみならず，大学教育の目的に叶うも

＊　ここでは敢えて「統一体」ということばを使用したい。統一体とは，いくつかの要素（ここでは4技能）の単なる集りを意味するのではなく，それらが一体となって1つの有機体として機能するものであると考える。

のと言える。英語教育の分野では，当然，国際人としての感覚を身につけさせることも，われわれのなすべき事の１つである。国際感覚を身につけるということは，日本語話者としての思考力，判断力を捨てて，英語話者としてのそれらを備えることではない。いずれにも偏ることなく大所高所から物事を観察し、適切な判断に導く能力を備え，同時に，それを言語で表現し，行動に表す能力を身につけることを意味するものである。「国際人（社会）」というものの意味に関して，近江氏は

(1) 日本的情緒主義で物事を判断し，処理することもできるが，場合によっては言語を媒体に論理的に考え，是々非々主義――是を是として賛成し，非を非として反対し（……）公平無私に事を行なう主義――に切り換えることもできる。つまり“情の刃”と“論理の銃”をあくまで根底に人類愛を持ちつつ目的に応じて使い分けられる―

(2) 新旧，東西に関係なく，物事をその本質において捉え，その良い部分を自分に取り入れる感性とメカニズムを備えている。同時に主として言語を通して，その内容を発信できる―

以上の条件を充たしている人（社会）である。[3]（…は筆者省略）

と述べている。この感覚はいわゆる訳読式では育たないし，また学習時に発話する機会の比較的多い口頭英語学習に類するクラスでも，聞かれたことに対する応答や，教師に促がされての疑問文の発話などで終始する指導法では育成することは出来ないのである。それは，コントロールされた範囲内での学習であり，学習者側の視点に立つならば，「やらされる」言語学習であって，あくまでも受動的学習の域を出ていないからである。

国際人としての感覚を育成するためには，学生が自分の思っていることを伝えたい，とか，自分の興味あることを伝えて他の人の共感を換起したい，という気分を学生に抱かせ，それを表現させるように促す，いわゆる「発信型の英語教育」へと方向を転じることが必要である。自分で物を考えて発信するには，思考力，分析力，判断力などの知力が伴わなければ実現は不可能である。霜崎

氏は，学生を知識の受容者から表現者へ，という捉え方の転換が必要である[4]と述べている。このような学習を継続していけば，将来，国際的に活躍する機会がたとえ無くとも，日常生活を自主的，積極的で知性に富んだものとし，人間形成においても重要な役割りを果すことになる。これは受信型の英語教育では育成されるものではないといっても過言ではないであろう。

Ⅱ　大学の英語教育と「オーラル・コミュニケーション」の意味

わが国で実施されている（中学・高校・短大・大学という）学校における英語教育を考えると，中学・高校においては学習指導要領がその目標を設定し，目標達成に到る指導の枠組を提示している。しかしながら，その英語力のみに限定しても，高校の卒業生がすべて同レベルの学力を持っているわけではなく，英語学習に対しては内発的にせよ外発的にせよ動機づけはさまざまであり，中には何の動機づけも持たない生徒達もいるのである。そのような生徒達を大学生として受け入れざるを得ない大学での英語教育は，いかにあるべきだろうか。

広義でのコミュニケーション能力とは4技能すべてを含むが，その中でもバランスを欠く原因となっているものは「聞き」「話す」能力，すなわち，OC能力の育成面の遅れである。日本人のTOEFLの成績を世界的にみても，わが国の「読み」「書く」指導が成功しているとは言い難いが，教室を一歩出ればほとんど日本語で用が足せるという英語学習上の悪条件の中でのOC能力の育成にも根本から考えを改めるべきところがあるように思えるのである。

OC能力は「聞き」「話す」という音声面を中心としたものであり，母国語習得に際しては無意識ではあるが，もっとも早く現れる言語現象である。わが国の学校における英語学習においても，中学の最初の段階は音声から入るることになっている。しかし，学習指導要領にも明記されているように，中学・高校ではOCの学習がなされている筈であるのに，訳読法に馴れた指導法の採用や，高校・大学入試等の影響による音声面中心の授業の挫折等が原因となり，大学入学後，改めて基本からやり直すのが現状である。大学側の努力にもかかわら

ず一向に進歩しないOC能力に対して批判が強いことは前述の通りであるが，大学側の取り組みにも欠けるものがあると思われるのである。

OC能力の育成のためにどの大学においてもカリキュラムの中に，それに関連する科目が設置されている。過去においては，ほとんどの大学が「英会話」という名称で設置していたが，現在では，それに替わる名称も増えてきている。これは「英会話」という名称が，大学の教科としては余りにも軽々しい印象を与えるために，アカデミックである筈の大学にふさわしくないという理由であろうか。「英会話」という名称は未だに多くの大学で使われていることは事実であるが，それに替わるものとして「イングリッシュ」「オーラル・イングリッシュ」「オーラル・コミュニケーション」「コミュニカティブ・イングリッシュ」「イングリッシュ・カンバセーション」等々の名称がみられる。これらの名称のどれもが，口頭によるコミュニケーションを授業内容とすることを意図しているのは想像できるが「誰が，何の目的で，どのような内容を，どのような指導法で授業をすすめるのか」という科目の性格が明確に表わされておらず，曖昧なままに1科目として設置されている感がある。例えば「コミュニカティブ・イングリッシュ」をとってみても，コミュニカティブ・アプローチそのものが未だに不明確な部分が多いのである。外国語学習に文法を重視し，文構造の指導法に焦点を当てた当時の指導法に対しH.G. WiddowsonやC.J. Brumfitをはじめとする研究者達によって，ことばの実際の使用，すなわち，場面に応じて適切な表現が使える能力の育成に，重点を置くことが主張されるようになった。しかし，未だに体系化に至らず仮説の域を脱していないし，わが国の英語教育に有効に働くかどうかさえ未知数である。ただし，現在，このような状態の仮説を基にしているとしても，大学側に明確な方向づけができていれば，特に問題ではないが，方向づけができていないならば，「コミュニカティブ・イングリッシュ」という名称の授業内容は「(英)会話」という名称から連想される「日常(英)会話」と何ら変わらないと言えるだろう。「(英)会話」に類するこれらのものが，なぜ軽々しい感じを与えるのだろうか。

辞書によれば

広辞苑（1993）：二人あるいは少人数で向い合って話し合うこと

研究社新英英辞典（1973）：a familiar talk
an exchange of thoughts and feelings by talking familiarly

Oxford Advanced Learner's Dictionary（1995）：a usu. informal talk especially one involving a small group of people or only two

Longman Dictionary of Contemporary English（1987）：an informal talk in which people exchange news, feelings, thoughts

手近かにある辞書の記述を挙げたが，英英辞典においてはfamiliar, informalなどの語が使われていて「形式ばらない気楽なトーク」という印象を強く与えるようである。辞書は，良きにつけ悪しきにつけその解釈を一般化させ，定着させてしまうほどの影響力をもっている。したがって，OC＝「(英)会話」＝「日常(英)会話」という図式が一般的な既成概念としてわれわれの心の中に定着していると考えられる。

しかし，大学の英語教育において使用する場合のOCは，大学教育の視点から解釈がなされなければならない。すなわち，大学の一教科としてカリキュラムの中に設置するならば，重要な教科の１つであることを認識しなければならないのである。

OCとは，その定義として，

「われわれが相手を意識して発話し，それに対して口頭による反応を期待することが，一度または連続的に行われる時の，口頭でのやり取り」

ということができる。そのやり取りの媒体となることばには，その意味内容がイメージの喚起を比較的容易とする高度に具体的なレベルから，逆に，イメージの喚起が比較的困難な高度に抽象的なレベルに至るまで，その具体度・抽象度にはさまざまなレベルが存在する。また，その対話の場面はインフォーマルな雰囲気から，フォーマルな場面に至るまで，実に多様性に富んでいる。イン

フォーマルな場面での，高具体度レベルのことばの使用においては，仮りに，ことばが文法の枠組みから外れたとしても，その発話が相手に理解され，多くの場合，生活に何ら支障をきたさないコミュニケーションが可能なのである。このレベルでは，ノン・バーバルな要素がことばの意味を補足する役割を果すから，不完全なことばであっても意味が伝達され，コミュニケーションがスムーズに進んでいくのである。

一方，ことばのみによる討論・対論の類や，専門的話題に関する質疑応答のように，一般的にイメージを喚起しにくい高抽象度レベルのことばの使用においては，場面的要素がほとんどなく，また，ノン・バーバルな要素も少なく，相手の表情や身体的動作，声の調子，それに対話者がそれぞれ心の中に持つスキーマなどが挙げられる位である。直接対面しない電話においては，ノン・バーバルな要素としては声の調子やスキーマ以外には何も無いと言ってよい。したがって，この種の高度に抽象的なOCにおいては，話者が伝達したいと思う事柄の意味を充分に表現するだけのことばの正確さが要求されるのであり，これがフォーマルな雰囲気であれば，ことばのさらなる適切さ、正確さが求められるのである。

われわれが「会話」ということばを聞き，第一に心に浮かべるのは，上記の，高度に具体的なレベルのことばの使用，あるいは，そのことばが使用されている，形式ばらないくつろいだ雰囲気でのトークという固定観念化したものといって良いであろう。われわれが「日常(英)会話」と称して軽々に見なすのは，ことばの中のこのレベルのやり取りであって，あらゆるOCの中の，僅かな一部分にすぎないのである。

次の例は，キャンパス内での二人の男女学生のことばのやり取りである。ゴールデン・ウィークをいかに過したかが中心的トピックであり，学生達には極めて身近な話題である。くつろいだ雰囲気ではあるが，使用されていることばに関しては，文法の枠組みをはずれている部分は見当たらない。

Michelle meets her friend Chie on the campus after the "Golden Week"

holiday.

A：So did you have a good time during Golden Week, Michelle?

B：Not that great. I made a trip to Izu by car.

A：Hey, I didn't know you could drive. When did you get your driver's license?

B：Years ago, in the States. It's easy there. You don't have to take a written test like in Japan.

A：So you drove to Izu. Well, I bet you got caught in the rush on the way back.

B：I sure did. I got stuck in a traffic jam for three hours!

A：That always happens in Golden Week! You should have taken my advice and stayed home.

B：Yeah! Anyway, I was tired so I stopped at a hot spring and took a bath. And then I had a couple of beers…

A：Michelle! You're not supposed to drink while you're driving!

B：I know, Chie. I guess the beers must have had an effect because just as I was driving out of the hot spring…

A：You had an accident?

B：Well, I wasn't paying attention and I started driving on the right instead of the left…

A：You what!

B：Hey, at least I didn't cause any damage! [(5)]

二人のコミュニケーションは場面から遊離している。喫茶店でも，電話でも話題にできることであり，必ずしもキャンパス内でなければ理解できない内容とは言えない。ノン・バーバルな要素としては，相手の表情，しぐさ，声の調子などしか挙げることができない。それにもかかわらず，互いに相手の発話の意味を理解しつつコミュニケーションが成立している。われわれの日常のコミュニケーション行動におけることばの使用は，ほとんどの場合上記のように場面

から遊離している。ノン・バーバルな要素が意味を補足しつつコミュニケーションが進む場合は，子供の母国語習得時の僅かな一時期とスキーマを共有している者同志の間においてであろう。上記の会話の大部分は，文法・語法に沿った普通の英文から成立していて，所々に使用している“Hey”，“Yeah!”，“You what!”や，口語体として使われている語法などによって会話らしさが出ているに過ぎないのである。

学習指導要領によれば，高等学校におけるOC能力の育成に関して，(1)「オーラル・コミュニケーションA」，(2)「オーラル・コミュニケーションB」，(3)「オーラル・コミュニケーションC」の内容構成をそれぞれ，

(1) 身近な日常生活の場面で行われる会話を中心に構成する。

(2) 文章や話の内容を正確に聞き取ったりノートしたりする聴いて理解する活動を中心に構成する。

(3) スピーチや討論など様々な場面で行われる表現活動を中心に構成する。[6]

と指示しているが，これらは英語そのものが異なるわけではない。もちろん，日常生活の場面でのコミュニケーションと，スピーチや討論とでは，内容の論理性や説得性のような表現法においては異なるが，もっとも基本的なことは(1)，(2)，(3) ともに正確な英語を材料として「聞き，話し，読み，書く」技能の基礎を固めることで構成することができるのである。

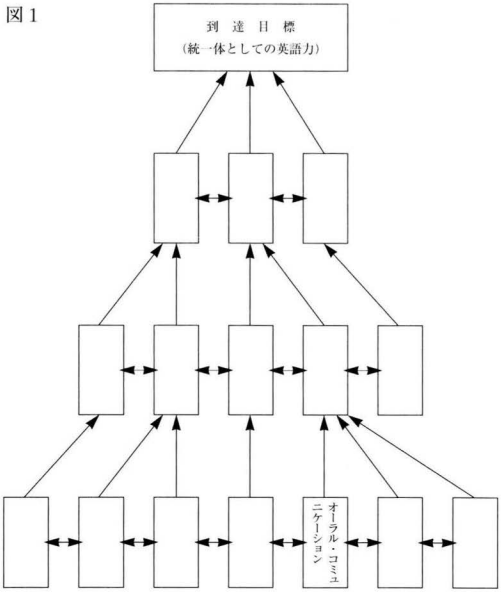
大学の英語教育におけるOCも，高校におけると同様に，英会話やスピーチ，討論などにそれぞれの英語があるわけではなく，会話の英語もスピーチの英語も基本的にはすべて同じである。要するにOCとは，いかに短い表現であろうとも，正確な文による表現活動であるということができる。「正確な文」とは「完全無欠な」という意味ではなく，「文としての形を整えた」の意味であることを添えるに留め，詳細は別稿に譲りたい。

近江誠氏は，その著書の冒頭において，「英語は1つである。本来，英語と英会話の2種類の英語があるわけではない。ところがわが国では，学習者もテキストも講座も，いや教師までも，はっきり2分されてしまっている。」[7]と述べている。

Ⅲ　英語科目の中の「オーラル・コミュニケーション」の位置

各大学においては，それが一般教養の英語であれ，文学系の英語であれ，また，語学系の英語であれ，まづ第一に到達目標を設定すべきである。そして，目標達成のために必要な科目を検討した上でカリキュラムに設置しなければならない。さらに，本稿のテーマであるOC能力の育成が，到達目標達成のために不可欠な科目であるならば，それも重要な柱の１つとしてカリキュラムの中に設定し，到達目標に向けて，それなりの役割を果たさせなければならないのである。以上述べてきたことから，大学の１英語科目としてのオーラル・コミュニケーションの位置を，下に図式化した。(図１)

図１



枡の中には1科目名が入る。最下段は7科目あるが，各大学の英語教育に対する考え方の相違により，その数には増減があるであろう。また，上下を3段にしたが，これも絶対的な段数ではなく，2段で済む大学がある一方で，4段を必要とする大学もあるであろう。オーラル・コミュニケーションという科目の位置も移動を可とするものである。

横の矢印は，各大学で必要とする科目が必ず他の科目と連携していることを表わしている。したがって，ほとんどの科目はその一部が他の科目と重複することは避けられないが，それでもその科目の独自性を失うことのない教材を選択し，指導法を採用することが大切である。オーラル・コミュニケーションも当然，文法，作文やリスニング系の科目などとは関連をもつことになるであろう。

上向きの矢印は，英語学習は基礎からの積み重ねであることを表わすものである。各大学で決定した最上位の到達目標に向けて，4技能をバランス良く育成するための基礎的科目を最下位に置き，その上に，内容的にも技能的にも，最下位の科目よりやや高度な科目を置くことを意味している。最上位の目標達成に向けて，教材の表現や内容に関しては易から難へ，あるいは，高具体度から高抽象度へといくつかのステップを踏むことになるが，ここでもまた，各科目は横の関係と同じく，下位と上位の関係は途切れることがあってはならないのである。例えば「英作文」が最上位の目標達成に必須の科目であり，2年間に亘って課するのであれば，大きな到達目標に向けて上位の「英作文」の到達目標を決定すれば，それを実現させるための下位の「英作文」の到達目標の目途は，おのずから決ってくるのである。したがって，2年の「英作文」は下位の英作文を継承するレベルの教材内容へとスムーズな計画が可能になるのである。したがって，英語教育・学習を効率的に運ぶためには，いかなる科目も最上位の目標に向けて，それぞれの到達目標が明確にされなければならないのである。

各科目は最上位の目標に到達させるために不可欠の科目であることが前提である。OC関連の科目も大きな目標達成のために不可欠の科目であると判断が下されたならば，必ず到達目標を明らかにして文章化し，必要であれば追記や但し書きによって，より詳細に別記しておくことが望ましい。4技能をバランス良く育成するためには，このように「英語教育・学習のシステム化」が図られなければ，1つの統一体としての英語力を身につけさせることはできないと考える。

Ⅳ　OC能力育成の基本的問題

OC能力の育成を目指してカリキュラムの中にOCを設置するならば，それは1つのシステムを構成する重要な要素であるとの考えが基本とならなければならない。「会話」という表現が与える一般化された固定観念から，「通じれば良い」という理解であるならば，カリキュラムから外し，その面の教育は他の機関に委ねるべきである。なぜならば，大学においては教養を高め，知的志向の精神を育成することが，教育目標の1つであるから，「通じれば良い」程度の英語教育では，大学の存在意義が無に等しいと言えよう。

ここに2例をあげて，大学におけるOC能力の育成にもっとも基本的な問題を考察する。

(a) 以下の例は，語やフレーズのみによる表現に関する言及である。これらは親しい間柄での表現であるが，日本語話者は，日本語の影響によって，親しい間柄でなくてもしばしばこの表現を使用しがちである。多賀氏（1992）の記述を概略によってみてみよう。

外国ではレストランに入ると「こちらでお待ちください。」のサインが出ていて，待っているとウェイターが来て，次のような会話が繰り広げられる。

① ウェイター "How many of you, sir?"
② 客　　"We are four of us."
③ ウェイター "Very well, sir. Will you proceed this way, please?"

極めて自然な流れの会話である。ところが日本人でも特に，そのような場数を踏まない人達は，客として単に "Four" と言い，相手にぶっきら棒な感じを与えてしまうが，ましなケースとして "Four, please" というのが関の山だ。あるいは "We are four." ということにもなろう。"Four" と言うのが良くないのは明らかであるが，"We are four." はどうだろうか。殆どのネイティ

ブ・スピーカーは「何らおかしくない。」と言うが，何人かの人は「どこが変か具体的には指摘しにくいが，何だか変だ。」とのべていた。どうやら“Four”のあとに“of us”をつけると英語としてぴったり決まった感じがするようだ。

“We are four.”で必要なメッセージは充分伝わるし，その後に“of us”を加えても，さしたる情報を相手に伝えているわけでもない。しかしながら，この“of us”は，この文が完結したという感じを出すためにはなくてはならない言葉だ，という内容である。

最後の“of us”の付いた表現に関しては，学習の早い段階からこれに類似した場面において，この表現が使用できることは理想的なことである。しかしながらこの表現は，最低限度の文としての形を整えた基本的文型“We are four.”をマスターした後の，さらなる学習や経験によって文化的背景，英語話者達の思考様式，あるいは英語の感覚を身につけ，場数を踏むことにより達成される高度な表現であるから，ここにおいては扱わず，“Four”と“We are four.”の表現を比較してみたい。前者は，単語での返答で，たしかに「通じる」やり取りではあるが，多賀氏も述べているようにぶっきら棒な表現であり，相手がウェイターであるとしても丁寧さを欠いていて，教養ある大学生としては避けたい表現である。一方，後者は簡単な内容ではあるが，最低限の文としての形を整え，必要なメッセージはすべて含んでいるのみならず，丁寧さの度合いは前者に比較して高度であり，相手に不快感を与えるものではないと言える。

しかし，大きな違いは次の点にあるといえよう。前者は1語による表現であるばかりでなく，聞かれたことに対する返事として要点だけを伝えたにすぎず，コミュニケーションとは言い難い。学習者自身，文構成，内容構成のための脳への刺激が弱いため，自発的なことばによる思考内容の表現に進歩がみられないことが挙げられる。これに反し，後者のように，たとえ，質問に対する返答であっても，文章による応答を意識的に常時行うならば，文構成，内容構成のための脳への刺激が強力なものとなる。したがって，基本文をマスターした段階を過ぎれば，学習者自身による基本文の代入，変換，補足等の操作が可能になり，また自発的な作文能力の育成へと発展させることができる．

換言すれば，前者の表現であっても「通じる」だけに，それに馴れてしまう

と，ことばを文の単位，パラグラフの単位，さらに大きなまとまりのある思考内容を構成するに至るまでに発展させる意欲を消失させる結果となるのである。したがって，OC能力育成の指導には，絶対に回避し，文による表現の指導を基本ラインとすることが肝要である。

(b) われわれは，OCの指導においてしばしば視覚教具を使用することがある。例えば道案内の練習のために地図を持ち出し，それに従って学習することはよくあることである。しかし，実際の社会生活において道をたずねられた場合には，図示するための用具を常に所持しているとは限らない。求められることは，ことばのみによる表現力，すなわち，できる限り正しい文を構成して伝達する能力である。たとえ大学生であっても最も初期の段階においては補助的教具の使用は効率の点からみて避けられない場合もあろう。しかしながら，この種の補助教具の使用による学習は，前述の通り学生にとっては「やらされる」学習であり大学生の知的欲求を満足させるものではないといえる。したがって，必ずこの段階を越えた練習，すなわち，視覚教具を使用しないコミュニケーションの練習を経て，さらに現実の場面で使用可能な道案内の表現へとつなげていくべきである。ここにおいては，自己の力でイメージを描きつつ，相手に指示が与えられなければならないのである。この段階を克服したときに，はじめて英語によるコミュニケーションができたという大学生としての知的満足感を得ることが出来るであろう。名称は「英会話」であれ「コミュニカティブ・イングリッシュ」であれ，大学においてOCの範疇に入る科目は，たとえ卑近な内容のものであっても，「通じた」という単純な嬉しさではなく，正しい文によって自分の思考内容を相手に伝えることができたという達成感，満足感を抱かせることが，大学の英語教育における知的なOC能力を育成する基礎であると言うことが出来る。

Palmerの発表したThe Five Speech-Learning Habits，そしてTwaddellの提唱になるFive Steps of Language Learningは，いずれも言語習得の貴重な提案である。中には，日本の教室や学習者に適応しない悪評高いものもあったが，

それは教師の工夫次第で，その基本理念を損なうことなく如何ようにも成果をあげることが出来るものである。しかしながらそのいずれの教授法もコントロールされた教室内での練習に終わっている。大学においてOC能力を育成するためには，その段階を越えた，より現実に近い場面で，バラエティに富んだ話題でのコミュニケーション活動をすすめ，その段階での達成感，満足感が，OC能力の育成につながるものである。

母国語としての英語習得においては，たしかに単語やフレーズで表現する時期が存在するが，それは必ず文構成に通じるプロセスの１ステップにすぎず，それをもとに学習者が全身の感覚を使って環境に働きかける積極性と，周囲からのフィードバックを常時体験することによって得られる能力である。常に身近かに相手が存在しインフォーマルな会話形式でも，ノン・バーバルな要素が意味を補足してくれるので，充分意志が伝達されるのである。

一方わが国のように，12才に達した子供達や大人が英語を外国語として学習するのとでは，学習時の外的条件とメンタルプロセスが母国語習得の場合と全く異なっているのである。そのような状況の下では，母国語の習得方法は大して参考にはならず，独自の指導法を考案しなければならないのである。知性を伴い，自分自身の考えを表現するOCを志向するならば，母国語習得時の初期におけるような言語表現をわざわざ教室で教える必要はないと言える。常に目の前に親しい人間が存在しインフォーマルな表現に馴れてしまうとそれは知的な言語運用にはつながらないのである（J. Cummins，1986)。例えば，質問に対して単語やフレーズでの応答に馴れてしまうと矯正は困難となる。特に対話形式の教材の暗記などは，いくら代入練習をしても，場面以外への転移の効果は望めないであろう。冠詞の問題は，意味との関連において，要・不要を意識しつつ，また，完了形は時間的流れを意識しつつ学習しなければコミュニケーションに堪え得る表現が不可能となるであろう。これは，文法・語法を重視した完全無欠な文を，というのではなく，文の誤りや，不適切な語句の使用などは，その間違いに気付かせる程度に留めておくことで良い。

OC能力の育成の点でもっとも基本的なことは，いかに易しい文であっても，

いかに身近な話題であっても，英語の最も基礎的な文を最少の蓄えとして徹底的に学習しておくことと，いかに簡単な事柄でも文として表現する習慣をつけ，より頻繁に満足感を味わわせることが大切である。親しい人達の間では，いかなる場面でも文の形で表現するのは不自然に聞えることがあるかも知れないが，この習慣をつけておくことにより，内容を高め，より高度な表現へとつなげて行く際に役立つものである。すなわち，OCの学習が進み，内容が高度になるにしたがって，発言者が自身の思想内容を伝えるためには一文だけでは表現しきれなくなることは明らかである。まとまりのある内容とするには，複数の文を適当な連結詞で接続したり，より複雑な文を使用したりする場合があるが，そのような時にも基本が身についていれば崩れることが無いと考えられる。

大学におけるOC能力とは，

OC能力≠（固定観念的）日常（英）会話能力

であり，これを

OC能力＝相手を意識し，自分の考えを的確に伝達する能力

という発想に切り替えるべきである。これが，国際人としての英語であり，発信型英語教育の基礎となるものである。一方，受信型英語教育に馴れてきた学生達は，往々にして聞かれたことに対して，単語やフレーズでの表現しか出来ないことがあるし，それを教師達も「通じれば良い」と，何も注意を与えることなく看過していくならば，伝えたいことがあっても，学習者の英語はそれ以上には発展していかない。したがって，例えば英作文のクラスなどでは，基本的文構造からやり直しという事態となり，教師にとっても学生にとっても，教育上・学習上無駄なエネルギーを使用することになるのである。

V　オーラル・コンポジション（口頭英作文）のすすめ

以上，OCに関する考察を続けてきたが，大学におけるOC能力の養成は，

オーラル・コンポジション能力の養成であるということができる。心の中に想起した事柄を，即座に文に変換し，口頭で受け手に伝達する。次に受け手は送り手となり，口頭で返されたメッセージに，自分の何らかの判断を下したり，メッセージを加えたりしたものを，口頭で相手に送り出す。OCとは，文を作りつつ，口頭によって送り手と受け手が交互に作用し合うコミュニケーション形式である。

大学レベルのOC能力の育成は，口頭英作文の能力を育成するものでなければならない。ある英会話のクラスで，「なぜ予習ができなかったのか」の教師の質問に対し，“Because of busy.”と答えたら，それで済んでしまった，という報告が学生から聞かれたが，「忙しかったから」という意味は通じても，これではOC能力の基礎は築けない。OC能力育成の具体的方策に関する詳細は，別稿に譲ることになるが，このレベルの誤りに対して，教師は即座に訂正を入れて誤りに気づかせ，正しい表現を提示しなければ，学生はその誤りに気づかず，何も学ぶことなく無駄な時間を過ごさせる結果となる。

また，漠然と相対して，内容の乏しいやりとりをすることなどは行わず，学生の自己表現力を伸ばしてやる方向に指導法を改善すべきである。“What is your hobby?”に対して“My hobby is reading books.／growing flowers.”これで終るなら，単なる受け身の答であり，自己表現ではない。日本人学生の「会話」は，自己表現が全くなく，それ以上に発展していかないといわれている。これは学生の側にも問題があるが，教師は自己表現の意欲を喚起するような質問を間断なく浴びせかけるべきである。そのような過程を経れば，次に学生は自分の力でそれらをまとめて，自分のことばで表現できるようになるであろう。上記の英語のように，質問に対し，貧しい答しかできないというのは，貧しい答だけで終っているからである。教師は学生の自己表現を導き出す指導法を研究すべきである。学習指導要領にオーラル・コミュニケーションの技能育成が盛り込まれたとはいえ，諸々の事情で訳読中心の授業に馴れてきた学生達には，口頭で作文しつつ自己表現することは，容易に克服することのできない壁なのである。

大学のレベルにもよるが，英語自体のレベルを下げ，身近な話題から，そし

て，最も単純な文型から出発せねばならないことがあるかも知れないが，学生が使いこなせるレベルの教材を使用することが肝要である。そして，簡単なオーラル・コミュニケーションができた時には，話すことの楽しさ，面白さ，満足感を味わわせることは，ことばの教育に当る教師達に与えられた義務であると言っても過言ではない。

おわりに

大学の英語教育は，４技能をバランス良く備えた１つの統一体としての英語力を身につけた人材の育成を目標としている。４技能の中でも「聞くこと」「話すこと」が中心となるOC能力の育成には，特に力を入れなければバランスを取ることはできない。これまで述べてきたように，大学の英語教育に必要な科目であると認めてカリキュラムの中に設定し，他の科目との関連や到達目標の検討を進めていくならば必ずや，OCの教材や指導法の問題が浮上してくる筈である。

最近，教材の作成やテキストの統一を目指す大学が，次第に増加してきている。冒頭にも述べたように，東京大学の英語教育に関するカリキュラム改革は，リーディングを主としたものであったがその最たるものであり，1993年の東京都私立短大協会における基調講演で，その努力の程が明らかにされた。東大ということで，外部からの協力が比較的簡単に得られたようではあるが，実現には，長年に亙る準備期間を要したこと，最初は数名の反対があったが，最後には全員の協力が得られたことまでも披露された。また，東洋英和女学院大学の英語教育改革について鳥飼氏は，すべての教員の協力は不可欠であるが，まとめ役としてのシニア・メンバーが必要である（p.15）と述べ，関係者がまとめ役を中心に１つになって取り組むことの重要性を力説している。

本稿では，大学におけるOC能力の育成について，そのあり方を検討してきた。英語教育は，その大学のレベルを勘案し，その大学の関係者によって独自

の指導法が取られなければならない。本稿に記した事柄は，英語教育の一部分であるにすぎず，本当の英語力を備えた人材を育成するためには，まだ検討すべき事項が山積している。外国の教育理論に頼るのではなく，日本人による，日本人の，そして，各大学独自の英語教育法を実現するために，関係者が一つになって邁進することが必要であると思う。

注

(1) JACET「大学設置基準改正に伴う外国語(英語)教育改善のための手引き（1）—JACETハンドブック—」，1992，p.6

(2) 文部省　学習指導要領　平成元年

(3) 近江誠『頭と心と体を使う英語の学び方』研究社，1988，pp.13～14

(4) 霜崎実　東京都私立短期大学協会　平成7年度英語教育研究大会における基調講演「発信する大学英語とは？」(1995年11月24日）より。

(5) Kizuka, H & R. Northridge『Common Errors in English Writing—New Edition』マクミラン・ランゲージハウス，1997，p.43

(6) 学習指導要領（外国語科編）ポケット判　あすとろ出版　平成元年

(7) (3) に同じ　はしがき　p.i

参考文献

Brumfit, C.J. & K. Johnson. *The Communicative Approach to Language Teaching.* Oxford: OUP, 1979

Cummins, Jim & Merrill Swain. *Bilingualism in Education.* New York: Longman, 1986

Hadley, Alice O.　*Teaching Language in Context.* Boston, Mass: Heinle & Heinle, 1993

JACET　「大学設置基準改正に伴う外国語(英語)教育改善のための手引き（1）—JACETハンドブック—」，1992

Johnson, Karen E.　*Understanding Communication in Second Language Classrooms.* CUP, 1995

Littlewood, W. *Teaching Oral Communication.* Oxford, UK: Blackwell, 1992.

近江　誠　『頭と心と体を使う英語の学び方』研究社，1988

柴田元幸　「新しい英語教育への試み」東京都私立短期大学協会，1995

霜崎　実　「発信する大学英語とは？」東京都私立短期大学協会，1996

多賀俊行　『文化としての英語』丸善ライブラリー　063，丸善，1992

田中慎也『どこへ行く？　大学の外国語教育』三修社，1994

鳥飼玖美子・進藤久美子　『大学英語教育の改革—東洋英和女学院大学の試み—』三修社，1996

Widdowson, H.G. *Teaching Language as Communication.* Oxford: OUP, 1978.

——「荒地」としての郊外——
Anthony Burgess, *The Right to an Answer* (1)

鈴　木　順　子

1．エグザイルが夢見る故郷

1960年に出版されたアントニー・バージェスの4作目の長編*The Right to an Answer*は，バージェスとしてはごく初期の作品になる。それ以前の作品，すなわちマレーシア三部作と称される*Time for a Tiger*（1956），*The Enemy in the Blanket*（1958），*Beds in the East*（1959）が，植民地に暮らした彼自身の体験に基づいた作品であったのに対し，この小説は純然たるフィクションであり，専業作家としてのバージェスの試金石ともいえる作品だった。とはいえ，すでに43歳になっていたバージェスは，1959年までの数年間に，後のベストセラー*A Clockwork Orange*（1962）を含む7本の長編と1本の中編を書き下ろしており，まるで出発が遅れた分を取り戻そうとするかのように，この多筆ぶりは76歳で亡くなるまで続いた。

この時期の小説群，*The Right to an Answer*（1960），*The Doctor Is Sick*（1960），*Devil of a State*（1961），*One Hand Clapping*（1961），*Honey for the Bears*（1963），*The Eve of St. Venus*（1964）は，外国を舞台にしたものも含めて，いずれも同様のテーマを扱っている。それはエグザイルの目で見た現代英国の諸相と，愛の価値についてである。中でも*The Right to an Answer*はこのテーマが最も顕著にあらわれた，最もよく書かれた小説と言えよう。

バージェスがこの小説の想を得たのは，彼の最初の妻ルウェラの語った話か

らである[1]。彼女は戦時中のロンドンでスワッピングにふけっている二組の夫婦と知り合いだった。やがてA氏はB夫人と恋に落ち所帯をかまえたが，B氏はそれに耐えきれず自殺した。この話に一種の教訓とコメディ要素を感じ取ったバージェスは，それを小説に仕立てようと考える。

彼はその悲喜劇の語り手として，J・W・デナムという名の一人称ナレーターを投入する。バージェス自身「退屈なイングランド人」と定義するデナムは，主人公としてはおよそ魅力に乏しい男である。彼は太って頭の薄くなりかけた40過ぎの中年男性で，年もほぼ当時の作家と同じなら，容貌にも作家本人を思わせるところがある。バージェスの主人公のほとんどが教師や芸術家といったインテリ的職業に就いているのに対し，デナムは英国商社の東京支店長という肩書きの裕福なビジネスマンで，酒や食事やセックスを楽しみ，金銭にもそれ相応の執着を示す俗物であり，これもやや異色といえる。

しかし読み進むにつれて，デナムもまた御多分にもれぬ博学なインテリであり，その世俗的才覚に加えて，文学と言語について深い造詣を持ち合わせていることが明らかになってくる。しかも，彼にはさらに特徴的な作者との類似点がある。

このアンチヒーローは，その見かけ以上にヒーローらしからぬアンチヒーローであり，この小説はデナムの手記の形をとっているにも関わらず，彼自身が物語の筋に介入することは稀である。彼は主人公であるにも関わらず，奇妙なくらい自身については語りたがらない。彼はただ，自分の目に映ったものを忠実に述べ伝え，感想を述べるだけである。デナム自身それを認めている。「この物語には筋らしい筋がない。ここに書かれているのは単に，私，J・W・デナムが帰省にあたって，食べたり飲んだり，道理に合わないほど非難がましくなってみたり，人に会ったり，離れたところから横目でにらんだ，取るに足らない，おもしろくもない人々の姦通をあげつらってみたりということばかりである」(p.183)[2]

デナムが傍観者でしかありえないのは，彼がこの物語の外に立つ人間だからである。この小説の舞台は国際人たるデナムの動きを追って，イギリス，セイ

ロン，シンガポールから東京まで，めまぐるしく移り変わるが，その焦点はイギリスに置かれている。しかしデナムはイギリス人であるにも関わらず，その長い外国暮らしのせいで，母国ではつねにエグザイルとしての感じを免れ得ない。そして，この小説の主眼はエグザイルの目に映った現代英国の不毛と退廃を描き出すことにある。

言うまでもなく，バージェス自身も一種のエグザイルである。本書執筆当時まで，ジブラルタル，マレーシア，ボルネオに暮らし，その半生の大半を外国で過ごしている。そしてこの後も，妻ルウェラの死後はイギリスへ帰る意志をまったく失ってしまったと見え，一箇所に定住することをやめ，年中旅行に明け暮れている。

この種の自発的エグザイルはジェイムズ・ジョイス，ヘンリー・ジェイムズ，T・S・エリオット，エズラ・パウンドらを初めとして，英語文学にはめずらしくない存在である。ここでは本論から外れるので，英文学におけるエグザイルの系譜という興味深いテーマについて詳述するつもりはないが，このうちのエリオットとパウンドは，この小説で扱われるテーマと深い関連があると思われるので後述する。

しかしバージェスはイギリスと完全に訣別したわけではない。むしろ彼が祖国を離れれば離れるほど，彼の中のイギリス的（ケルト的と言った方が正しいかもしれない）部分は，いや増して行ったように思われる。これは決して単なるノスタルジアとしては片づけられない問題である。この小説は1960年，すなわちバージェスがイギリスを見捨てる以前に書かれたものであるが，何が彼を英国から遠ざけたのかを知る，ひとつの手だてとなるだろう。

バージェスもデナムもエグザイルであるからには，現代英国を語るには決して内側から見ることはできない。彼らの故郷を見る目は，追放者の目，通りすがりの旅行者の目でしかありえない。バージェスがこの主人公をあえて無個性で透明な存在としたのは，デナムの口を通じて自分の意見を述べたかったためと考えられる。その点デナムは，他のどの主人公よりも「創作」の度合いが低い，作者自身の分身とも言えるだろう。彼のフルネームは意識的に伏せられているのだが，J・WとはJohn Wilson（バージェスの本名）なのではないだろ

うか。

デナムは任地の東京に家を持っているのだが，二年に一度，数か月の休暇を過ごすため，父の住むイングランドへ帰ってくる。彼の父はやもめ暮らしの引退した印刷業者で，英国中部地方（ミッドランズ）のある工業都市（どうやらレスターらしい）の郊外に住んでいる。ここでバージェスは，平和で死んだような郊外生活，「背徳的な，テレビに取り憑かれたイングランド」を語る。その風景は，バージェス自身が「ナボコフの影響を受けた」と認めている，次のような比喩を多用した文章に美しく描写されている。

> ブラック・スワン（パブの名）は消えつつある村の最後に残った部分にあった。この汚いしみを核として，そのまわりに真珠のように郊外が広がっていた。村は一エーカーにも満たないほどに縮小してしまっていた。インディアンの小さな居留地のように。汚れた窓から白痴顔が，点在する草むらを横目で見下ろしていた。鶏が一日中ときを作った。一時代前のエプロンをつけた少女たちは，汚れた食べかけのりんごを花のように身にまとっていた。少年たちはみな兎唇のようだった。それでもこの村は，周囲の郊外よりははるかに健全なように私には思えた。その栄光を誰が語ろう。この小石入りモルタルの壁を巡らした，二階建ての家々を。またぎ越すことのできる小さな門を。箱庭のような悪趣味な庭を。風がその隙間を吹き抜けた。砕石に埋もれた古い丘から吹いてくる風が，濡れタオルのように叩きつけてきた。風は赤い屋根の上に，灰色のスープを吹き付けた。そのスープの中に，テレビアンテナのアルファベット型浮き身が漂っていた。X，Y，H，T‥‥（pp.7-8）

エグザイルの宿命であろうか，故郷（home）という言葉が，バージェスの作品においては，しばしば重要な意味を持つ。*A Clockwork Orange*の主要な舞台となるF・アレグザンダー邸は「ホーム」と呼ばれる。*Tremor of Intent*の主人公のスパイ，ヒリアーは自分にとっての「ホーム」がどこにあるのかを，

つねに模索し続けている。デナムも「エグザイルが夢見る故郷」(Exile's dream of home) について考えるが，それはきわめて反語的な，皮肉に満ちたものである。「この大きな栄養豊富なプディングは，決して胃にもたれることがない。果物ばかりでできていて，粉は少しも使っていないのだ。イブニング・スタンダード紙に載っている，ショーの長いリスト，リッチモンドからウェストミンスターへの船旅，船のバーで飲む生ぬるいブラウン・エール，シンガポールのトイレほどの広さの地下のクラブで飲む午後の一杯‥‥」(p.2)

この口ぶりからもわかるように，デナムは故郷に対して少しもその種の夢を抱くことができない。それでも彼には，このようにわけもなく祖国を嫌うことを，多少後ろめたく思っている部分がある。彼は父に連れられて行ったパブで，ビールを飲みながら考える。「私は自分の半パイントのビターを，義務的にすすった。これが本当に好きなんだと，自分自身に言い聞かせながら。なつかしきイギリスの生ぬるいビール。エグザイルは一杯の泡立つビールを夢見るというのが習わしなのだ」(p.10)

こうしてデナムは，自分に要求される義務を忠実に果たそうとする。このミッドランズでは，彼は神秘の国東洋で一財産をなした「成金」(nabob) であり，それらしくふるまわなければならないのだ。むろんこのような「ふり」(pretending) は彼を疲れさせ，飽き飽きさせるだけである。

2．気のふれたイングランド

しかしデナムが何よりも嫌悪をおぼえるのは，イングランドを覆う「混乱」(mess) である。日本から帰って，英国に上陸すると同時に，彼はこの国に立ちこめる「混乱の腐敗した臭い」をかぎつける。

> ‥‥私はこの国に上陸するやいなや，この臭いを鼻孔に鋭く感じ，それはその後6週間ほど残る。それからその腐敗は，臨港列車にまとわりつく霧のように，だんだんと私の体に這い上がってくる。父の二階屋の居間であ

くびをしながらテレビを見たり，ときどき開店５分前にパブに着いたりしているうちに，私は新しい靴が足になじむように，この呪いが自分になじんでくるのを感じ，自分がこの混乱の一員となりつつあるのを感じる。(p.1)

「この混乱の性質をはっきりさせる」ために，デナムはこの手記を書いているのだが，彼はその性質をある程度見抜いている。それは「あまりに自由がありすぎるために生じた混乱」である。これは本質的に「民主主義的混乱」で，この国では誰もが平等で，何ひとつ強制を受けることがないかわり，秩序もなく，価値基準もなく，したがって物事の価値と意義も失われている。

デナムの用語では，「混乱」に対比されるものは「安定」(stability) であるが，自由と安定は両立し得ないものなのである。デナムは東洋の植民地で自分が目にした現象を思い起こす。そこでは，苦労の末独立を勝ち得た国の住民がなだれをうって，わざわざ「いまだ英国のくびきの元に苦しんでいる場所」へ逃げ込む。人は時には，自由以上に安定を望むものなのだ。人間は安定を得られるときには自由にあこがれ，自由を得られるときには安定を望むものらしい。

デナムが「この国」と言うとき，それはイングランドのみを指しているのであって，同じイギリス国内でも，ウェールズやスコットランドなどのケルト圏は意識的に除外されていることに注意したい。この物語の冒頭においては，デナムはケルト圏の周辺部と全ヨーロッパ，そしてアメリカ合衆国を，その混乱の一員に含めているが，経験を積むにつれて彼の考えは変化し，物語の終わり近くでは，イングランドは孤立性を強める。

ヨーロッパでは，人はなんと正気だったことだろう。‥‥（中略）‥‥ヨーロッパ，アイルランドとウェールズはその一部だが，そこにはイングランドは含まれていない。イングランドはひとりぼっちで気がふれており，さもなくば，アメリカ的で気がふれているのだ。(p.234)

結局，残ったのはイングランドとアメリカである。

混乱のイングランドに対する，もうひとつの焦点は，デナムの任地である日本に結ばれている。これは私たち日本人読者にとっては興味をそそられる点だが，バージェスは一度も日本に滞在した経験はなく，この部分は本から得た知識を元に書かなければならなかったと告白している。ともかく，日本はイングランドと対照的な安定の国，しかも植民地化を免れたことで，ある程度の自由のある国，そして東京は機能的な近代都市として，かなり好意的に描かれている。おそらく，この小説が書かれたのが現在だったら，これから35年を経て，今や立派に「アメリカ的で気がふれている」日本を安定のシンボルにしようとは思わなかっただろうが。

ただし，西洋に対する東洋は，日本あるいは日本人ではなく，ラジ氏というセイロン（現スリランカ）人の姿を借りて呈示される。しかし彼は，かつて大英帝国の支配下にあった国の人間で，正確には純粋に対立者とは言い難く，イングランドに上陸するやいなや，この呪いの犠牲者となる運命にある。

3．テレビとアメリカニズム

帰国したデナムを最初に悩ますのは，この混乱ではなく，むしろイングランド郊外の不毛さと退屈さである。彼を英国に連れ戻すのは，年老いた一人暮らしの父親の存在だけで，他にはひとりの知人も友人もいない。血縁者としては結婚している妹のベリルがいるのだが，この妹夫婦はともに俗物で，デナムや父との仲は冷え切っている。彼はまた亡くなった母親にも好かれておらず，母に対してなんら愛情を持っていない。ここにバージェスと彼の義母や義姉との冷淡な関係を思い起こすことは容易である。

デナムが父とともに招かれる，妹の家での日曜日の昼食のエピソードは，デナムの倦怠感をよく伝えている。

> 寒さでポケットに手を突っ込み，日曜日の閉まった店をむなしくノックする風に合わせて，踊るように足踏みしながらバスを待つ間，私は声に出し

てイングランドを呪った。タバコの空き箱，フットボールの予定表，バスの切符が埃とともに飛んできた——土曜日の亡霊たち。‥‥（中略）‥‥バスは日曜日の倦怠のあくびの中に私たちを呑み込んだ。そして私たちは日曜日の虚ろさの中で，がたがたぎしぎし音を立てながら，日曜日に揺られていった。(p.34)

妹の家のドアをノックすると，中からはにぎやかな笑い声が聞こえてくる。しかしそれはラジオのショー番組の観客がたてる笑い声であり，「それは私の怒りの堅パンの上に，ジャムを広げるように憂鬱を広げた」(p.95)。

しかし，イングランドの郊外生活の不毛さを何よりもよく表しているのは，土曜日ごとに，あたかも何かの儀式であるかのように繰り返される，父の居間での習慣である。土曜の夕，デナムと父は居間でテレビを見る。古い型のテレビでBBC放送は入らないため，彼らが見るのは「アメリカの警察暴力賛美」の番組である。デナムと父はこの番組を，換気の悪い部屋であくびをしながら見ている。このあとには愚かしいコマーシャルが続き，次のショーの女性司会者が現れたところでスイッチを切って，パブへ出かけるのが彼らの日課となっている。デナムはこの虚しさにうんざりし，その連鎖から逃れようとして，別室で本を読もうと試みるのだが，なぜか読書に集中することができず，結局おもしろくもないテレビの前に引き戻されてしまう。

このわびしい，しかし滑稽な一幕は，この当時のバージェスのひとつの信念を表している。彼にとっては，テレビとアメリカが英国に腐敗と堕落をもたらした二大要因なのだ。牧師は，人々がテレビばかり見ていて教会に来ないばかりか，教会の尖塔がテレビの受信障害になると文句を言うとぐちをこぼす。後半に起こる殺人事件では，目撃者の女性が助けを求めて隣家へ走っても，ちょうどテレビのゴールデンアワーに当たったため，誰ひとり出てきてくれず，警察へ通報しても，警官はテレビの見過ぎだろうと言って取り合ってくれない。

こういう風潮に対してバージェスはしっぺ返しを用意していて，彼の初期作品の主人公たちはしばしばテレビで発言の機会を与えられるが，そこでの発言は彼らの最も勇気ある英雄的行為と言える。しかしその効果は期待薄である。

*1985*のベヴ・ジョーンズの発言はカットされ，*The Doctor Is Sick*のエドウィン・スピンドリフトのそれは夢かもしれず，デナムの場合は無視される。しょせんテレビが伝えるものは絵空事であり，誰ひとりそれを真に受ける者はいないのだ。テレビを通じての反逆はまったくの徒労なのである。

しかし，混乱のイングランドに対比される，デナムにとっての理想郷のはずの日本にも，この混乱の萌芽は存在する。その原因はまたしてもアメリカである。デナムの日本人の恋人ミチコが，駐留米軍の子弟の若者たちに強姦されかかるのである。ワシントン・ハイツと呼ばれる米軍人の居住区（これは実在する）に住むアメリカ人家族を，デナムは次のように描写する。

> ····しかし，懲罰としては十分とは言えない原爆を製造したこの人種の，自分を一人前の男だと考える，もう少し年上のティーンエイジャーたちは，より満足の行く懲罰を考え出した。ミチコさんがその犠牲者に選ばれたのは不幸なことだった。(p.181)

このエピソードに，戦時下のロンドンで，妻のルウェラがアメリカ人ＧＩによって暴行されたという，バージェス自身の個人的体験を重ね合わせてみるのは容易である。しかし彼の怒りは私的なものではなく，彼の道徳的信念に根ざしている。

デナムはこの事件について，あくまでもプライベートなこととして多くを語りたがらないが，「私はアメリカにも，アメリカ人にも，なんら悪感情は持っていない」ということを強調する。それまでのデナムにとって，アメリカとは「ちょっと困ったところはあるにせよ，すぐれた，利口な国」であり，アメリカ人についても，多かれ少なかれ「自分と同類」とみなしていた。彼には若者たちを責めるつもりはない。ただ，「特大サイズのチョコレートミルクと，ジュークボックスのトランペットが，彼らの道徳に対する目と耳をふさいでしまったのだ」(p.182)。

デナムの怒りはそのような息子を作った男たちに向けられている。彼らは原爆を製造し投下したが，今では「民主主義のために働いている」のである。む

ろんバージェスはそのような偽善を許さない。彼らの息子たちは，単に父親のしたことを見習っただけなのだ。

この事件は，戦争という狂気のもたらした，一種の後遺症とでも言うべきものであり，イングランドを脅かしているアメリカニズムとは同列に語れない。イギリスは原爆やお仕着せの民主主義を与えられることはなかったが，反面，「チョコレートミルクとジュークボックス」，すなわち物質主義の攻撃にさらされている。

4．非テレビ視聴者たち

*The Right to an Answer*に登場するミッドランズの住民は，大まかに言ってテレビを見る人々と見ない人々（TV-watchers and non-TV watchers）の二種類に分けられる。これについては次のような言葉がある。「テレビ視聴者は生ける屍（ゾンビ）だ。そうでない人間は気が狂っている。そしてその両者とも，私のことを気が狂っていると思っていた」(p.225)

テレビ視聴者というのは，デナムの父や妹夫婦をも含めた大多数の人々で，この世界の混乱の担い手たちである。一方，非テレビ視聴者とは，古き良きイギリスの精神の体現者，もしくは現代英国の堕落の告発者であって，それはパブ「ブラック・スワン」の主人テッド・アーデン，ブラック・スワンの下働きセルウィン，詩人エヴァレットらを指していると思われる。

この物語の副旋律としてシェイクスピアの物語が隠されている。テッド・アーデンはウィリアム・シェイクスピアの母方，アーデン家の血を引く人間で，その容貌，性格ともにシェイクスピアを思わせるところがある。デナムの観察によれば，「アーデン家は強い遺伝力を持っており，それにくらべればシェイクスピア家の血は水のように薄い」ことは明らかで，テッドは肖像画に見るシェイクスピアそっくりの顔つきをしている。彼自身は文盲に近く，ひどいミッドランズ訛りで話すのだが，シェイクスピアが受け継いだであろう，アーデン家の魅力に恵まれている。テッドは人をして，何か彼に親切にしてやりたいと

いう欲求を起こさせる不思議な魅力の持ち主で，ブラック・スワンにはいつも彼に贈り物をする人々が列を作っている。もちろんデナムも，すぐにこの人物に魅了される。

この小説の最後の章で，バージェス独自の奇妙なシェイクスピア伝が，テッドの口を通して語られる。それによれば，かの「ダーク・レイディ」とは文字通りの黒人女で，シェイクスピアは彼女と恋に落ち，子供までもうけるが，彼女に捨てられて梅毒をうつされ，失意のうちに死んだという。これをテッドはアーデン家に代々伝わる伝説として語る。このエピソードは，後に*Nothing Like The Sun*（1964）というシェイクスピアを主人公とした小説でも再び繰り返される。ちなみにテッド・アーデンには同名の実在のモデルがおり，それは結婚後バージェス夫妻がしばらく住んでいた，バンベリー近郊の村のパブの主人である。黒人女にまつわるエピソードもバージェスが現実のテッド・アーデンから聞いた話が元になっている。

テッド・アーデンよりさらにミステリアスで奇怪な人物がセルウィンである。白痴めいたセルウィンは，特殊な視力と予言能力を与えられている。彼は死人が墓から起き上がるのを目撃し，人の頭の周囲にそれぞれ色の異なるオーラのような光輪を見，イギリスにいながらセイロンのデナムを透視し，月の裏側に人が住んでいるのを見る。そして彼の予言は次々に的中する。

セルウィンはギリシア神話の盲目の予言者，ティレシアスを連想させる。彼は盲目ではないが，彼の眼鏡がしばしば光を捕らえて光るので，盲人のような印象を与えるのである。「彼の白痴眼鏡は光で満たされていた」（pp.18-19）「盲目の電光の目で私を見上げながら」（p.21）　「明るい盲目の眼鏡を私に向けた」（p.126）

ティレシアスは両性具有者であるが，セルウィンもアポロンの巫女シビュラにたとえられている。エリュトライのシビュラはアポロンに長寿を与えられるが，若さをもらうことを忘れたために，年とともに体が枯れしぼみ，壺の中に入れられ，子供たちが「シビュラよ，何がほしいか？」と訊ねると，「死にたい」と答えたという。

この話はＴ・Ｓ・エリオットの*The Waste Land*の序詞に使われている。さ

らに，*The Waste Land*第3章“The Fire Sermon”には，予言者ティレシアスが登場する。むろん，セルウィンは意図的に投入されたキャラクターである。というのも，*The Right to an Answer*の主題，価値基準の喪失による現代の精神的不毛と頽廃は，*The Waste Land*の主題と共通するものだからだ。もちろん，時代変化が加速度的な二十世紀においては，エリオットのロンドンとバージェスのミッドランズにはかなりの隔たりがある。バージェスはその点を踏まえた上で，テレビやスワッピングといった今日的材料を用いて，彼なりの「荒地」を描き出すのである。

*The Waste Land*との関連は捜せば他にもいくつも見つかる。ティレシアスが透視するタイピストの情交は，さまざまな形の姦通として，繰り返し現れる。“A Game of Chess”で印象的に繰り返される，パブの閉店を告げる声は，テッドの口から何度も聞かれる。*The Waste Land*の最終章ではウパニシャッド哲学が引用されるが，*The Right to an Answer*には，ラジ氏というヒンズー教徒が登場する。さらにセルウィンの名は，*The Waste Land*の推敲者でもあるエズラ・パウンドの自伝的長詩*Hugh Selwyn Mauberley*から取られたものであることは間違いない。

もうひとりの非テレビ視聴者は，デナムが妹の家で紹介される，詩人のエヴァレットである。彼は若いときにはGeorgian Anthologyに詩を寄せたこともあるが，現在は地方紙の記者として働く貧乏詩人である。デナムの文学好きを知ったエヴァレットは，詩集を出版する金を出資してくれとデナムに頼む。パウンドについて語るときのエヴァレットは，眼鏡が光って，デナムにセルウィンを思い出させる。

これでこの小説には三人（作中人物のエヴァレットを含めれば四人）の詩人が登場したことになるが，実はここにはもうひとりの詩人の存在が隠されている。それは，この小説のエピグラフとして引用されるウィリアム・ブレイクである。

> 「くたばるがいい」とスコップレルは言った。「こともあろうに，結婚を愚弄するとは」[3]

*An Island in the Moon*は，ブレイクが当時のロンドンの学者や知識人を皮肉った風刺詩であるが，「月」とは荒涼たる土地，ないしは狂気を象徴するものであり，「島」とはイギリスに他ならない。つまり『月の中の島』は，ブレイクの目に映った「荒地」，もしくは「気のふれたイングランド」と考えられる。

さらに，幻視者にして予言者のセルウィンは，言うまでもなくブレイクを連想させる。エピグラフにある結婚について言えば，ブレイクは愛妻家として有名だが，この小説の非テレビ視聴者たち，テッド，セルウィン，エヴァレットは，この世界では数少ない，結婚を尊重する人々である。デナムは他の「結婚を愚弄する」人々に対して激しい怒りをおぼえる。そして，この小説の最大のテーマは，結婚，ひいては愛の価値の下落というところにある。シェイクスピアからブレイクを経て，エリオット，パウンドに至る，英詩の偉大な伝統の継承者たちは，ここでは「愛の死」に警鐘を鳴らす預言者なのである。

5．愛のゲーム

ブラック・スワンで，デナムは彼の父と同業の印刷業者，ウィリアム・ウィンターボトムという男に紹介される。この見るからに貧相で気弱な男は，魅力的な北欧型ブロンド女性，アリスを妻としているのだが，彼女はスポーツマン・タイプの電気技師，ジャック・ブラウンロウと不義の関係にあり，一方ブラウンロウの妻は，チャーリー・ウィッティアーという独身男と通じている。この奇妙な4人組は，週末ごとにテニスと称して，公然と変則的な夫婦交換を楽しんでいるのだが，気弱なウィンターボトムは，それを知りつつも異議を唱えることすらできない。

当然ながら，デナムはこの結婚制度の軽視と，テニスと同じ単なるゲームに成り下がってしまった愛の価値の下落に激しい憤りをおぼえる。もちろん，デナムには姦通を非難する資格はない。彼は気楽な独身者であり，姦通を犯すこ

とさえできない立場にあるからだ。日本に恋人がいながら，娼婦を買うことにも，なんら良心の咎めは感じない。しかし，彼の道徳心は結婚の神聖さに執着する。

もうひとりの結婚の破壊者は，詩人エヴァレットの娘イモウジェンである。シェイクスピアの*Cymbeline*のヒロインの名をもらったこの女性は，その名に背いて，一方的に夫を捨てて父の元へ帰ってくる。

バージェス作品の主人公にふさわしく，言語についてのオブセッションを持っているデナムは，アリスの旧姓を知りたがり，それがホア（Hoare　売春婦whoreと同音）であることを知って納得する。そんなアリスが，まじめ一途で不器用なウィンターボトムのような男とうまく行くはずがない。しかし彼女は結婚を放棄する意志はまったくない。ブラウンロウとの情事はただのゲームなのである。その点，彼女にはなんの自責の念もない。

一方のイモウジェンは，年の頃もアリスとほぼ同じで30歳ぐらい。アリスに劣らぬ美貌の持ち主で，勝ち気で自己中心的な性格もアリスと似ている。「パブ経営者と詩人は，みごとな足と完璧な姿態の持ち主で，大声で笑う，自信を香水のように身にまとった，同じ種類の娘を育てたのだ」(p.102)

イモウジェンとアリスは，このようにきわめて似通ったところがある女性だが，微妙な差異もある。それは詩人の娘とパブ経営者の娘という，生まれの違いにあるのかもしれない。庶民的で社交的なアリスは，良かれ悪しかれ女らしい女，いわゆるかわいい女であるのに対し，イモウジェンは孤高で気位が高く，人を寄せ付けない冷たさがある。しかし，アリスとイモウジェンの最大の違いは結婚に対する態度にある。アリスが浮気を続けながらも，家庭という安定にしがみついているのに対し，イモウジェンはそれをあっさり放棄してしまうのだ。言い換えれば，アリスにとっての恋はゲームに過ぎないが，イモウジェンにとっては遊び以上のものなのである。その表面的な冷淡さの下に隠されたイモウジェンの情熱的性格は後に明らかにされる。

「イングランド郊外が私に押しつける無責任さに，死ぬほど気分が悪くなった」デナムは，予定を繰り上げて商用でロンドンへ出かける。「酒，夕食，酒，

テレビ，映画。ああ，なんたる退屈。舞台を変えよう。ロンドンへ行こう。ロンドンではどうだろう？　酒，昼食，酒，夕食‥‥」(p.60)

彼はロンドンでひとりの娼婦を買う。この年になるまで，ひとりもイギリス人の女を知らないデナムにとって，この女は彼の体験する最初のイギリス女になるはずだったが，彼女は金を受け取ると，バスルームに行くと言ってそのまま姿を消してしまう。しかし，デナムはこの詐欺行為にあっても，たいして気分を害したようには見えない。彼はイギリスを好きになれないのと同様，イギリス女性とも相性が悪いらしい。

彼がこの年まで独身でいる理由も一考に値する。デナムはイギリス人女性，ひいては全女性に対して，一種のコンプレックスを持っているように思われる。デナムにとって，イギリス人女性は純粋にエキゾチックで神秘的な存在である。(デナムに言わせるとケルト人女性は違うらしい。彼はケルト人は東洋人に近いと述べている)　その上，女は彼にとって「どうにも我慢がならない」存在である。彼がこのような女性観を形成するのに貢献したのは，彼が知っている数少ないイギリス人女性，すなわち彼の母と妹であったことは容易に想像がつく。

このようにデナムは女性に失望し，女性を肉欲の対象以上のものにすることをあえて避けているのだが，その反面，彼には途方もなくロマンチックなところがあって，理想の女性，理想的な結婚にあこがれを抱いている。そしてそれを部分的に，東洋人女性の中に見出しているらしい。同国人をエキゾチックとみなすのは，彼の内面に恐怖と憎悪があるからで，本質的にエキゾチックな東洋人には，虚像としての余地があるからだろう。デナムには東京にミチコという恋人がいるのだが，彼女を真に愛しているのかどうか自信が持てず，結婚までは踏み切れない。

デナムはコロンボに赴任する若い社員に同行せよという社命を良い口実に，逃げるようにしてイギリスを離れるが，クリスマスをコロンボで過ごして，年が明けてから帰国したデナムを待ってきたのは，ウィンターボトムとイモウジェンが駆け落ちしてロンドンに来ているという知らせだった。二人に会って話を聞くうちに，デナムには事の次第が呑み込めてくる。初対面でイモウジェン

を自分の同類と見抜いたアリスが，夫と彼女を自分たちの週末のゲームに引き込もうとしたのである。案の定，ウィンターボトムはたちまちイモウジェンと恋に落ちたが，そこでアリスが予期しなかったことが起きた。

> しかしアリスは，ウィンターボトムがセクステット向きというよりは，ソナタ向きの男であり，そもそもセクステットは，気楽な週末の音楽には大きすぎる編成だということに気づくべきだった。そこでまもなく，一方の部屋でソナタが，他方の部屋でカルテットが奏でられ始めた。そしてある日，ソナタ奏者は自分たちがプロになれるくらいうまいと考えて，楽譜とポータブル楽器ひとつを携えて，広い世間に逃げ出したのだ。（pp.102-103）

つまり彼らはこのゲームのルールを破ったのである。

ウィンターボトムとイモウジェンは奇妙なカップルである。デナムは彼らのアクセントが表している社会的ギャップに気づく。ウィンターボトムがアリスと似たタイプの魅力的なイモウジェンに惚れ込んだのはわかる。しかし彼女がなぜ，ウィンターボトムのような風采の上がらない男に恋したのかは疑問である。デナムはその理由を意地悪く推理する。すなわちイモウジェンは，ウィンターボトムに父のエヴァレットと似た部分を見出したのだ。「彼を見ているとパパのことを思い出すのよ。私は彼の面倒をみてあげるわ」　そしてそれ以上に，イモウジェンを魅了したのはロンドンという町の誘惑だった。はっきり言って相手は誰でもよくて，誰かといっしょにロンドンへ駆け落ちするということが，彼女にとってはかんじんだったのだ。このようにデナムは，二人が主張する愛というものを信じない。こういう冷笑的な見方はデナムの特徴だが，それ以上に，そこには本人すら意識していない，イモウジェンに対する思慕の念と，ウィンターボトムに対する嫉妬が読みとれる。

真冬だというのに暖房もない安ホテルの一室で，朝食代わりの一本のチョコレートバーを二人で分け合って食べるというようなみじめな生活に，安楽な暮らしをなげうってまで飛び込むだけの勇気はアリスにはないものである。デナ

ムの皮肉な見方にもかかわらず，イモウジェンの「恋」には真摯で一途なところがある。デナムが彼女に惹かれたのも，そのせいかもしれない。バージェスの小説にしばしば登場する，このようなヒロインたち――勝ち気で情熱的で，炎のように激しい性格の女性――は，バージェスの最初の妻ルウェラがモデルであると考えられる。

イモウジェンとウィンターボトムがデナムを必要としたのは，単に彼がロンドンにおける唯一の知人であるからばかりではない。身ひとつで逃げ出してきた彼らは金を必要としていた。ウィンターボトムはこの町で印刷屋を始めようと考えており，それにはまとまった金が必要だ。そして彼らの目にはデナムは裕福な成金なのだ。金を貸してくれというウィンターボトムに対して，傲慢なイモウジェンは貸すのではなくただでくれと言い張る。「パパにあげるお金があるのなら，後生だからそれをいちばん必要としている者にちょうだい」

彼らの道徳的無責任さに憤慨しているデナムは，これをきっぱり断り，彼らにそれぞれの配偶者の元へ帰るように説得するが，二人は聞き入れず，あまつさえイモウジェンは，ウィンターボトムがトイレに立った隙に，金と引き替えに肉体を提供しようと申し出る。デナムはこれも断るが，彼女の強引さに押されて，結局75ポンドを与えてロンドンを去る。

この一件で，デナムは道徳的憤り以上に，取り残されたような寂しさを味わう。「‥‥しかし私はだまされたような感じもした。物事に取り残されたような感じ。私の見ていないところで，こんなにも多くのことが進行しているというのはフェアではなかった」(p.84)　確かにこのイングランドでは，人々はみな彼に何かを要求するだけである。そして金をせしめたあとでは，誰もデナムを一顧だにしない。

しかし，デナムが感じるこの疎外感は，彼のイングランドに対する気持ちが，徐々に変化していることを示している。イモウジェンを知る前のデナムなら，こんな感じ方はしなかったはずだ。彼にはこれまでになかった種類のノスタルジアが芽生え始めているのである。

6．見捨てられた神

The Waste Land第3章の終わりでは，アウグスティヌスの『告白』が引用され，信仰による救いの可能性が暗示されている。この問題についての「宗教作家」バージェスの態度はいかなるものだろう。彼もまた，この荒廃のイングランドが神によって救済されると信じているのだろうか？　このミッドランズでも，宗教は見捨てられた存在である。デナムの父のゴルフ仲間である高教会派（ハイチャーチ）牧師は「現代英国の犠牲者のひとり」であり，目に涙を浮かべてデナムに訴える。「この頃では誰も我々を必要としてはおらんのですよ。誰ひとりとして。日曜だろうが，月曜だろうが。人が牧師を必要とするのは，いまいましくも生まれるときと，いまいましくも死ぬときだけなのです」(p.205)　彼はこの絶望のはけ口として，病的な過食症に陥っている。

ウィンターボトムとイモウジェンの駆け落ち事件をきっかけに，デナムは道徳について考え始める。彼はこの問題の解決の糸口を求めて，ミッドランズへ向かう帰りの列車の車中で，偶然同席した見知らぬ牧師に「現代世界における道徳観」についてのプロの意見を請う。牧師はトマス・アクィナスやアウグスティヌスを引用して，道徳について説くが，「それはウィンターボトムとイモウジェンを，道徳観念の中にしっかりはめ込む助けにはならなかった」

デナムは牧師に失望して，それまで牧師の手前をはばかって尻の下に隠していたエロ雑誌を取り出して堂々と読み始める。列車が駅に着く頃には，彼は次のような結論に達している。「彼らが罪を犯したのは，他ならぬ安定に対してなのだ。それならば，なんで私がこんなにも憤慨しなくてはならないのか？」(p.104)

そもそもデナムが道徳問題に深入りするきっかけを作ったのは，コロンボのホテルで知り合ったアヘンの運び屋レンであった。奇妙な親しみを持ってデナムに近づいてきたレンは，バージェス作品ではおなじみの哲学を持ったアウトローである。しかし，レンの場合，その哲学は神学に傾いている。神を信じる悪人というのは，バージェスの発明というわけではない。レンはグレアム・グ

リーンの登場人物を思わせる。それを裏付けるかのように，皮肉にもグリーンかぶれの男という設定になっている。

二度目にシンガポールで再会したとき，レンはグリーンについて，「彼はいわば，真の塵にまで身を落とすことによってのみ，人は神に近づけると言っているように思う」(p.168) と語る。熱烈なグリーン信者であるレンは，自らそれを実践する。彼はそれまで勤めていた保険会社を辞めて，麻薬の密売という世界に飛び込んだのだ。

「‥‥ともかく俺はそれまで保険会社にいた。きわめて立派な職業だ。だが，こういった本が，俺にそれではいけないと教えてくれたんだ。それでは決して，真に重要なものに近づくことはできないと。つまり罪や罰や，宗教的真実や，あらゆる犯罪にな。それは二階建ての家に住んで，土曜日に庭を散歩したり，日曜の晩パブから帰って冷肉を食うような生活に導くだけだ。そんなことをしていては，何ひとつ価値あるものには近づけんのだ。だから俺は脱出した」(p.168)

レンとデナムは現代の道徳的堕落と，人は誰も信用できない——特に女は——という点で意気投合する。しかしレンは，人々の無責任な行為に対しては，罰が必要だという信念を持っている。暴力に反対するデナムに対して，レンはこう反論する。「だが，暴力と罰は別物だ。人に対してあまり寛大にしちゃいかん。それは奴らを元気づけて，同じ悪さを続けさせるだけさ。何かいい，厳しい罰を与えてやるんだ。何かあとに残るようなのをな」(p.73) この論理の根拠は次のようなものである。

「しかしなんにもやらなかったら，釣り合いも生まれない。俺たちはひとつの秤を与えられているようなもので，それを使わなくちゃならんのだ。その秤の一方の皿に何も載せなかったら，もう一方にも何も載せられない。そいつは保険会社から帰って，庭を散歩するようなもんさ。しかし間違ったことをすれば，秤の一方の皿に何か重いものが載ることになる。そして

罰を受ければ，秤は使われたことになる。そのために俺たちはここにいるのさ。俺はそう思う」(p.169)

最初の出会いの時，デナムは何気なく，彼がロンドンで籠抜けを食わされた売春婦のことをレンに話す。次に会った時，レンはその女を捕まえて罰を与えてやったという話をする。彼の仲間のひとりがロンドンで同じ被害に遭い，正義の怒りに燃えたレンは，その女を捜し出してリンチを加えてやったというのである。

その凄惨な話を，いささか鼻白みながら聞いていたデナムは，その女の言い分では，印刷屋のボーイフレンドのためにやったというのを聞いて逆上する。むろんイモウジェンの他にそんな女がいるはずはない。金に困ったイモウジェンは，ついに危険な綱渡りを始めたのである。「急に危険な存在となった，太った中年のビジネスマン，デナム」は，真に危険な麻薬の密売人のレンに向かって，「この，神を気取る自惚れ屋の豚め！」と叫ぶ。もちろんレンには，なぜデナムがそんなに怒るのか理解できず，この「罪深い人間性に対する鞭」レンは，威厳を持って退場する。

レンは明らかにグリーン的人物の滑稽なパロディで，このエピソードにはグリーンのカトリシズムに対する揶揄の響きがある。もちろんバージェスが作家としてのグリーンを敬愛しているのは確かで，この翌年に出版された*Devil of a State*はグリーンに捧げられている。

しかし，同じカトリック作家といっても，バージェスとグリーンには大きな違いがある。それはカトリックとして育ったバージェスと，成人して後，カトリックに改宗したグリーンとの違いに由来するものであろう。同じ事がT・S・エリオットにも言える。

バージェスの内部には，つねにカトリックから離れようとする部分と，カトリックへの戻ろうとする部分の相克がある。それがグリーンやエリオットのような，アウグスティヌス的見解に触れると，かえって反アウグスティヌスの立場へ傾くようだ。バージェス自身認めているように，彼の立場は絶えずアウグスティヌスとペラギウスの間をふらついている。結論を先に言えば，この小説

におけるバージェスの態度は，ペラギウス的自己救済に傾いている。

さらに，かなりの年輩になってから文学活動に入ったバージェスには，一種の在野精神のようなものがあり，それは彼の主人公にも反映されている。中でもデナムは最も世俗的な主人公で，車中の牧師のような権威的宗教家に対しては，強い反発を示す。明らかに彼はこの牧師の神，レンの神にすがるようなタイプの人間ではない。彼は神の恩寵を退けた。それでは彼はどんな形で自らを救済するのであろうか。この不毛のイングランドに救いの道は残されているのだろうか。

これについては後に譲って，次にこの小説のもうひとつの重要なテーマについて考えてみたい。

注

(1) Anthony Burgess, *Little Wilson And Big God* (Heinemann, 1987), p.438

(2) 以下，文中かっこ内の引用ページはすべて，1978年Norton判による。

(3) William Blake, *An Island in the Moon* (1784)

〈寄生〉と労働者階級

横　田　由起子

I consider myself working class. We're lazy, good-for-nothing bastards, absolute cop-outs. We never accept responsibility for our own lives, and that's why we'll always be downtrodden. We seem to enjoy it in a perverse kind of way. As working class, we like to be told what to do, led like sheep to the slaughter. I loathe the British public school system with a passion. How dare anybody have the right to a better education than me just because their parents have money! I find that vile. They talk this sense of superiority, and they do have it. The upper classes have all the right connections once they leave school, and they parasite off the population as their friends help them among. You never see that with the working class. If you have any kind of success being working class, your next-door neighbors or your best friends will turn around and hate you instantly.[注1]

おれは労働者階級だ。おれたちは怠け者で役立たずだし，まったく卑しい人間だ。おれたちは生活に決して責任を追うことがないから虐げられている。そんなことをひねくれながらも楽しんでいたりするんだ。労働者階級だから，指図されることを好み，屠殺場行きの羊みたいに扱われたいんだ。イギリスのパブリック・スクールシステムは閉口ものだ。親が金を持ってるからって，なんでおれより上等な教育を受ける権利があるって言うんだよ。むかつくぜ。やつらは自分たちがおれたちより上なんだってことをひけらかし，実際それに甘んじているんだ。上流階級のやつらは学校を出たら好都合なコネを使いまくって，友人に助けられながら庶民に寄生して生

きていくんだ。労働者階級では考えられないことだ。労働者階級の人間が成功すれば，必ず隣近所のやつにも友達にも背を向けられて，一瞬にして嫌われちまうのにさ。

上の言葉は，1994年にイギリスで出版されたジョン・ライドンの自伝『スティル・ア・パンク』(John Lydon, *Rotten*) の中の一節である。筆者はここで，自分がまず労働者階級であることを宣言してから，その対義語として上流階級を用いている。彼によれば，上流階級は庶民に〈寄生〉して生きている人間のことである。本来〈寄生〉とは，自分ではあまり働かずに，他に頼り他に依存して生きる人を指して比喩的に用いられる言葉である。そういう意味で言えば，確かに手に汗して働く必要のない上流階級の人々は，労働者階級には〈寄生〉している階級に映ることであろう。すると，〈寄生〉している階級の対局に位置する労働者階級は，彼によれば〈寄生〉していない階級である。しかし，彼の言葉にある労働者階級の「怠け者で役立たず」であり，「生活に決して責任を負うことがない」という性質は，〈寄生〉という言葉に含まれる侮蔑的な意味，つまり働かず他から恩恵を受けていながらお返しをしないという意味と重複し矛盾する。本塙はこの矛盾を注意点として捉え，〈寄生〉を労働者階級を捉えるキーワードとして論ずる試論である。

Ⅰ 〈寄生〉の背景

○比喩的表現

人間以外の動物を，その習性からある種の人間に対して比喩的に用いることは，多くの言語の共通点である。中でも他からかすめ取って我がものにしたり，自分の利益にしてしまう人に対しては，人間の目に映る残酷さや狡猾さのためにハイエナ，ハゲタカ，寄生虫などの動物が用いられる。ハイエナは死肉を食い家畜を荒らすという凶暴性のため，他人の金銭や利権を貪る人間に対して用いられ，英語でもhyenaは強欲な人，裏切り者などを指して使われる。また，

ハゲタカは日本では馴染みの薄い鳥であるため，比喩として用いられることは少ないが，英語のvultureははるか上空から狙った獲物を間違いなく捕まえることから，貪欲な人，強欲な人，思いやりに欠ける人を指すことがある。

さて，寄生虫に関してはどうであろうか。寄生虫は，一般に人間を含めた動物の体内に寄生するものから，広くノミ，シラミ，蝿，アブラムシなどの体外に生活しながら，実は動物の栄養分などを吸収し人畜に被害を与えるものまでを指す。日本語では，〈寄生虫〉は自分ではあまり働かずに他に依存して生きている人を見下して言う語である。川柳には「あぶらむし折々湯屋の桶を積み〔柳多留二〕」とあるが，隣近所のよしみで銭湯に裏口から出入りし，金を払わないで湯に入れてもらう人のことを「あぶらむし」と呼んでいたようである。[注2]〈あぶらむし〉は金を払わない代わりに洗い桶を積む。〈寄生虫〉を意味する“parasite”は元々古代ギリシャにおける太鼓持ちのことを指した語で，冗談や軽口で興を添え，そのほうびとして食事のごちそうに預かることを職業とした人を意味していた。〈あぶらむし〉と“parasite”は利益と労働の順番こそ逆ではあるが，労働が伴うという意味では同じである。両者は〈小さな労働で大きな利益を得る者〉という意味であろうか。

“parasitic”には〈へつらう，おべっかを使う〉という意味も含まれる。〈寄生虫〉を意味する単語のうち“vermin”という語あるが，こちらのほうはもっと差別的な意味，害虫としての意味あいが強い。人間のくず，世の中にいなくても，もしくはいないほうが良いと思われる人間に対して使われる。たとえば，ジョナサン・スィフトの『ガリバー旅行記』(Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, 1726) においては，ガリバーが巨人国を訪れ，巨大な体を持つこの国の王に英国の政治について説明する。すると国王は全てを聞き終って，イギリス人の大多数は，“the most pernicious race of little odious vermin that nature ever suffered to crawl upon the surface of the earth”[注3]（「自然がこれまでに地球上を這うことを許した小さな憎むべき寄生虫のうち最も有害な種」）だと結論する。ここでは〈寄生虫〉は徳を重んじることがなく，悪徳に染まった腐敗した人間のことであり，そのような人間が世にはびこり，得をするような社会は残念なことだと王は考える。

“parasite”という言葉が〈寄生虫〉に用いられた由縁は，〈食〉と関連があるように思われる。古代ギリシャでは“parasite”という職業の人がおり，饗宴で皆を笑わせて食っている。一方寄生虫はアダムの体の中で作られ，肋骨とともに種がイヴに移されたものであるという説が信じられたことがある。科学が発達し生態が明かにされるまで，感染経路がわからないのにいつのまにか体内に入り込むか，知らぬまに湧いていて，体内，もしくは食物やごみから栄養分を取ってしまうこの生き物は，まさに謎であった。〈食〉を得るための労働が社会の何にも役に立っていないような生き方をしていることにおいて両者は結び付けられている。

○市民とは何か

日本において労働者階級という言葉は，現在なんらかの階級意識を持った人々，またある主義を信奉する人々によって使われることはあっても，自らを「労働者階級出身です」と言うことはない。たとえば上流，中流，下層といった階級が有産・無産，もしくは給料の額の差などによって存在するとしても，滅多に使われる言葉ではない。日本には，今では使われることがなくなったが〈貧民一般〉を意味する〈細民〉という言葉があった。大正三（1914）年から翌年にかけて永井荷風によって書かれた『日和下駄』というエッセイには，「失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任の楽境」である薄暗い路地に「細民」が棲息しているとある。(注4)「怠惰」と「無責任」という言葉は，冒頭のライドンの言葉と重なるものがあるが，日本の，特に東京（江戸）といった都市に生活する貧者に関しては，貧しい＝怠惰という図式が古くから存在していたようである。

江戸でもロンドンでも大火災が起きた17世紀半ば，ロンドンにおいては煉瓦や石造りの家屋を建築すること，道幅の整理，新しい運河の建設などの不燃化政策が取られた。それは，16世紀末に行われた新河川事業と同じ理由によるものであった。つまり，前者は「大伝染病を生む不潔で，不健康な水を使用することを余儀なくされている（略）貧民たち」(注5)のために都市を整備しようというものであり，後者は「市民の生命や生活には値うちがあり」，市民の

健康の「改善のために相当の財政負担」をしなければならない，という市民尊重の思想のためであった。[注6] もちろんこの都市改革は，財政上の困難や，急激に増える人口，そして金儲け主義に走る建築家による不良家屋の建設，道端にごみを投げ捨てる住民たちによって必ずしも成功したとは言えない。一方江戸においては，火災があいついだ頃，幕府は改善策をとらなかった。江戸は農村からの出稼ぎ労働者であふれている。結局「掃き溜め」状態である江戸において，町人は軽視され，貧民を分散させるために火事はその有効な手段として使われた。「その掃き溜めがどんなに悪い生活環境で火災が頻発しようが，それを根本的に改善しようとする政策は出てこなかった。」[注7] もともと長屋は，農村からの出稼ぎ労働者の仮の住まいに端を発しており，永住を目的として建てられたものではなかったが，その設備の不十分な長屋が後に永住目的の労働者の家屋のスタンダードになっていった。やがてそのような長屋がスラムを形成していったが，都市を栄養にただむさぼり食う人々に対して幕府は冷たい態度であった。また，こうした都市が生む利益を餌にしてその恩恵に預かる人々を非難する声も強かった。貧窮者対策や福祉政策は，貧しい者を怠惰にさせ，彼らの独立心の妨げになるという口実のもとに立ち後れ，新憲法成立直前まで政府によるものはなかった。

それでは増え続ける都市型貧民に対して，政府はどのような対策を講じてきたのであろうか。明治に入って14年（1881）の1月26日に神田から両国一帯にかけて大きな火災があった。火元の東隣には橋本町というスラムがあった。貧しい者が住む町という他に，ここは犯罪の格好の場所となっており，火事による焼失が政府に再開発の願ってもないチャンスを与えた。政府は，元の住民である貧窮者を〈散布〉するという考えでスラム一掃作戦に出た。政府の〈散布〉型スラム対策のような考えは，10年後の明治24年，ロシア皇帝来日に際しても取られた。乞食を長屋に収容して外出を禁じ，臭いものに蓋をするだけで，臭いの元をどうにかすることはなかった。明治23年，第一回帝国議会では政府提出の窮民補助法案が真偽されたが，否決されている。

『東京の下層階級』の著者の紀田順一郎は，「昭和戦前までの社会福祉が欧米先進国に比して著しく遅れた一因として，」国力の差の他に，「根本的には日

本人の意識の奥深いところにある貧者に対する倫理的な蔑視ということにも大きな原因があったと思われる」[注8]と言う。そして東京市域の拡大につれて政府がスラムを周辺地区に追放してきたことを挙げ，「追放」と「散布」こそは，近代日本の貧困政策の柱だったと指摘する。[注9] こうした散布作戦が続き，都市の整備は遅れ，ひいては第二次大戦後まで上下水の整備はなされなかった。

細民とは，貧者を十把一からげにまとめた言葉である。職に就いていても自らの延長にあるのは，精進して成功するか〈怠惰〉とささやかれるどん底の失業生活である。貧民にとって○○階級というカテゴリーの無い社会は，境界の無いことによって常に自分の延長に最高と最低の見える社会と言える。

過去において階級というものが意識させられる状況がなかったわけではない。昭和初期には，公私の救護なくしては生活不能の者を〈第1種カード階級〉，辛うじて生活しうるが，事故があればたちまち生活不能になる者を〈第2種カード階級〉と区分し，〈東京方面世帯票〉と称する低所得者調査カードが存在した。〈カード階級〉とは，救護法の対象となる人々の総称で，昭和初期には流行語であった。そして〈カード階級〉の世話をしていたある方面委員（現在の民生委員の前身）は，「いたれりつくせりのサービスに対して「カード階級」の人々は国家社会に対して恩を忘れてはならず，このような設備は彼らに依存心を起こさせる」と言う発言があるように，[注10] ここでも，カード階級の人は，怠惰と結びつけられている。あまり働かず都市を栄養にむさぼろうとする者，これが貧民に対する一般像なら，まさしく貧民は社会の〈寄生虫〉と形容しても良いのかもしれない。そして貧民は努力すれば，つまり〈怠惰〉でなければ〈寄生虫〉になることを免れることのできる希望を持たされた人々であった。

○虫と〈希望〉

日本語には，虫がいい，虫が起る，虫がおさまらない，虫が知らせる，虫が好かない，虫の居所が悪いなど，古くから虫に関する表現が多く，これらは西洋にはあまり見られない。これらの虫は，体内に寄生する虫を連想させるが，意味としては第六感のことである。また，虫は古くから絵画の題材になっていた。西洋には同じ様な習慣はない。また，歌については，蚕のように商品とな

っていて飼われていたものから，秋に鳴く虫，夏の蟬など自然の中に見られる虫の様子を詠ったものなどいろいろある。さらに，甘茶ですった墨で虫よけの歌を書いて便所や流し元に張っておくとうじ虫がわかないと信じられていた。[注11] こうした迷信にはなんらかの根拠があったはずだが，形式化および簡略化によってお守りのようになってしまい，効力はさして期待されないまま習慣として残った。病気の平癒は水垢離をしたりもするが，神仏に何かを祈願する場合には，永井荷風が「聖天様には油揚のお饅頭をあげ，大黒様には二股大根，お稲荷様には油揚を献げるのは誰も皆知っている処である」と言うように，さまざまな決まりがある。永井荷風は，江戸に存在する様々なこれらの淫祠について，「無邪気でそしてまたいかにも下賤ばったこれらの愚民の習慣は，（中略）限りなく私の心を慰める。」[注12] と言う。人々は縁起をかつぎ，八百万のものに願をかけてきた。

○貧民と〈不衛生〉

一方英国ではどうであったであろうか。日本は上述のように，自然は生活の中に広く取り入れられ，互いに調和をとって適応していく相手であるが，西洋では自然は常に征服すべき相手であった。西洋の歴史の中でペストの流行が再三再四あったことがどれだけ国益を左右したかは言うまでもないことである。ジョナサン・スィフトの『ガリバー旅行記』には，小人の国で，死体から発する悪臭で悪疫が起こるであろうことを恐れて巨体のガリバーを殺さないほうがいいのではないか，と小人たちから提案が出るように，為政者にとって悪疫が及ぼす被害はなんといっても避けたいものであった。

ペストの流行が近代的行動様式を作ったという意見がある。つまり，〈隔離〉，〈衛生〉，〈共存〉といったものは西洋人がペストに対抗するなかで生まれた思想である。中でも〈衛生〉は〈貧困〉が生み出す不衛生な環境の改善という発想から生まれている。日本においては貧困が〈怠惰〉と結びついていたが，英国では貧困は〈不衛生〉と結びついていたと言える。ここで再び下水道整備問題に的を絞って見るならば，既に述べたようにロンドンは江戸とは反対の道を歩んでいた。不燃化政策や下水道の整備は産業革命期に人口の急激な増加に伴

ってさらに大規模に行われた。しかしながら，フリードリッヒ・エンゲルスの『イギリスの労働者階級の状態』(Friedrich Engels, 1845) には，イギリス全土の貧民地区では共同屋外便所にまで住み込む人がいるほど過密な居住環境に加えて，汚物の山が散在し，その悪臭は窒息するほど酷いものであったことが報告されている。糞尿は川に浮かび，貧民は「資本家と建築業者が金儲けのために建てた安上がりの住宅」に押し込まれ，(注13) 当然のことながらコレラが蔓延する。近代的な下水整備はこの19世紀半ばの英国で始まり，西欧に広まったと言われるが，〈汚い，臭い〉は貧民を指して何度も指摘されたことであった。20世紀に入り，ジョージ・オーウェル (George Orwell) は労働者は臭いと教えられてきたと言うが，貧困と〈不衛生〉は抱き合わせになった観念であった。

もちろん江戸―東京の貧民も〈不衛生〉と無関係だったわけではないが，日本においては糞尿を肥料としていたために川がそれほど汚染されることもなく，また江戸にはいたるところに川があり運河が掘られたために，汚物による汚染や悪臭がロンドンほどひどくなかった。こうしたことが，貧困と〈不衛生〉が西洋ほど結びつけられることがなかった理由であると考えられる。

○貧困と〈寄生〉

上述の18世紀前半に書かれたスィフトの『ガリバー旅行記』には，次のような記述がある。

> That, the rich man enjoyed the fruit of the poor man's labour, and the latter were thousand to one in proportion to the former. That, the bulk of your people was forced to live miserably, by labourng every day for small wages, to make a few live plentifully. (注14)

> 金持ちは，貧乏人の労働の結晶を享受しているが，その人数は貧者の千分の一にすぎない。結局英国の大多数の人々は，毎日毎日安い賃金で働いて惨めな暮らしをすることを余儀なくされており，ごく少数の者を裕福にし

てやるのだ。

これは，旅行家ガリバーが馬が支配している国に行って，お世話になっている家の主人に故国イギリスについて説明している箇所である。ここではイギリスが貧民と金持ちの二つに分けられ，少数の後者が大多数の前者から搾取していることが述べられている，労働者という財産を持った金持ちは，働くことなくその財産で贅沢な暮らしをする。金持ちは「庶民に寄生して生きて」おり，〈働かず，他から恩恵を受けていながらお返しをしない〉，〈小さな労働で大きな利益を得る者〉である。こうした二つの国民を持つ社会が定着し，結果的には本塙の冒頭のライドンの「上流階級は」「庶民に寄生して生きて」いるという思想につながっていったと思われる。

○運にめぐまれない階級

金持ちと貧乏人という二元的世界観は，産業革命の本格化した19世紀の英国においてさらに浸透していく。農業や手工業以外の，エンゲルスが〈近代的プロレタリアト〉と呼ぶところの工業都市に集まる新しい労働者の出現した時期において，社会はさらに〈運の悪い人々〉と〈運の良い人々〉に二分されていった。

> 運のより良い人々にとっては悪いイギリスでは全くなかった。大変安定した快適なイギリスであった。（中略）運に恵まれない階級はこの時代のイギリスではほんとうにひどく不幸だった。[注15]

運の良い人々は私腹を肥しますます裕福になり，「庶民に寄生していく」。一方運の悪い人々はエンゲルスが描写したような惨めで悲惨で不潔な環境へと追いやられた。

○　オーウェルの寄生観

時代は下り，運に恵まれなかった人々にとって最も苦しい時代が訪れた。そ

れがいわゆる大恐慌の時代である。この時代の貧しい中の最も貧しい人々を自らの体験をもとに描いたのは，ジョージ・オーウェルであった。

彼の『パリ・ロンドン放浪記』(*Down and Out in Paris and London*, 1933) には，物乞いを寄生虫にたとえ，本質的に価値がないと世間の人が考えていることに憤慨する記述がある。[注16] つまり，第一に世間の人は物乞いが寄生虫と同じ様な存在であると感じていて，第二に物乞いも寄生虫も本質的に価値がないというわけである。

オーウェルは次のような点で寄生虫と物乞いが一緒であると指摘している。オーウェルは世間が物乞いを寄生虫と同様の存在であると言っているが，寄生虫という比喩はここでは世間の人々が持ち出した表現なのか，世間の人々が物乞いを見る目が寄生虫を見るそれと似ているということでオーウェルが敢えて持ち出した表現であるのかはっきりしない。しかし，おそらく後者が正解であって，それは，オーウェルの「物乞いは，結局のところ寄生虫ではあっても，とても無害な寄生虫なのだ」[注17] という言葉から判断できる。彼によれば，世間は物乞いを落伍者とし，社会の余計者にすぎず，本質的に軽蔑すべき存在であると見なしている。しかし，オーウェルは物乞いの暮らしと世間の人々の暮らしは変わりはなく，さっぱり役には立たない仕事ではあるが，働いており，役に立たないという点では他の商売にも同じようなものが存在していると指摘する。無害な寄生虫のごとく，社会から得るものはようやく自分が生きていく費用だけで，そのためにさんざん苦労もしている。ただ世間体の良い生活を送れるだけの稼ぎがないから，人々は彼らを軽蔑しているが，物乞いも他の商売人と同じく手近な方法で生活費を得ている商売人にすぎない。単に金持ちになれない商売を選ぶと言う過ちを犯しただけで，軽蔑されるべきではない。「浮浪者が社会のあつかましい寄生虫（「したたかな乞食」）だという考えは，まったく根拠がないわけでもないが，それが当てはまるのはほんの数パーセントにすぎない」[注18] オーウェルはこう続ける。「アメリカの浮浪者生活に関するジャック・ロンドンの著書に見られるような，意図的で冷笑的な寄生虫のような人生は，英国の国民性とは縁がない。英国人というのはたえず道義心に駆られた民族であり，貧乏は罪であるという意識が強い。普通の英国人が意図的に寄

生虫になるということは創造ができないし，この国民性は，仕事から放り出されたからといって変わるものではない。事実，乞食が，法律によって浮浪者として生きざるを得ない仕事を失った英国人にすぎないと考えれば，乞食がばけものであるというような考えは消えて無くなるのだ。[注19]」

オーウェルの主張はおよそ次のようにまとめることができる。第一に，一般に浮浪者と普通の労働者を分けているのは，前者が〈働かない〉ということであり後者が〈働く〉という一事にすぎない。第二に，浮浪者は実は働いているがそれはさっぱり社会の役に立たない仕事である。第三にそうした仕事をする彼らは，社会の（有害であれ，無害であれ）寄生虫である。第四にそうした寄生虫のような生き方は，本来英国の国民性とは関係がない。浮浪者は運が悪くてそのような状態に陥っているのだ。

英国の労働者階級は，〈貧困〉や〈不衛生〉とは縁のある人々であるが，〈寄生〉とは実際には関係のない人々である。彼らは現在寄生虫のような人生を送っているが，そうした〈寄生虫〉と〈寄生虫でない人間〉を分けているのは，社会で役に立つ〈労働〉をしているかしていないかだけである。

II　自立した階級の行方

こうした19世紀の産業革命以来，労働者階級が最も貧しかった苦難の時代を妻や子供を抱えて生きなければならなかった人々の気持ちは，アラン・シリトーの『ドアの鍵』（Alan Sillitoe, *Key to the Door*, 1961）のハロルドの「こんな大きな国じゃねぇか。店には食べ物があるっていうのに，なんで仕事がねぇんだ。やってられないぜ，まったく。[注20]」のようなものであっただろう。やりきれない気持ちで過ごしてきた両親を見て育った子供たちは，1950年代の好景気に青年期を迎え，労働者階級の人生を楽しむまでになる。彼らは〈労働〉をする労働者階級であり，〈寄生〉していない自立した階級となる。

○〈おれたち〉と〈やつら〉

イギリスの労働者階級の精神を表す言葉として〈おれたちとやつら〉がある。〈おれたち〉とは自分たち労働者階級のことであるが，この場合〈おれたち〉とは，リチャード・ホガートの『読み書き能力の効用』(Richard Hoggart, *The Uses of Literacy*) によれば「日常の価値判断の次元で労働者階級に属している」人々[注21]であり，内藤則邦の『イギリスの労働者階級』によれば〈おれたち〉は，労働者の「伝統的規範」を守り，「生活条件を共通にした同類の者の間で友情，相互扶助，近隣のよしみといった観念がしかと成員の心のなかに日常的に存在し，それが高度に凝固した精神」を持っている。[注22] つまり，〈おれたち〉以外の者は，必ずしも賃金，居住地域，階級が違う者ということではない。また，劣等感や誇りといったものとも関係がない。例えば，第二次大戦後労働者の賃金は事務員のそれよりも多かったが，それでも彼らは労働者階級であり，〈おれたち〉になりうる。また，労働者が多く住む地域に住んでおり，彼らと同じ工場で働いていても，例えば職工長は〈おれたち〉の仲間ではない。同じ労働者階級内においても，違う階級の味方であると見なされると，もう〈おれたち〉ではない。アラン・シリトーの小説では，職工長のロボー (*Saturday Night and Sunday Morning*,『土曜の夜と日曜の朝』) は嘲笑の的であり，警戒される相手であるし，警察に味方して〈たれこみ〉をする者 ('The Loneliness of the Long Distance Runner',「長距離走者の孤独」) も〈おれたち〉ではない。〈おれたち〉は〈おれたち〉と運命を共有する仲間のことである。内藤則邦は，ランシマンの研究 (W.G. Runciman, *Relative Depriviation and Social Justice*, 1966) を引用して，ようするに〈やつら〉は「権力」("authority") を持つ人々を指すと言う。

古くは階級間の差があまりにもはっきりしているために，50年代以降の新しい傾向としては賃金の格差が小さくなってきたために，あるいは肉体的にも精神的にも染み着いた労働者階級としての暮らしのために，そして自分たちが読み書きができないために，労働者階級の親の中には〈教育〉がより良い何かであるとは考えていない者が多かった。『ドアの鍵』の主人公の父親，前述のハロルドは，本を買うのはお金の無駄使いだと言う。それは作者アラン・シリ

トーと同じくノッティンガムの労働者階級の親の元に生まれ，1930年に死んだロレンス（David Herbert Lawrence）の『息子と恋人たち』（*Sons and Lovers*）に登場する父親の態度と同じである。

そしてこの『息子と恋人たち』を念頭において書かれたデヴィッド・ストーリーの『サヴィルの青春』（David Storey, *Saville*, 1976）のコリン・サヴィルの場合は，両親の援助と励ましを受けて私立学校に入学するものの，結果は悲惨なものとなる。高い教育を受け，教師になったコリンは，近所の人から〈ここから出ることのできる人間〉と言われ，また父親からは〈できるなら代わりたい〉と言われる。また同じ地区に住んでいて主人公と同じように私立学校に入学した友人は，工場で働く幼馴染みを〈屑〉だと言う。こうして父親や弟がする肉体労働から解放されたコリンではあるが，父親と弟から距離を置かれ疎外感を味わう。また，私立学校の仲間によって貧乏であることの屈辱観を味わい，階級の差が理由の一つとなって恋人を無くし，労働者階級の子供たちを教える教師も首になる。そして，教えることにも興味を無くし，結局ロンドンに出ることを決意する。

仲間よりも良い教育を受けて教師とか事務員になるものは，〈おれたち〉の仲間ではない。しかし〈おれたち〉の運命を左右する側に加わった途端に中流階級の仲間入りというわけでもない。コリンは自分が上の階級に昇ったとは考えていない，と言う。労働者階級出身の教師や事務員は，どこにも属すことのないという意味でクラスレスな人々となる。

○階級性の希薄化

しかし，一方でこうした教育の機会を与えられた労働者階級の子供たちの出現は，階級間の境界が表面上曖昧になっていく過程の一部と見ることができる。第二次大戦中の完全雇用を目指す経済政策の実現化，大規模な福祉政策などによって，賃金の急激な上昇と社会保障による保護が労働者階級と中流階級の境界を曖昧にし，50年代には伝統的な社会構造は解体したと言われた。デヴィッド・ストーリーの『救われざる者たち』（*Radcliffe*, 1963）の主人公の父ジョン・ラドクリフは中流階級であるが，労働者階級の人々と働く中で自分は孤立

していると感じる。階級の違いがそうさせているのではなく，自分の中の気質が彼らと違っているのだと言う。また，彼は労働者階級出身の女性と結婚するが，当初は彼女の〈労働者階級性〉だと感じていた性質は実は宗教的なものであったことを告白する。このように1960年代に発表されたこの作品は，1950年代に青年に達する子供たちの親でさえ，労働者階級性の薄れていく気配を30年代に感じとっていたことを臭わせている。ここではthe lower-upper-middle-class（上層中流階級の下）に属するジョージ・オーウェルが，『ウイガン波止場への道』（*The Road to Wigan Pier*, 1937）で述懐しているような孤立感，労働者階級の人々と寝食を共にしてもまだ自分と労働者階級との間に深く刻まれた〈断絶〉が存在するという感情は否定されているかのようである。

○〈怒れる若者たち〉の世代の寄生観

上記のストーリーを含め，50年代後半からいわゆる〈怒れる若者たち〉（"Angry Young Men"）というレッテルを張られる一群の小説家たちが登場した。その動きは，ジョン・オズボーン（John Osborne）の『怒りを込めてふり返れ』（*Look back in Anger*, 1956）に始まるとされ，彼らの作品は「既成社会の一切の権威を茶化し，否定する[注23]」と言われている。確かに〈おれたち〉は今までだってこれからだって〈おれたち〉なのだが，それだからといって劣等感を持つ必要も卑屈になる必要もない，というのが彼らの言い分である。この良い時代は，貧困という悲惨な状態から労働者階級を救うことになり，表面上の階級差が無くなったという一方で，これら〈怒れる世代〉は自己認識の過程が労働者階級という言葉から離れなかった人々でもあった。

前掲のストーリーの『サヴィルの青春』では，教育を受けた主人公の末路は悲哀に満ちたものとなるが，対照的に主人公の弟のスティーヴンは，父親と同じ肉体労働者となる。彼は兄を〈偽善者〉と呼び，兄のことをうらやむ気持ちも無い。一方兄は弟がうらやましく思う。弟は自由で，スポーツマンで人気者だった。彼は炭坑で働くことが気に入っており，生活に満足していると言う。50年代の労働者階級の若者は，自分たちの親と同じような職に就いても失業に

悩まされることもなく，高給を取って生き生きとした生活をすることができた。

○〈労働〉をする者

近代的労働組合の組織化，公教育・福祉政策の始まりと並んで，50年代の若者は，完全雇用と生活水準の向上によって豊かな社会を味わうこととなった。こうした状況を一番リアルに活写しているのは，アラン・シリトーである。彼自身はグラマー・スクールの奨学生試験に失敗し，肺結核のために肉体労働者になることを断念せざるを得なかった経歴を持つ。つまり公教育の恩恵とも賃金の良い仕事とも無関係な人物であるが，彼の描く労働者階級は50年代の好景気の恩恵に与かり意欲に満ちた姿を呈する。シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』は，30年代の大恐慌の苦しみも，産業革命以来の労働者階級の暗い影とも無縁の労働者を最も忠実に描いている。主人公アーサーは30年代の親たちの苦しい現実から解放され，安定した収入があり，テレビも家具も買い放題，映画を楽しむこともできるしタバコも吸い放題である。清潔な家に住むこともできるし，つけで食品を買う必要も無い。そうした物質的な豊かさに恵まれることだけでなく，労働条件の改善や戦後の解放感が，労働者階級であることの誇りさえ芽生えさせる。

シリトーの「長距離走者の孤独」では，主人公コリンがいみじくも次のように言ってのける。

> At the moment it's dead blokes like him as have a whip-hand over blokes like me, and I'm almost dead sure it'll always be like that, but even so, by Christ, I'd rather be like I am — than have the whip-hand over somebody else and be dead from the toe nails up. Maybe as soon as you get the whip-hand over somebody you do go dead. (注24)

今のところおれみたいな者に鞭を振る奴は彼（感化院の院長）のような死んだも同然の奴だ。未来栄豪そうした関係はきっとずっと変わらないだろうよ。しかしだからと言って，誰かに鞭を振ったりするような爪先から死

んだも同然な奴よりも，誓っておれはおれのようにありたいんだ。たぶん鞭を振ったりするようになっちまったとたん人間てのは死んじまうんだ。

コリンは，確かに階級というのはこれからだってずっと存在するだろうけれども，労働者階級よりも上の階級に昇ったからと言って幸せになるわけでもない，おれたち労働者階級は満足しているのだと高らかに言う。シリトーの登場人物はしばしば，〈大将〉のようなものになりたいと言うが，決して上の階級に昇りたいとは言わない。彼らは古い労働者階級の習慣，たとえば〈おれたち〉といった連帯意識や，上の階級に粗野であると言われるアクセント，他人に使われる仕事に就くこと，週払いの仕事以外は何の収入源もないことを残しながらも，自らの社会的位置を労働者階級であると宣言する。彼らはもはや，〈不衛生〉とは無関係になった。そして，ディケンズやロレンスの小説の中の労働者階級が感じざるを得なかった劣等感と卑屈さ，オーウェルが浮浪者に見いだした〈寄生虫〉のごとき生活とも無縁な人々となった。

○〈労働〉しているか

シリトーは，『土曜の夜と日曜の朝』や「長距離走者の孤独」を書いたほぼ20年後の1976年，「耳を澄ましてよく聞け」（'Ear to the Ground'）という短編小説を書く。主人公はシリトーとほぼ同じ年齢の中年男性で，20年間働いていた会社に解雇され，現在は失業保険で暮らしている。この男性は，社会に対して大変な怒りを吐露する。語り口はかつての作品を書いた頃のままの鋭さを持っている。しかし怒りの矛先は，自分と同じ労働者階級に向けられている。

Bleeders. They don't know they're born. Never done a day's work in their lives. Don't expect to. That's the trouble. They don't tell them at school that one day they'll have to go out into the world and earn a living. Schools aren't like that anymore: all play and no work.[注25]

ちきしょう。やつらは生まれてきたってことがわかっちゃいない。生まれ

てこのかた一日だって働いたことがないんだ。働こうって気さえないから困ったもんだ。世の中に出て自分で稼ぐようになるってことを教わってもいない。学校はそういうところじゃなくなっちまったんだ。遊んでばかりで勉強なんて全然しないんだ。

「やつら」は“Robdogs”「どろぼう犬」である。国民保険，国家扶助，医療給付，家族手当，失業保険をもらって働かない。そのほとんどは白人だ。Country's rotten.（「この国は腐っている」）国と学校教育がこのような人間を生み出しているのだ。自分が若い頃とは大違いだ。主人公の怒りは家族にも向けられ，親を尊敬しない子供と金を要求する妻を殴って追い出してしまう。

I don't know! I don't know. I sometimes think I'm going to get fed up with it all. She ain't been back since. Not a word. What can you do? Can't take a joke, that's what's wrong with people. Put your foot in it, whatever you might say. There's nothing left in life. No religion, no respect from your kids. Might as well as keep your trap shut. All my fault, though, that's what I know. Bound to be, ain't it.[注26]

わからねぇ。まったくわかんねぇ。時々何もかもにうんざりしてしまうんじゃないかって気がする。女房は帰ってこないし，あれっきりだ。いったいどうすりゃいいんだ。冗談がわからないって言うのかい。近頃の奴はそれだから駄目なんだ。何を言っても成功しねぇ。人生にはもう何も残っちゃいない。信仰もなきゃ，ガキから尊敬されることもない。何ももう言わないほうが良さそうだ。なんだって悪いのは俺なんだろ。わかってるさ。そういうこったろう。

労働者階級は〈労働〉をしないし，〈労働〉したいとも思わなくなってしまった。それがこの中年男性の70年代の若者観である。主人公は，福祉に浸かっている労働者階級のていたらくな態度と，自分たちの親が散々苦しんできた

失業生活が再び舞い戻ってきたことに憤りを感じている。そして自分だけがかつての労働者階級の誇りを身に付けているために，誰にも理解されないと考えている。

経済状況の悪化と，福祉政策による失業生活のある程度までの生活の保証が，高い教育を受けたとしても，Oレベルを幾つ持っていてもそれに見合った職に就けない70年代の若者を〈やけくそ〉にする。怒れる若者の世代の小説世界は，労働と酒と喧嘩と女であった。それは斬新で労働者階級の不敵な一面を描いていたが，再び仕事のない時代が訪れると，怒れる世代であったキングズリー・エイミス（Kingsley Amis）の息子のマーティン・エイミス（Martin Amis）の *Dead Babies*（1975）にあるような失業とドラッグと暴力とセックスというさらに過激で残酷な様相を帯び始めた。既成の社会に反発した労働者階級の意気込みは次第に影を潜め，代わりにイギリスの階級社会とは無縁の移民の小説が元気が良い時代になった。50年代の怒りはどのような方向に向かったのであろうか。

○ギデオン・サムズのあきらめ

シリトーの‘Ear to the Ground’が書かれた翌年，ギデオン・サムズという少年の『パンク』（Gideon Sams, *The Punk*）という小説が出版された。これはその翌年英国でミリオン・セラーとなる。主人公アドルフは中学を卒業した失業中の労働者階級の少年で，ある日彼は職業紹介所を尋ねる。シリトーの「耳をすましてよく聴け」の主人公と同じく係官に紹介された仕事を最初は鼻で笑ってつっぱねる。「耳をすましてよく聴け」の主人公はゴミ集積も煉瓦運びも皿洗いの仕事も断り，“Is that a man's job？”（「それが一人前の男のすることかよ」）と言う。労働者階級の中年男性の怒りは，最後の（上に挙げた）「なんだって俺が悪いんだろう」という言葉にあるように誰にも届かない。彼とは対照的に『パンク』の少年は魚を解体するという汚くて臭い仕事を引き受ける。ここに労働で全てを支えてきた古い世代と，やけくその，労働をしない労働者階級という新しい世代の違いが見えてくる。『パンク』には，次のような歌詞がある。自分を殺してくれ，生きていたくないんだ，社会保障なんてう

んざりだし，人生にもうんざりだ。

サムズのアドルフはさっさと家を出てスクワットで寝場所を手に入れる。70年代には，市で買い取った取り壊し予定の空き家に不法占拠する若者が大勢いた。前掲のシリトーの「耳を澄ましてよく聞け」の怒れる主人公の息子も“a fully qualified van driver”として何十年も働いて養ってくれた父親を捨てて家を出ていく。サムズの『パンク』の翌年に発売されたジョセフィン・カム（Josephine Kamm）の『家を出てロンドンへ行こう』（*Runaways*）では，文字どおり16才になったばかりの二人の少女が家を出てロンドンでスクワット生活を始める。彼女たちは，ただ何となく家を出て，現在さえ良ければそれで将来なんてどうでも良いのだと言う。シリトーのコリンのような〈おれはおれのようでありたい〉という誇りも，〈大将〉でありたいという階級内に踏みとどまらざるを得ない因襲的な世界における強靭なまでの野心も時代遅れになりつつあった。ストーリーの『サヴィルの青春』のコリンが，教師の口を見つけて都会に出ることができるとしても何としてもこわしてしまいたくなかった家族の絆，地縁関係，先人たちの教えも過去のものとなっていく。差し伸べられた社会保障の手にもうんざりし，明るい見通しのないまま70年代の若者は労働者階級の古い伝統を捨てていく。

○ロットンの寄生観

本塙の冒頭のロットンの言葉にある「おれたちは怠け者で役立たずだし，まったく卑しい人間だ。おれたちは生活に決して責任を追うことがないから虐げられている。そんなことをひねくれながらも楽しんでいたりするんだ。」には，もはや〈労働〉をしない新しい世代，したくてもできない世代のやけっぱちな態度があり，一方で〈労働〉に価値を置く古い価値観が見える。また，福祉社会の恩恵に与かり，〈怠惰〉と〈貧しい〉が結び付く日本の貧民観と重なるような感情が見られる。「労働者階級だから，指図されることを好み，屠殺場行きの羊みたいに扱われたいんだ。イギリスのパブリック・スクールシステムは閉口ものだ。（中略）やつらは自分たちがおれたちより上なんだってことをひけらかし，実際それに甘んじているんだ。」には，まず＜やつら＞に運命を左

右されてきた産業革命以来の劣等観と不公平観があり，同時にそれを上回るような，1950年代以降の権威への怒りが読み取れる。

そして「上流階級のやつらは（中略）庶民に寄生して生きていくんだ。」はどうであろう。すでに見てきたように，〈労働〉することで人生を謳歌できた50年代の親たちから引き継いだ寄生していない独立した階級への帰属意識と，仲間との同類感情とまた他の階級への排斥感情が残存していると考えられる。わたしたちは働いてはいませんし現在役立たずではありますが，〈寄生〉してはいません。上流階級の人々は〈労働〉をしないでうまい汁ばかりを吸う寄生虫です。—という主張がロットンの言葉に隠されているのではないだろうか。

○寄生虫の反乱

日本では1996年12月に公開され，翌年の1997年８月１日まで同じ映画館で36週間上映という記録的なヒットとなった『トレイン・スポッティング』（*Trainspotting*）は，アーヴィン・ウェルシュ（Irvine Welsh）の同名の小説が元になっている。エジンバラを舞台に登場するのは，殆ど職のない労働者階級の青少年である。描かれる世界は，先に挙げた〈失業とドラッグと暴力とセックス〉である。

主人公のジャンキー（麻薬中毒）仲間マッティはエイズを発症する。免疫力の無い彼は，猫の排泄物でトキソプラズマという寄生虫症に感染する。トキソプラズマという名前を聞いて主人公は「それは何だ」と聞くと，尋ねられた友人はこう答える。

—Aw, it's fuckin horrible, man. It's likesay brain abscesses, ken? (TT27)

それはまったくひどい病気さ。脳に膿がたまるようなものだ。

主人公は身震いする。友人は，頭痛に悩まされるようになったマッティがヘロインの量を増やし，脳卒中を起こし，足をひきずり，顔を歪ませて歩いているのを見かけたが，２度めの発作でついに死んだのだと言った。

現代では，エイズなどの治療や症状の悪化によって免疫系統を破壊する病気が他の寄生虫症を併発させ，そのことが小説に取り上げられる。酒に取って代わった麻薬が再び貧困と〈不衛生〉を結び付ける。〈寄生〉が労働者階級と無縁なものであった時代から遠く離れ，彼らは寄生される側にまわってしまったのかもしれない。

注

注1　John Lydon, *Rotten: No Irish, No Blacks, No Dogs*. 49.なお，傍線は作者による。
注2　栗田彰『江戸の下水道』，179。
注3　Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, 140.
注4　野口冨士男編『荷風随筆集』，59。
注5　クリストファー・ヒバート『ロンドン—ある都市の伝記』，75-76。
注6　広岡治哉・柴田徳衛編『東京・ロンドンの研究—都市問題シンポジウムの記録』，9。
注7　同上，9-10。
注8　紀田順一郎『東京の下層社会—明治から終戦まで』，102。
注9　同上，105。
注10　同上，102。
注11　栗田彰『江戸の下水道』，236。
注12　野口冨士男編『荷風随筆集』，20-21。
注13　角山栄，川北稔編『路地裏の大英帝国，イギリスの都市生活史』，94。
注14　Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, 268.
注15　内藤則邦『イギリスの労働者階級』，32。J・B・プリーストリー（J.B. Priestley）の*English Journey*（1934）を引用して。
注16　George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, 234-235.
注17　*Ibid.*, 235.
注18　*Ibid.*, 275.
注19　*Ibid.*, 275.
注20　Alan Sillitoe, *Key to the Door*, 18.
注21　Richard Hoggart, *The Uses of Literacy*, 22.
注22　内藤則邦『イギリスの労働者階級』，46。
注23　出口保夫『イギリス文学の基礎知識』，186。
注24　Alan Sillitoe, *The Loneliness of the Long Distance Runner*, 14.
注25　Alan Sillitoe, *The Second Chance*, 128.

注26　*Ibid.*, 134.

注27　Irvine Welsh, *Trainspotting*, 288.

参考文献

フリードリヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態１』，
1845；全集刊行委員会訳，大月書店，1971。

角山栄，川北稔編『路地裏の大英帝国，イギリスの都市生活史』，平凡社，1982。

紀田順一郎『東京の下層社会―明治から終戦まで』，新潮社，1991。

木村壮八『東京の風俗』，1924；冨山房，1978。

栗田彰『江戸の下水道』，青蛙房，1997。

ガーミニ・サルガードー『エリザベス朝の裏社会』，1977；松村赳訳，刀水書房，1985。

柴田徳衛『東京―その経済と社会』，岩波書店，1959。

多田富雄『生命の意味論』，新潮社，1997。

出口保夫『イギリス文学の基礎知識』，評論社，1981（第三刷）。

内藤則邦『イギリスの労働者階級』，東洋経済新報社，1975。

野口冨士男編『荷風随筆集』，岩波書店，1986。

クリストファー・ヒバート『ロンドン―ある都市の伝記』，1969；横山徳爾訳，1983。

広岡治哉・柴田徳衛編『東京・ロンドンの研究―都市問題シンポジウムの記録』，
法政大学出版局，1978。

Hoggart, Richard. *The Uses of Literacy*. London: Chatto and Windus, 1957.

Kamm, Josephine. *Runaways*. 1978.

Lydon, John. Rotten: *No Irish, No Blacks, No Dogs*. 1994; First Picador USA ed., New York: Picador USA, 1995.

Orwell, George. *Down and Out in Paris and London*. 1933; London Victor Gollancz Ltd., 1933.

—*The Road to Wigan Pier*. 1937; Penguin Books, 1957.

Sams, Gideon. *The Punk*. Polytantric Press, 1977.

Sillitoe, Alan. *Key to the Door*. 1961; London: Division of the Collins Publishing Group, 1986.

—*Saturday Night and Sunday Morning*. 1958; Granada Publishing Ltd., 1985.

—*The Loneliness of the Long Distance Runner*. 1959; Granada Publishing Ltd., 1985.

—*The Second Chance*. 1981; Granada Publishing Ltd., 1982.

Storey, David. *Radcliffe*. London: A. M. Heath & Co., 1963.

—*Saville*. London: A.M. Heath & Co., 1976.

Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. 1726; Everyman's Library, ed., Ernest Rhys,

London: J.M. Dent & Sons Ltd., 1946.

Welsh, Irvine. *Trainspotting*. 1993; Minerva ed., Mandarin Paperbacks, 1994.

最　後　の　問　い

——“Ode to the West Wind” 小論

佐　藤　由　紀

If Winter comes, can Spring be far behind?

(l.70)

これはあまりにも有名な最後の一行であるが，読者はその明快な言葉と内容のために，また「冬来たりなば　春遠からじ」と名訳のために，辛い時期がやってきても最後には必ず温かい春のように希望のある幸せな季節が巡ってくるのだという解釈を第一に考えるだろう。そして少し乱暴な言い方をすれば，シェリーもこの因果論的な結論を読者に訴え，自らを励ましていると言うことができるだろう。しかし詩の最も重要な最後の部分で，仮定の“if”と疑問符をもってくるという不自然さが，完全な終結に思われる一行を何か不確かなものへと解き放ってしまう。しかも自明の理である春夏秋冬の四季のサイクルにたいして，なぜこのように言う必要があったのだろうか。確かにカッコ付きで「いや，遠いはずがない」と含みを入れていると読者は直感的に読み取るのであるが，それは四季という時間経過の枠組みが読者の頭の中にあるために，解釈が固定化してしまうのである。

最後の一行に限らず，この作品からある一定の意味を読み取るということが妥当であるとほとんどの読者が信じること自体に，他の解釈の可能性を締め出してしまう力が働いているのではないだろうか。[1] 私は従来の解釈を否定しているのではなく，ただ新たな可能性を示そうと考えているのだ。作品は，すでに作者の心情の現れであると同時に，作者の手を離れた独自のテクストなのである。

この作品の構造を考える場合，Hillis MillerがBleak Houseを扱った論文で，“Bleak House is a document about the interpretation of documents”.[2] と述

べ，また他の箇所で "The novel to is a temporal structure without proper origin, present or end".[3] と言っているのは，ディケンズの小説のみならず，ロマン派の作品にも当てはまるだろう。Bleak Houseというヴィクトリア朝の，しかも小説に関する論文が，なぜロマン派の詩の解釈に役立つのかと問われることと思うが，この論文の前半で扱われている反復と意味の関係と，それによって浮上せざるをえない時間の問題については，あらゆるテクストを対象にして論ずることが可能と思われるからである。

シェリーのノートによると，この作品は作者自身の体験をもとにして書かれている。

> This poem was conceived and chiefly written [in 1819] in a wood [the Cascine] that skirts the Arno near Florence, and on a day when that tempestuous wind, whose temperature is at once mild and animating, was collecting the vapours that pour down the autumnal rains."[4]

これほど明確に作者自身の手で作品の成立を語られてしまうと，私達は作品が作者の言うとおりに書かれたということで何も疑問を持ち得なくなってしまう。この点においては，Blank の指摘するとおりである。[5] そして叙情詩の代表的作品として評価され，西風はシェリーの理想美の世界を実現する強大な力を持つに至る。[6] ただごく当たり前のことであるが，この作品とノートに書かれている事実は重なり合ってはいるものの，全く同じではないことに注意しなければならない。それは現象としての暴風雨と，シェリーが体験してノートに書き綴った内容が同じではないと言うのに等しい。実際の体験から作品が生み出される前には，作者の印象，その記憶，その想起という過程がどうしても必要である。その中で現実として捉えられたものと，それについて書かれた作品とがずれてゆく。またこうした一般論のほかに，上島建吉氏が言うように，シェリー自身の描写の中に背後のものを見通してしまう傾向が見られることも事実である。

彼の<目>は，それが向けられた対象によって完全にはうけとめられず，一部はその対象を貫いてその背後にあるものを見てしまう。そしてその背後にあるものとの関連において逆に対象を再把握する。この，いわば感覚の往復作用ともいうべきものがシェリーの認識原理であり，またその詩におけるイメジャリーではないだろうか。[7]

だから「西風のオード」のような，自然を歌った叙情詩の難しいところは，読者が自然の描写そのものを鑑賞するだけでも十分に満足できてしまう部分である。そのように捉え直してゆくと，この作品では「時間」をめぐって作者の想起が交錯する，意図的な状況が表れていると指摘することができる。

まず第一スタンザ冒頭の，"O Wild West Wind" という呼びかけは，単なる西風への賛美，作者の感情の高ぶりを示すだけではなく，非常に周到な配慮の結果である。King-Hele は，

> That opening, *O Wild West Wind*, is a notorious piece of alliteration.....
> ..., it may seem natural to label Shelley also as an alliteration addict. It may seem natural, but it is wrong.....Blatant, Swinburnian alliterarion is rare in his poems, if we except the *Ode to the West Wind*.[8]

と言っているが，私にはそのように思われない。シェリーは得意な頭韻法を効果的に用い，二重母音の音を連続して響かせることによって波打つようなリズムを作り出している。しかも "Wild West Wind" は，"Wind" という名詞に二つの修飾語がついているにもかかわらずそれぞれが大文字で始まっている。それは一つの名詞句を表すと同時に，切り離されている，すなわち同一物の中に複数の異なった面があることを示している。それに呼応する表現は，作品のあちこちに見ることができる。この一行目は，作品全体の象徴として置かれていると考えたい。

"Wild" な部分は，木の葉を吹き散らし（"Thou, from whose unseen presence the leaves dead / Are driven, like ghosts from an enchanter

fleeing,". I, st.)，雲を吹き散らし（"Loose clouds like Earth's decaying leaves, are shed,/ Shook from the tangled boughs of Heaven and Ocean," II, st.)，海を引き裂く（"Thou/ For whose path the Atlantic's level powers / Cleave themselves into chasms," III, st.）"Uncontrollable"（IV, st. l.47）なものである。それは社会と対比させて考えた場合，自然の特徴そのものであって，これを賛美の対象にすることは，ロマン派の特徴の一つと言われているsublimeという美意識の概念にそのままつながってゆく。シェリーの詩で"wild"という形容詞が肯定的に用いられることが多いのも，そういった価値観があるためと思われる。

"West"について読者は，必ず"West Wind"「西風」という一語で認識するにちがいない。それは"Ode to the West Wind"と題されている真下に"West Wind"という語がくれば，ほとんどの読者が無意識に了解済みにしてしまうからだ。ところが朗唱した場合のリズムは，二重母音の"Wild"が前に付いていることもあって，等間隔の波打つようなリズムを生みだす。実は視覚的にも大文字で両方とも始まっているので，目の速度は落ちるはずである。したがってCroninが行っているzephyrのイメージ分析[9]は当然必要であるが，それと同時に「西風」を「西」と「風」とに切り離して考える必要性も出てくる。シェリーは"Spring"や"Winter"など，読者にとって非常にわかりやすいメタファーをこの作品に多用しているが，"West"についても同様で，多くの宗教に共通するイメージを用いている。

'Tis said, she first was changed into a vapour,
  And then into a cloud, such clouds as flit,
Like splendour-winged moths about taper,
  Round the red West when the sun dies in it:

（*The Witch of Atlas*, III, st. ll.65-68）

「西」の方角は，東から生まれた太陽が西に沈んで死ぬという考え方から黄泉の国を意味し，「死」の隠喩として用いられているのである。そしてこのイメ

ージは，このスタンザの最終行で“Destroyer”と呼びかけられる西風が機能する方向性として現れるのである。したがって西風は既存するものに単なるダメージを与えるのではなく，根本から「破壊」してしまう。ところが“Destroyer and Preserver; hear, O hear!”（l. 14）とあるように，「破壊者」である西風は同時にそれとは正反対の「保存者」としての役割も果している。確かに言葉の強さから言うと「破壊者」の性質の方が衝撃的だが，後に続く“hear”は二度繰り返され，しかも二度目の“hear”のまえには感嘆詞が置かれて強調される形になっている。この反復は作者の感情が上昇傾向にあることを示していると考えられ，このスタンザだけでなく第二，第三スタンザも“O hear!”で締めくくられている。Blank によると，これらの呼びかけは，(1) 詩人が西風に対して自分の詩に耳を傾けるように，(2) 読者に対して西風を聞くように，(3) 読者に対して詩人の詩に耳を傾けるように，呼びかけるという三つの可能性を論じている。[10]

“Wind”も他の言葉と同様に，一般的な隠喩になっている。アト・ド・フリースのイメージ辞典[11]を調べると，「風」には「創造の霊」，「生命力」，「詩的霊感」といったイメージも重ね合わされていることがわかる。ミトラ教の“pneuma”やヘブライ語の“rûah”が読者の念頭になくとも，神の息としての「風」は聖書の多くのエピソードに登場するので，スタンザの最終行のを読んだ時点で冒頭の“O Wild West Wind”の印象が一つのまとまりとしてではなく，これまで述べてきたように一語一語のレベルにおいても捉えられているならば，「風」は“Preserver”そのものであると解釈できる。生命の息としての「風」は，第一スタンザの「春」が吹き鳴らすクラリオンと第二スタンザの“vapours”（breath の語源はＯＥで“vapour”と“odor”を意味する）にも表され，また作者の嘆願となる最終スタンザで「竪琴」をかき鳴らし，「予言のラッパ」を吹き鳴らすのである。

このように見てゆくと，最初の呼びかけにはこの作品の要素である「死と再生」が集約されていることがわかる。第一スタンザから第三スタンザにかけては，その要素がそれぞれ陸・海・空という異なる場所でくり返し展開されてゆく。ところが不思議なことに，「西風」が“Preserver”としての機能を発揮し

た描写は明示されてはいない。極端な言い方をすれば，“Destroyer”の役割のみが描かれているために，同じ強度で扱うべき“Preserver”の影が薄くなってしまうのである。それには二つの要因が相互に関係していると思われる。一つには，この作品が自然を描いてみせながら常に人間世界，しかも作者個人の世界に目が向いていること，もう一つは作者の感じている時間の問題である。

第一スタンザでの「木の葉」が枯れ落ちて吹き飛ばされ，「にこ毛のついた種」が冷たい大地に深く埋もれる箇所で用いられている直喩は，確かに人間に対するものである。

.... like ghosts from an enchanter fleeing,
Pestilence-stricken Multitudes:

(I. st. ll.3, 5)

The winged seeds, where they lie cold and low,
Each like a corpse within its grave,...

(I,st. ll.7-8)

第二スタンザにも同じようなことが言える。２５行目の“the dome of a vast sepulchre”という比喩は，西風が自然界に対して持つ力を語っていると考えれば非常に詩的な表現として鑑賞されるだろうが，この表象の源として人の死という発想があるならば，逆に単純明快な表現となってしまう。それはこの作品の欠陥なのではなくて，いわば二重写しにされた写真の元の映像が下から浮かび上がって絶大な効果をあげるように計算されているのではないかということなのだ。

第三スタンザにおいては，より具体的に自然が人間社会に対して影響を及ぼしているのが描写される。

Thou who didst waken from his summer dreams
The blue Mediterranean, where he lay,

Lulled by the coil of his chrystalline streams,

Beside a pumice isle in Baiæ's bay,
And saw in sleep old palaces and towers
Quivering within the wave's intenser day,

All overgrown with azure moss and flowers
So sweet, the sense faints picturing them!
(III, st. ll.29-36)

この部分は，シェリーが1818年にローマ，バイア湾，ヴェスヴィオ山を実際に見た体験がもとになっていて，Lettersによるとこれらの光景が "sublime and tranquil" であって非常に感激したらしい。[12] ここで注目したいのは，廃墟と化した「古い宮殿や塔」が「青々とした苔と花に埋もれている」といった描写である。前のスタンザにおける自然界と人間世界との距離が，レトリックとしての比喩から現実へと近づいている。それは自然の力にうち負かされ，「苔や花」に覆われる形で存在する死の都なのである。すなわち，自然によって "destroy" された痕跡なのだ。そこに「西風」が吹かんとしているのである。

ここまで読んできた読者は，次のスタンザの急展開にとまどうかもしれない。あるいは，シェリーの詩によく見られる観念世界への飛躍を読み取るかもしれない。私は前に，この作品が常に人間世界，しかも作者個人の世界に目が向いていると述べたが，この "I" の出現によりそれが明確に打ちだされる。まず第三スタンザまでは陸・海・空を扱ったもので，世界全体を形成し，それと対等な立場で自らを語ってゆく。しかも一見，観念的な印象を受けるのだがそうではない。第四スタンザの冒頭で，仮定法過去がくり返し用いられていることに注目したい。

If I were a dead leaf thou mightest bear;

If I were a swift cloud to fly with thee;
A wave to pant beneath thy power, and share

The impulse of thy strength, only less free
Than thou, O Uncontrollable!

(IV st. ll.43-47)

現在の仮定として述べられるということは，すでに「私」の立っている地点が現在であることを証明している。仮定されている内容は，それまでのスタンザで「西風」が“destroy”したものである。つまり，自然界においてはそれが自然現象であり，四季のサイクルの一部であって，その「破壊」の中には「再生」が予感できる。ではそれが「私」に置き換えられた場合に，同じ結果が反復されるのであろうか。少し考え方を変えてみると，現在の仮定をするということは，すなわち現在の地点でそのことがあり得ないということなのである。

ここで，第四スタンザになるとなぜ仮定法過去で語られねばならないのか，またその地点である現在に「私」＝作者＝シェリーがどのような状況に置かれているのかを知るために，この作品の背景を考えてみる必要があるだろう。この作品に時間的なずれが見られることは，Reimanが注釈で指摘しているとおりである。[13] Reimanは*Laon and Cythna*のIX篇に主な構想があり，それを発展させたものであると主張する。つまり，*Laon and Cythna*を書いた1817年に作者が置かれていた状況も「西風のオード」に反映されていると考えられるのである。1817年という年は，シェリーの生涯で最も辛い時期に当たる。Holmesの伝記を見れば明らかなように，[14] シェリーの不幸はその前年から始まっていた。1816年の10月にFanny Inmayが阿片を服用して自殺したのである。[15] それにはシェリーへの恋愛感情も一つの引き金になっていた。さらに12月には，妻Harrietが入水自殺している。[16] その翌年には法廷で，シェリーがHarrietとのあいだにもうけた二人の子供を養育することが不可能であるという判決が下され，子供たちを取上げられてしまった。[17] 1818年になると，シェリー自身の心身の不調が続き，それに追いうちをかけるようにメアリーと

のあいだの二人の子供，WilliamとClaraを亡くしてしまった。[18] 特にClaraの死は，重病であったにもかかわらずシェリーが無理にベニスへの旅を強行したために招いたこともあって，その後メアリーともうまくゆかなくなった。[19]

このように肉親の死と不幸が続いた中で，*Laon and Cythna*，*Prometheus Unbound*，*The Cenci*などの大作が書かれてゆき，そこに今論じている“Ode to the West Wind”も位置しているわけである。そこには「死」を経験した現実が強く表れていても不思議ではない。作品の前半に自然について語っているように見える部分で人の死がイメージされるのは，四季のサイクルに合わせて死を克服してゆこうとする表れであると考えることができる。しかしあまりにも人間世界を念頭に置いているために，“Destroyer”としての「西風」は描けても，“Preserver”としてのイメージを十分に描くことができずにいるのである。シェリーは，1811年に *The Necessity of Atheism* を発行しているように，キリスト教的な神や永遠の生命を信じてはいない。[20] したがって人の死を解決するための方法を自ら模索しなければならず，そこには「死」という時空の停止の中に自らも巻き込まれ，自分自身の未来も見通すことができないという葛藤が，作品中にも反映されてゆく。第五スタンザで，“Be thou, Spirit fierce, / My spirit! Be thou me, impetuous one!”（ll. 61-62）と絶叫しているのは，その前のスタンザと同じように，現在の自分と「西風」との距離は決して近づくことがないためなのである。このような時間の感覚についてG．プーレがロマン派について論じた文章は，この作品に表れている感覚そのものだと言えよう。

過去の悲しみ，その上に未来のなやましい不安が加わる。ロマン主義者たちは，その魂の奥深くに，彼らの未来の存在の現前と不在とを同時に感じる。
［中略］
そのようにして，存在の中心に，実在の現時の感情のなかに，たえがたいある空白が形づくられる。現実の実在，過去と未来における実在，つまり時間の中における実在によって，その各側面をふちどられているあの断層である。あたかも，持続がまんなかで折れて，ぽっかり口をあけているようだ。また生き

ている存在が，前方へと同時に後方へとおのれの生命が彼から遠ざかって行くのを感じるかのようだ。予感と回想とによって自己のなかに一つの存在をつくりあげようとするロマン主義者の努力は，二重にひき裂かれるという感情に到達する。[21]

このように過去・現在・未来の時間の持続感覚を失った「私」は，四季のサイクルですら確信が持てなくなる。現在の感情の中においてしか物事を把握できずにいる「私」は，もしも「破壊」されたとしても“preserve”されるかどうかわからなくなっている。最後の問いかけは，まさにその不安を表しているのではないだろうか。

Text:

Ingpen, Roger ed., *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* vol. II New York: Julian ed.

Notes:

(1) Kumar, Shiv K., *British Romantic Poets—Recent Revaluations* New York: University of London (1966) p. 204で，著者は，I.J. Kapstein, Newman Ivey White の名前を挙げて，このオードの要点が“death and regeneration”であると述べている。またJudith Chernaik が主張するように，革命へのマニフェストと解釈する研究者もいる。“...the most distinctive quality of the poem is its revolutionry ardor: the whole poem drives toward its final prophecy, which expresses the essential impulse of revolutionary idealism.” Judith Chernaik, T*he Lirics of Shelley* Cleveland: Case Western Reserve UP, (1972) p. 90

(2) Miller, Hillis J., “Introduction” to Charles Dickens : *Bleak House*, Norman Page ed. Penguin Books (1987). p.11

(3) Ibid. p. 29

(4) Ingpen, Roger ed., *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Julian : London (1926), vol. x, p. 121 n.

(5) Blank, G. K., “Shelley's Win of Influence”, *Philological Quarterly*, vol. 64 (1985), pp. 476-77. “Shelley himself may have started the trouble when he included a footnote to his poem explaining where he wrote the poem and what the weather

was like. But often a fallacy of interpretation occurs in such a note: it is mistaken for the subject matter of idea of the poem, rather than as a poetic convention. The note merely gives placement of composition, and says nothing at all about the poem's content."

(6) Kumar, p. 207. "The West Wind is an absolute and hidden power which informs all things, while it is perceptible and to be imaged only in its effects, ..."

(7) 上島建吉『虚空の開拓—イギリス・ロマン主義の軌跡』研究社 (1974) p.130

(8) King-Hele, Desmond, *Shelley: His Thought and Work* London: MacMillan. (1960) p. 214

(9) Cronin, Richard. *Shelley's Poetic Thoughts* New York : St. Martin's Press (1981) p. 232

(10) Blank, pp. 487-88

(11) アト・ド・フリース,『イメージ・シンボル辞典』大修館 (1974; 1984) p. 689

(12) Ingpen, Roger ed., *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* vol.x New York: Julian ed. (1926) p. 7

(13) *Shelley's Poetry and Prose*, Donald H. Reiman ed. New York : Norton (1977) p. 221

(14) Holmes, Richard: *Shelley: the Pursuit* London: Harper Collins (1974; 1994)

(15) Ibid. pp. 347-48

(16) Ibid. pp. 352-59

(17) Ibid. pp. 356-57

(18) Ibid. pp. 444-47, 517-18

(19) Ibid. pp. 519-22

(20) この作品を宗教的に解釈している論文は，主にHarold Bloom. *Shelley's Mithmaking* New Haven: Yale UP. (1959) の第四章 "Ode to the West Wind"; Timothy Webb. *Shelley: A Voice Not Understood* Manchester: Manchester UP. (1977) pp.176-180 などである。確かに，聖書に出てくる用語，概念が用いられてはいるが，それとこの作品が宗教的な意味合いで意図的に書かれているかどうかは別の問題と言える。

(21) ジョルジュ・プーレ『人間的時間の研究』筑摩書房 (1982) p. 32

スペインの君主制

佐　藤　修一郎

はじめに

現行のスペイン1978年憲法[1]は，国家の主要な機関として，以下の五つを規定する。すなわち，「国王（第２編）」，「国会（第３編）」，「内閣および行政（第４編）」，「司法権（第６編）」および「憲法裁判所（第９編）」である。このうち国王に関する規定は，その地位や権限，あるいは王位の継承といった点については，憲法の第２編，すなわち56条ないし65条が定めるところではあるが，まず１条３項の次の文言が目を惹くところである。いわく，「スペイン国家の政治形態は，議会君主制（Monarqía Parlamentaria）である。」

ところでスペインは，そもそもその政治形態として国王を国家の頂点に戴く君主制を採用する伝統が強い国家であり，その起源は西ゴート王国にまで遡ることができる。その後イベリア半島には，中世を通じて，時にはカトリックの，時にはイスラムのさまざまな王朝が成立するが，とりわけ1479年のカスティーヤ＝アラゴン王朝は，グラナダの陥落，新大陸の発見といった出来事のゆえに，スペイン史上の重要な転換点として記憶されてよいであろう。

さて，現在のスペイン国王であるカルロスⅠ世（Don Juan Carlos de Borbón）が即位したのは1975年11月22日のことである。事実上1902年から31年まで続いたアルフォンソⅩⅢ世の治世が第二共和制の成立とともに終わりを告げて以来，彼は実に40年以上の時を経て誕生した国王ということになる。この間スペインは，1936年から39年まで続いた内戦，あるいはその後1975年にまでおよんだフランコ（Francisco Franco Bahamonde）による圧政を経験してきたわけであるが，独裁者の死後，しかも20世紀も後半にいたり，新たに「議会君主制国家」を標榜して君主制が復活した点にはいかなる意義が見出されるのであ

ろうか。そしてまた，そもそも新たに復活した君主制は，いかなる性格のものであり，どのようなスペインを実現することを目指していたのであろうか。

以下本稿は，かかる疑問にいささかでも解答を見出すべく，カルロスⅠ世即位までの経緯を振り返った後，憲法の諸規定を手ががりに，冒頭に記した「議会君主制」の意義を明らかにすることを意図したものである。

Ⅰ　フランコ体制下におけるフランコとフアン・カルロスの関わり

周知のごとく，スペインに王制が復活する以前の国家元首はフランコであった。1939年４月１日，彼はブルゴスで内戦の終了を宣言し，自らが率いる反乱軍の勝利を確定的なものとした。この勝利宣言に先立ち，内戦初期の36年11月にはドイツとイタリアが，また内戦末期の39年２月にはイギリスとフランスが反乱軍政府を承認し，さらに戦勝記念日当日の４月１日にはアメリカもフランコ政府を認めることとなった。とりわけドイツ・イタリアと協調関係に立ったことは，その後のフランコ体制にファシスト的な性格を与えた重要な要素として注意されてよいであろう[2]。

さて，こうして始まったフランコ体制下においては，憲法に代わっていくつかの「基本法」が国家体制ないしは国家組織に関する基本的な事柄を定めるものであった[3]。このうち，本稿との関連でまず重要なのは1947年７月26日に公布された国家元首継承法（Ley de Sucesión）である。同法では，スペインがその伝統に従って王国であると定めると同時に（１条）三軍の大元帥であるフランコ総統が終身国家元首であるとされ（２条），また彼が将来国家元首の地位を継承すべき国王または摂政を国会（Cortes）[4]に推挙できると規定していた（６条）。なお，将来の国王または摂政の資格としては，スペイン人であること，王家の血統を継いでいること，30歳以上であること，男子であること，そしてカトリックの信者であることが求められていた（９条）。

また，1967年１月10日の国家組織法（Ley Orgánica del Estado）は国家組織を総合的に規定したものであり，フランコ体制の強化を目指したものであった。

とりわけ国家元首の機能と権限を定めた条項により（6条ないし12条），理論的にはフランコのみならず彼の継承者も含めてその権限を抑制することが定められていたにも関わらず，実際に同法はフランコによる独裁的な支配を容認すべく運用された点には注意が払われてよい。同法にはたとえば権力分立のような概念は盛り込まれておらず，いわゆる立憲君主制とは異なった君主制が予定されていたことが指摘されている。そしてまたこの点から，フランコの継承者にもまた強大な権限の行使を認める余地を残していたことが，実際にはともかく，同法の独裁的な性格を物語っているといえよう[5]。

とまれ，フランコ体制下のスペインは「国王のいない君主国」という，いわばフィクションの上に成り立っていたということができよう（アルフォンソXIII世は，1931年4月に共和制の樹立がスペイン各地で宣言されると同時に，内戦の危険を回避するという理由でローマに亡命していた）[6-7]。

ところでこの国家元首継承法により，スペインは一つの，しかし看過できない矛盾を抱え込むこととなった。すなわち，事実上スペインを統治するフランコと，王位継承者であるバルセローナ伯爵ドン・フアン（Don Juan, アルフォンソXIII世の子）との関係である。1941年のアルフォンソXIII世の死去とともに，元首の地位に留まりながら独裁体制を維持しようとするフランコと，王位就任を主張するドン・フアンとの間にはある種の緊張関係が生まれた。この緊張関係のゆえに両者の関係が断たれるということはなかったものの，互いの主張は平行線をたどり，最終的に1948年8月25日，ドン・フアンは，フランコがドン・フアンの長男であり，アストゥリアス皇太子のフアン・カルロス（即位後，カルロスI世）を引き取ってスペインで教育を受けさせるという，いわば妥協案に合意したことで事態は決着を見た。フアン・カルロスは，10歳になると同時にそれまで家族とともに暮らしていたスイスを去り，まずはフランコが選んだ家庭教師から教育を受けることとなった。彼が長じて大学入学資格を得るにいたり，フランコがドン・フアンとさらなる会談を重ねた結果，フアン・カルロスはまずサラゴサの士官学校で2年間，ガリシアの海軍兵学校で1年間を過ごすこととなった。さらに彼はムルシアの空軍で1年間の教練を受け，陸・海・空軍のすべてを経験した。なおこの間に，フアン・カルロスが軍部と

の人脈を築いたことが，その後1981年に発生するクーデターを未然に防ぐことに寄与したと見る向きもあることには注意が払われてよい[8]。

軍隊での経験を終えたフアン・カルロスは，続いてマドリッド大学に入学し，政治経済，哲学，歴史，文学，財政，法律などを学んだ。そして1963年から68年にかけては農業省，財務省をはじめ内務省，法務省などで研修を受け，フランコによるフアン・カルロスの教育（あるいは教化）は終了した[9]。

以上のような教育によってフランコは，フアン・カルロスを自らの「正統な」継承者に育成することによって上述の基本法に則ったフランコ体制の存続を目指していたことは明白であろう。

Ⅱ　カルロスⅠ世の即位と議会君主制の確立

1　カルロスⅠ世即位までの経緯

1969年7月22日，フランコは国会に対してフアン・カルロスを自らの継承者とすることを提案した。国会は，491対19（棄権9）の大差でこの提案を支持し，ここにいたってフアン・カルロスはフランコの基本法を尊重することを宣誓してアストゥリアス皇太子ではなくスペイン皇太子となったのである[10]。ただしここで留意すべき重要な点は，この時点では「王位」それ自身は彼の父であるドン・フアンに帰属しているという点であり，それゆえ今回国会がフアン・カルロスをフランコの継承者すなわち後の国家元首として認めたことは，君主制の「復活」ではなく，むしろ「創設」として認識されるべきであるという点である[11]。また，国家元首継承法により，フランコには今回の決定を覆して新たな後継者を指名する権限が留保されていた（13条）という点も見逃すことはできない。仮に，この時点でフアン・カルロスの口からフランコの意図とは反対の民主制を指向する発言などが聞かれた場合には，フランコは躊躇することなくその権限を行使していたであろうことが指摘されるゆえんである[12]。

とまれ，将来の国家元首としての地位を約束されたフアン・カルロスは以後

各国を訪問し，ニクソン，ブラント，ポンピドゥーあるいは裕仁といった各国の要人と接触を重ねつつ，徐々に国際的な認知を得ることになるのである。そして1971年7月16日，フランコは自らが海外に滞在する際および病気の際には，代わってフアン・カルロスがその権限を行使することを表明して権力の移譲への具体的な道筋をつけ，実際に1974年からは度重なるフランコの入院によってフアン・カルロスが国家元首としての権限を行使する機会が多くなった。1975年11月20日，フランコは長い闘病生活の末死去し，二日後の22日にいたってフアン・カルロスはカルロスⅠ世としてスペイン国王の座に就いた。即位に際して彼は，69年の時と同様フランコの基本法を尊重することを国会議長の前で宣誓するとともに，フランコに対して尊敬の念を表明したが，それ以上に重要なことは「今日からスペインは新しい段階に入る」と宣言して体制の変革，つまりは自由化を謳ったことである。その第一歩として彼は恩赦を発令してフランコ体制下で投獄された6,000人の政治犯を釈放し，またカタルーニャ語とバスク語を合法化したのである。

2　カルロスⅠ世の正当性

ところで，かかる一連の経緯をたどって即位したカルロスⅠ世ではあるが，その正当性にまったく疑いを容れる余地はないのであろうか。この点については，以下の観点から検討されねばならないであろう。

第一に，カルロスⅠ世に，国王としての「正統性」が認められるか否か，という点である。上述のごとく，カルロスⅠ世は基本法の一つである国家元首継承法の手続きに従ってフランコの継承者となったのであるから，形式的には同法9条の要件を満たしているものと思われる。わけてもスペインが伝統的に君主制を維持してきた点に鑑みた「王家の血統を継いでいること」という要件に関連して，スペインがすでに二回の共和政体，すなわち，1873・74年の第一共和制および1931年から39年までの第二共和制を経験していることをいかに評価するかについては注意が必要ではある。しかし何れの共和制の試みも短命に終わったこと，その間の政治状況が非常に不安定であったこと[13]等を考慮す

るならば，これをもってカルロスⅠ世の「正統性」あるいは君主制国家スペインの歴史的な連続性を否定することはできないというべきである。

第二に，そもそもこの新しい国王が圧政を敷いたフランコによって後継者に指名されたという事実は，カルロスⅠ世即位の正当性を疑うに十分な瑕疵といえるのではないかを検討しなければならない。ここでその正当性が否定されることによって，カルロスⅠ世の即位という史的事実はもちろんのこと，現行憲法が定めるところの「議会君主制」あるいは現代スペインの憲法政治そのものが根底から覆されることにもなりかねないからである。

さてフランコは，自らによる独裁体制維持への欲求と，法的にも王位就任を主張して譲らない王位継承者の存在というジレンマを解消すべく，ドン・フアンと何回かの会談を持ったこと，また両者の主張は平行線をたどり，最終的にはドン・フアンが妥協する形で決着をみたことは上述の通りである。その際，フランコがドン・フアンの王位就任をいかにしても認め難かった理由として，次のことが指摘される。すなわちフランコは，国家元首継承法９条に見られるように形式的には王位継承の連続性を重視しているように思えたが，実際には自らの想定する君主制と第二共和制以前の君主制との断絶を指向していたのである[14]。ここでフランコが想定する君主制とは，あくまで自らの独裁体制の許容する範囲内に留まるもの，うがった見方をすれば自らの「傀儡」として機能するもののみであったろうことは想像に難くない。前節で述べたように，カルロスⅠ世の即位はいわば君主制の「創設」であり，「復活」ではないということは，かかる文脈において理解されねばならない。しかしその一方で，フランコのこのようなスタンスには同調しえない王党派[15]も存在していたことは事実であり，彼らは内戦に際して同派に与していたにも関わらず自由主義的，民主主義的思想で知られたドン・フアンの下に参集した。事実彼の諮問機関（Consejo Privado）には，保守派から社会主義者まで，多様な人材が顔をそろえていたのである。ドン・フアンが公式に自らの王位就任を放棄したのは，実に1977年に入ってからのことであったが，フランコにとってフアン・カルロスをその継承者に指名し，ドン・フアンの王位就任を認めなかったことは，まさに国家元首継承法９条の規定と自らの欲求とが理想的な形で合致したことを

意味し，反対にドン・フアンからすると最大限の妥協であったといえよう。以上のことからカルロスⅠ世即位の正当性について言及されるべき点は，そこにはフランコによる正当性の付与が認められるにしても，その実状は政治的なバイアスがかかったきわめて不安定もしくは不完全なものであったということになろう。

それでは，即位以来すでに20年を経過している国王カルロスⅠ世は，この間常に不安定もしくは不完全な正当性に依拠しつつ王位にあったのであろうか。換言すれば，かかる消極的要素を治癒し，さらにカルロスⅠ世即位の正当性を担保する積極的な要素は見出されないのであろうか。第三に検証されねばならないのはこの問題である。

端的に表現するならば，即位当初の正当性への疑いは，少なくとも表面的には，解消されたかあるいは解消しつつあると考えてよいであろう。これは，カルロスⅠ世が20年にわたって王位に就いているという事実それ自体が物語っている。但しここではより実証的な検証を行うために，スペイン国内からの正当性の付与と，国際的な承認という二つの観点に立って論を進めたい。

前者に関しては，まずはカルロスⅠ世即位当時の国内における諸政治勢力[16]の，新たな国王ないし君主制に対する態度を振り返ることが便宜であろう。当時の状況に鑑みれば，これらは概ね三つの勢力に分類が可能である。第一に，いわばフランコ派の残党と目される勢力であり，彼らはをこれを利用してフランコ体制の存続を画策していた。第二に，いわゆる改革派として認識される勢力は，国王ないし君主制を支持しながらもこれを利用して独裁体制から民主制へのスムーズな移行を目指したものである。これら二つの勢力（うち，主なものは国民連合－APや民主中道連合－UCD）に共通する点は，程度の差こそあれいずれも君主制に好意的な態度を示していたことである。一方，以上のいわば君主制支持派とは真っ向から対立する第三の勢力があった。社会労働党－PSOEあるいは共産党－PCEといった左派勢力は，歴史的な理由に鑑みても，あるいはカルロスⅠ世が独裁者であったフランコによって後継指名を受けたという事実それ自体に照らしても，君主制を支持することはおろか王位に就く正当性すら認めることはできない旨，主張していた[17]。彼らの中では，君主制＝

フランコ体制の継続というイメージが強かったであろうことは，容易に想像できる。とまれ，概して君主制を正面から容認する勢力は少数派であったことには注意が払われるべきであろう[18]。

しかし，カルロスⅠ世あるいは新しく出発した君主制にとっての逆風は，時間の経過とともに弱まっていったことにもまた同様の注意が必要である。その理由は何だったのであろうか。大きく分けて二つの理由が指摘されるところである。まず，カルロスⅠ世自身のパーソナリティー，換言すれば国王自ら主導的な立場に立ってスペインの民主化を推進したという点が第一点，次に，フランコ体制崩壊後の政治的混乱の中で，国民は国家としての統合の途を模索していたのであって，その最良の方法として君主制を選択したという点が第二点である。

それでは，カルロスⅠ世が推進した民主化政策を具体的に振り返ってみたい。そもそもフランコ体制下の基本法は，国家元首に大きな権限を認める性格のものであり，そこには国家機関の主要なポストに対する任命権も含まれていた[19]。そこでカルロスⅠ世は，この権限を最大限に行使することによってフランコ体制の残滓，特に「ブンケル（bunker）[20]」と呼ばれ，いかなる改革にも抵抗しようとする体制内保守派の一掃に取り組んだのである。まず，フランコ死去の直後，1975年11月26日には生粋のフランコ派として知られるロドリゲス・デ・バルカレルが王国顧問会議および国会の議長の任期を終えていたが，国王は彼の後任として自らの友人でもあり，すでに何回かの会談を重ねて国王の民主化推進に理解を示していたフェルナンデス・ミランダを任命した。

続いて，1974年１月の組閣以来フランコ体制の維持を目指していたカルロス・アリアス・ナバーロ内閣が1976年７月１日に総辞職したことを承け，同年７月４日，国王は新たにアドルフォ・スアレスを新首相に任命した。第一次スアレス内閣の誕生である。首相の指名にあたっては，王国顧問会議から３人の候補者が示されていたが，彼はその中でももっとも知名度の低い人物であったこと，さらには以前に「国民運動[21]」の事務局長を務めた経歴があることなどから，今回の首相任命を疑問視する声もあったという[22]。しかし実際にスアレス内閣は，全体主義政党を除くすべての政党の合法化，政治犯の釈放など，

カルロスⅠ世の民主化推進の基本路線にしたがって多くの成果を上げた。

とりわけ，8月に入って発表された「政治改革法案」には見るべきものが多い。同法案には，「議会君主制」を採用し，従来一院制であった国会を二院制に移行させる内容が盛り込まれていた。11月18日，同法案は国会で可決・承認された。その骨子は，(1) 上下両院からなる立法府を設け，下院350名，上院207名の議員は直接普通秘密選挙によって選出されること，(2) 下院議員は比例代表制，上院議員は多数制の原則によって選出されること，(3) 国王は選出議員の5分の1を超えない範囲で上院議員を任命できること，(4) 国王は国家的重大事項を国民投票に付すことができること，などであった[23]。国会を通過した政治改革法案はさらに国民投票に付された。「あなたは政治改革法案に賛成しますか」の問いに対しては，共和制を主張し，さらにはスアレスの主導による民主化を快く思わない社会労働党および共産党の棄権，あるいはブンケルの強硬な反対にも関わらず，賛成94.2%，反対2.6%という国民の圧倒的な支持が寄せられ，承認された。投票率は77.4%であった[24]。この結果は，社会労働党や共産党，さらにはブンケルにとっては手痛い敗北であったと同時に，国王自身にとっては重大な意味を持つものであったろう。すなわち，ここにフランコ体制の法制的解体の第一歩が記されたのである。

また，1977年4月にはカルロスⅠ世の強い要望からついに共産党が合法化された。国王は王宮に同党のサンチアゴ・カリージョ書記長を招待までし，その成果は共産党が国王主導の民主化政策に協調するようになったという形で現れた。一方，社会労働党は未だ急進的な改革に固執し，またフランコ主義の影響がうかがえるすべてのものに対して断固たる態度で望む途を選択した。しかし社会労働党はその後の1982年，フェリペ・ゴンザレス書記長の下で総選挙を戦い，見事に政権を奪取したのである。

こうして国内におけるカルロスへの評価は徐々に高まりをみせていった。それは世論の動向にも確実に反映され，あるアンケートによれば，君主制と共和制，何れの政体を望むかという問いに38.8%の人々が君主制と回答し，またカルロスⅠ世の政策を認めるか否かという問いには全面的にせよ部分的にせよ71%の人々がこれを肯定し，さらに君主制は社会主義の政府と両立するかと

いう問いに対しても実に45%の人々が「はい」と答えている[25]。さらに，1981年2月23日，開会中の国会にテヘーロ中佐の率いる治安警察隊150名が自動小銃で威嚇射撃をしながら乱入し，議場を占拠した後に軍事政権の樹立を要求するというクーデター，いわゆる「二三・F事件」が起こった。国王はクーデターに反対を宣言し，反乱者に降伏を命じた結果彼らは乱入から18時間後に投降し，結局クーデターは失敗に終わったのである[26]。この事件に対するカルロスⅠ世の毅然とした態度は，スペインにおける民主的改革を指向する彼の姿を強く国民に印象づけるものとなった。

かかる状況に鑑みれば，カルロスⅠ世の進めた民主化政策は着実に国民に受容され，そして根付いていったということが可能であろう。そしてこのことは同時に，国王あるいは君主制がスペイン国内における正当性を獲得したことをも意味するものではなかろうか。

それでは，国際政治の場において自らの正当性を認知させるべくカルロスⅠ世はいかなる行動を示したのであろうか。そもそも基本法が国家元首としての国王に強大な権限を認めていたことは上述の通りであるが，それと同様，外交についても彼は主導的な立場に立っていたのである。

フランコによる後継者指名を受けた1969年以降，彼がアメリカを始めイギリス，フランス，日本などに遊んで各国の要人との関係を築き始めたことは前に述べた通りである。その後1976年には即位後初の外遊を行い，スペイン国王としては初めて，かつての植民地である南米を訪れた。その目的の一つには，過去に彼の地で独裁的支配行ったブルボン朝との対比によって，民主化を進めている現在のカルロスⅠ世の姿を国際社会にアピールすることがあったと思われるが，その本当の目的はアメリカを訪問することにあったようだ[27]。アメリカで彼は熱烈な歓迎を受け，議会演説に際しても大きな称賛を浴びたが，このことはアメリカという巨大な民主主義国家から国王自身と新たな君主制が承認を受けたことを意味するのである。とりわけアメリカは，かつて内戦の時期にフランコ政権を非難する声明を出したという経緯があるため，その効果には看過しえないものがあったのではなかろうか。

さらにカルロスⅠ世は，1977年には教皇ポールⅥ世と接見してカトリック国としても改めて認知を受け，ヨルダンおよびエジプトを訪問してアラブ国家とのつながりを確認するなど，国際社会への熱心な働きかけを続けた[28]。

なお，ここで看過してはならないことは，スペインのEC加盟問題である。すでに1962年2月，スペインはEECへの加盟に意欲を見せ，その旨打診してはいたが，ほとんど無視された状態で放置されていた。1977年7月に入り，ECに対する正式な加盟申請を行い，ECは9月にこれを受理したことを発表した。とはいえその後の数年間は，全ヨーロッパ的な経済不況のために構成国間の利害対立が表面化し，とりわけ82年6月のミッテラン・フランス大統領の「現体制でのスペインの加盟は災害を招く」といった発言に象徴されるように，時期尚早論，消極論が強まっていった[29]。かかる状況を打破するための大きな要因となったのは，先に触れた社会労働党政権の成立である。これは，スペインに民主主義体制が確立したことをEC構成国に強く印象づける出来事となった。ECは，84年2月にEC外相理事会が同国の加盟に基本的な合意を行い，同年9月のEC外相会議，12月の首脳会議を経てECの第三次拡大が確認され，85年6月の加盟条約調印の後，ついに86年1月1日をもってスペインはEC加盟を果たしたのである。

スペインのEC加盟については，同国内の政治状況の変化という要因を無視することはできないにしても，1975年のカルロスⅠ世即位から足掛け10年の歳月を経て，西ヨーロッパの一員として正式に認知されたことの意義は大きい。

いずれにせよ，スペインが晴れて国際社会に登場し，各国から受け入れられたことにより，同国における君主制の正当性はさらに強固なものとなったといえよう。そして，EC加盟の際に明らかになったように，国内における正当性の獲得と国際社会におけるそれとがまさに表裏一体であることが証明されたのである。

Ⅲ　スペイン国王の憲法上の地位

1　1978年憲法の制定

第Ⅱ章で見たように，第一次スアレス内閣の成立以後，スペイン国内ではカルロスⅠ世の意を受けたスアレスによる民主化政策が進められていた。そして，これら一連の改革のいわば集大成とも呼べるのが新憲法の制定である。このために，第一回総選挙，すなわち憲法制定議会選挙が1977年６月15日に行われることが決定され，同時に新選挙法が制定された。

内戦以来実に40年以上の時を経て実施されたこの選挙には，上院248，下院350の議席を目指して，最右翼の国民連合－APから極左諸党，さらにはバスク，カタルーニャの民族主義政党まで，150を超える政党が候補者を立てたという[30]。79％を超える高い投票率の中で行われた選挙の結果，下院においては民主中道連合が得票率34.8％，165議席を獲得して第一党となり，社会労働党が得票率29.4％，議席数118でこれに続いた[31]。同年８月には憲法起草委員会が設置され，これら二つの政党に加えて共産党および国民連合が参加する中で草案の検討が進められた[32]。翌78年１月，憲法草案の原案が議会広報に掲載され，委員会では20日間のうちに2030もの修正が提起されて活発な議論が戦わされたという。委員会での審議は３月16日に終了し，４月11日には各政党の代表が草案に署名，同17日に「憲法草案に対して提出された修正に関する報告書」という形で議会広報に掲載された後，審議の場は国会へと移された[33]。

草案に対する各党の態度は様々であり，とりわけ政治形態に関する条項については，社会労働党は共和制を主張し，民族主義派は連邦制を提唱するという形で君主制に反対した。国民連合は，新憲法の制定自体に賛成する者，反対する者に分裂，共産党はカルロスⅠ世の民主化政策を評価して民主主義確立までのプロセスとして君主制を容認し，草案を支持した。最終的には社会労働党もカルロスⅠ世の下での君主制を認めるということで決着し，10月31日，憲法草案は，上院では賛成226，反対５，棄権８，下院では賛成325，反対６，棄権14という圧倒的多数で可決された[34]。

続いて同年12月6日，新憲法は国民投票に付され，87.7%の賛成票を得て国民に承認されるところとなった。ただし，この国民投票における投票率は67.7%と非常に低く，特にバスクやガリシアといった地域では投票率が50%前後と非常に低いものとなったことには注意が必要であろう。これら地域の民族主義者はそもそも連邦制を主張していたために，新憲法に対する不満がこの数字となって現れたのであろうし，他の多数の国民については民主化路線の定着にともなう政治的無関心および左派系政党のとった穏健主義への批判などが考えられる要因として指摘されている[35]。

2　1978年憲法下の国王

さて，かかる経緯の後に制定された現行憲法は，冒頭に記したように「議会君主制」を採用するものである（1条3項）。その意味するところは，およそ次のように理解されている。まず基本的に，およそ立憲君主国家に共通の性格を持つものとして，スペインにおいても国王は「君臨すれども統治せず」という存在である。主権は常に国民が自らの代表者，すなわち国会を通じて行使するものであって，国王にその権限はない。かかる観点からするならば，憲法1条2項が「国家の主権は，スペイン国民に存し，すべての権力は国民に由来する」と定めていることは非常に象徴的である。また，同条1項が「スペインは，社会的かつ民主的な法治国家として存在し，法秩序の至高の価値として自由，正義，平等および政治的多元主義を擁護する」と規定していることと考えあわせると，主権が国王に存するいわゆる「君主制」国家とは異なったものであることが分かる。

それでは，ここであえて「議会君主制」という文言を用いたことにはいかなる意義が見出されるであろうか。通常，君主制という言葉は統治形態を指すものであり，国家形態を指すものとして用いられることは希であることがまず指摘されてよい[36]。そして，スペインが国家形態として議会君主制を謳ったことの意義は，まず国王と政府とを分離し，国政に関与する権能は政府にのみ認めるという外観を整え，またこの点との関連で，政府あるいは国会の場に起こり

うる政治的な問題に対し，国王はいわば緩衝帯として機能することによって国家の統合を維持する役割を担うものとするということが考えられる[37]。結局のところ，国王自身に与えられる権限は非常に小さなものとならざるを得ないのであり，反対に，議会の信任を得て権限を行使する政府に帰属する権限はより大きなものになって行くであろう[38]。国王が現実の政治に関与することは許されないのであり，積極的に政治的な役割を果たすこともまた禁じられると考えてよい。議会君主制とはすなわち，民主的な国家を形成するための一つの段階に過ぎず，一つの政治的な選択であるといえるのではないか[39]。

続いて，かかる議会君主制の下で，スペイン国王には憲法上いかなる役割あるいは権限が認められているのかについて，その主なものを取り上げて検証することとしたい。

憲法56条の規定から，国王の機能はおよそ次の三つに分類することが可能である。すなわち，「象徴的機能（función simbólica）」，「調整的機能（función moderadora）」そして「裁量的機能（función arbitral）」である[40]。以下で，その主なものを検討する。

国王の象徴的機能の基礎として，国王は国家元首であり，国家の統一および永続性の象徴であり，また国王は，国際関係，とりわけ歴史的にスペインと共同体を形成してきた諸国との関係において，国家の最高代表権を有するという規定が設けられている（56条1項）。ことに外交に関しては，本来国王が直接これを処理することはなく，内閣が指揮するものではある（97条）。しかし国王の事実上の行為，たとえば外遊などは，たとえそれが間接的なものであるにせよ外交問題を円滑に処理するための重要な機能とみなされる。また，国王は，大使およびその他の外交代表に信任状を交付し，またスペインに着任した外国の代表から信任状を受理する権限（63条1項），憲法および法律に従って，条約上の義務に対する国家の同意を表明する権限（同2項），国会の承認の下で戦線を布告し，講和を行う権限を有している。

次に，国家元首としての国王に認められている権限のうち，その象徴的地位に由来するものとして文官および武官の任命権および栄典の授与がある（62条f）。しかし憲法97条により，内閣が上述の外交に関する問題のみならず内

政に関しても一般的な責任を負っていること，国王の任命権は政府による任命を追認するだけに留まることから，この権限は単なる形式的なものに過ぎない。唯一の例外があるとするならば，それは65条２項の，王宮の文武官の自由な任免のみである。

さらに司法権との関係で象徴的機能を考えると，117条１項前段は，司法は国王の名において行われるとの文言が目を惹く。しかしこれはあくまでも形式的なものに過ぎず，実際に同条は，司法が国民に由来すること，それは独立の裁判官が法律にのみ従って行うことが規定されている。

国王の象徴的機能のうち，古典的ともいえる機能が軍隊の最高指揮権である（62条ｈ）。1981年２月のクーデターが未遂に終ったのは国王の働きに負うところが大きいが，その際国王はこの軍隊の最高指揮権の発動としてクーデター反対を宣言し，反乱者に投降を命じたのである。ただし，この権限もまた事実上内閣のコントロール下にあるもので，国王に任意の指揮権が認められるわけではない。

続いて国王の調整的機能については，まず国王は他の国家機関が円滑に機能するよう，調整者として行動する旨，56条１項に規定されている。この機能は，とりわけ立法府および行政府との関係において認められるものである。

まず，62条ｂは，国王に国会の召集および解散し，選挙を公示する権限を認めている。召集については，68条６項が下院の召集時期を選挙後25日以内と規定している。解散は，(1) 任期満了，(2) 下院において選挙後２カ月以内に内閣に対する信任が得られない場合，(3) 憲法改正に際して両議院の議員のそれぞれ３分の２が改正に賛成した場合，(4) 内閣総理大臣が解散を決定した場合[41]に行われる。何れにしても解散権を実際に行使するのは内閣総理大臣であり，国王ではない点に注意が必要である。選挙の公示は，国会の解散後30日ないし60日以内に行われる（68条６項）。

さらに国王は，国会が可決した法律を裁可し，公布し，および公刊を命ずる（62条ａ）。国王は，法律が必要な要件を満たしていない場合にのみこれを拒むことができるが，実際には考えられないことである。結局，国王の行為によって国会に属する立法権が侵害されることはないのである。

国王と内閣との関係に目を転じると，まず国王は内閣総理大臣の候補者の指名，任命，そして罷免を行う（62条ｄ）。しかしこの権限も単に形式的なものであり，特に罷免に関しては内閣総理大臣の辞任を承諾するのみであって，国王自らが内閣総理大臣を罷免し，または辞職させることはできない。なお，先に見た文官および武官の任命権は，この調整的機能としても把握することができる。また，同じく人事に関する権限には自治州知事の任命権も含まれる（152条１項）。

加えて，国王は閣議で承認されたデクレを公布し（62条ｆ），また国事に関する報告を受けること（62条ｇ）が認められている。

最後に，国王のいわゆる裁量的機能について見る。これは国王が任意に内閣総理大臣の候補者を国会に推薦する行為を指している。しかしこの点，99条１項が「下院の改選の都度，および憲法に定められたその他の場合に，国王は国会に代表を有する政治的会派により指名された代表者と事前に協議した上で，下院議長を通じて，内閣総理大臣の候補者を推薦する」と定めていることから，事実上国王が任意に候補者の人選を行うことはできず，通常は与党の党首を推薦することしかできないことが問題となる。仮に国家に緊急事態が発生した場合や，あるいは選挙の結果確固とした基盤を持つ多数派が形成されない場合など，いわば例外的な状況でのみ重要視されるに過ぎない機能である。

以上に見てきたように，国家機関としての国王の権限は非常に限定的であって，立法，行政，司法といった国家作用について国王が自ら意思決定を為す余地はほとんどないことは明白である。これはいわば議会君主制という制度に内在した特性であり，むしろこの制度の特質が健全な形で憲法に表明されているといえるのかもしれない。

しかしその一方で，あるいは権限が制限されていることと引き替えに，国王にはいくつかの特権が認められている。56条３項はまず，国王の身体は不可侵であり，かつ無答責であると定める。しかしこの条項は国王に刑事責任能力を認めない趣旨ではなく，国王が犯罪を犯した場合には59条によって国会がその責任を追及することになる。さらに国王の行為は，憲法が定める方式による大臣の副署がなければ効力を有しないとし，この規定を承けて64条は内閣

総理大臣あるいは主務大臣は国王の行為について副署する旨を定めるのである（1項）。また，国王の行為についてはこれに副署したものが責任を負わねばならない（同条2項）。かかる規定は，国王が政治的な存在になることを避けるために設けられたものといえる。その他，国王は王族および王室の維持のために国家から一定の金額を受け取って自由にこれを配分することができる（65条1項）。王家の文官および武官を任意に任免できることは，先に触れたとおりである（2項）。

むすびにかえて

以上，20世紀も後半に入って新たな出発を図ったスペインにおける議会君主制度について，若干の考察を試みてきた。ここでは，本文中にも指摘したいくつかの問題点を整理してむすびにかえたい。

スペインについてまず問われることは，フランコの手による君主制の「創設」の意味であった。ここにいう「創設」は，君主制に付随しがちな，伝統や正統性といった要素を，形式的には維持しながらも実は過去との断絶をもくろんだ彼の意図がどの程度実現されたかという点から検討されるべきである。おそらく，彼の目指した君主制の「創設」は概ね成功したと考えてよいのではあるまいか。但し，カルロスⅠ世の即位によってもたらされたその後の君主制の変容は，彼には想像もつかなかったことであろうが。

この君主制の変容とはすなわち，カルロスⅠ世が主導して行ったスペインの民主化である。そもそもがフランコによって創設された君主制であったために，その正当性（正統性も含めて）が疑われたカルロスⅠ世の即位ではあったが，彼の民主化への熱望には当初の国民の戸惑いや不信感，あるいは猜疑心を払拭してなお有り余るものがあった。あるいはこの点は，1978年憲法が規定する議会君主制という制度によって国王の権限が大幅に縮小されている，という制度的な理由に加え，彼自身のパーソナリティーに負うところが大きいこともまた事実ではある。このように考えるならば，かつての憲法制定議会において主

張された，民主化へのプロセスの一段階として君主制を容認するという声もあながち妥協的なものとはいえないのかもしれない。

とまれ，現在にいたっては議会君主制という制度はすっかり国民の間に定着し，同時に国際社会においてもこれをかつての独裁体制とだぶらせて捉えることは無くなっているようである。しかし，現在のスペインをとりまく状況は，必ずしも良好なものとはいえない。国外にあってはECが1999年の通貨統合を目前に控えており，国内においては1996年３月に実施された総選挙における社会労働党から国民党－PPへの政権交代が行われ[42]，さらには独立を求める民族主義者の非合法活動が社会不安を煽っている[43]。

憲法制定までにフランコ基本法の下で強力な権限を行使し，民主化への努力を重ねたカルロスⅠ世が，いまや極めて限定的な，形式的な権限しか持ち得ないことは皮肉ではある。しかしその彼が，議会君主制の下で今後どのようなスペインの舵取りをしていくのかを，注意深く見守る必要がありそうである。

注

1　Constitución Española,《BOE》núm. 311-1, de 29 de diciembre de 1978.

2　立石博高・若松隆編『概説スペイン史』（有斐閣選書），有斐閣，1987年，208ページ。

3　基本法の主たるものは，以下の７つの法律である。原誠他編『スペインハンドブック』，三省堂，1982年，450～452ページ。

①労働法典（1938年３月９日公布）

②国会設置法（1942年７月17日公布）

③国民憲章（1945年７月17日公布）

④国民投票法（1945年10月22日公布）

⑤国家元首継承法（1947年７月26日公布）

⑥国民運動原則法（1958年５月17日公布）

⑦国家組織法（1967年１月10日公布）

4　フランコは，1942年には一院制の国会を創設していた。上述（注３）の国民憲章あるいは国民投票法は，この国会の開設と並んでスペインに民主的国家の装いを付与することを目指したものである。その背景には，第二次世界大戦の結果スペインの同盟国であった日本・ドイツ・イタリアが崩壊し，1945年８月のポツダム会談にお

いてアメリカ・イギリス・ソ連から出されていた反スペイン声明，翌46年３月のフランスによる国境閉鎖およびアメリカ・イギリス・フランスから発せられたフランコ政権非難の共同声明，さらには同年12月の国連総会における「スペイン排斥決議案」の採択といった国際的な圧力に対処する必要性があった。立石・若松編，前掲書，210～211ページ。

5 Michael T. Newton and Peter J. Donaghy, *Institutions of Modern Spain, A Political and Economic Guide,* Cambridge University Press, 1997, p.33. および原他編，*ibid.*

6 Georges Couffignal, *Le Régime Politique de l'Espagne,* Montchrestien, 1993, p.59.

7 なお同法は，国家元首が法案の重要性または公共の利益により必要と判断した場合には国会が制定した法律を国民投票に付すことができる旨を定めた国民投票法に従って国民投票に付され，圧倒的な支持を受けたが，その際にはフランコからの大幅な干渉が行われたことには注意が必要である。Couffignal, *ibid.*

8 Couffignal, *op. cit.,* p.60.

9 Newton and Donaghy, *ibid.*

10 ちなみに，フアン・カルロスは1962年に結婚しており，彼の妻であるソフィアはスペイン皇太子妃となった。

11 Couffignal, *op. cit.,* p.61., Newton and Donaghy, *op. cit.,* p.31.

12 Newton and Donaghy, *op. cit.,* pp.33-34.

13 第一共和制下では，２年足らずの間に４人の大統領が誕生し，２回のクーデターが起こった。また，第二共和制は1936年以後，内戦に突入することとなった。

14 Newton and Donaghy, *ibid.*

15 王党派はフランコ体制を支える重要な支柱であった。しかしフランコとドン・フアンとの協議が整う過程で王党派は親フランコ派と反フランコ派とに分裂し，後者はフランコに疎まれるようになっていった。立石・若松編，前掲書，211ページ。

16 なお，ここであえて「政党」ではなく「政治勢力」という言葉を用いたのは，以下の理由による。すなわち，内戦中の1936年９月，反乱軍（フランコ派）の国防評議会の名において公布された布告により，すべての政党および政治団体は廃止が宣言されたからであり，さらに真の意味での政治結社の自由がスペインで認められるまでには，フランコの死後，1976年６月14日の政治結社法，同年７月19日の刑法改正，1977年１月４日の政治改革法および同年２月８日の政治結社法改正という一連の立法を待たねばならなかったからである。

17 Dimitri-Georges Lavroff, *Le Régime Politique Espagnol,* Que sais-je? PUF, 1985, pp.32-33., Newton and Donaghy, *ibid.*

18 Lavroff, *ibid.*

19 Couffignal, *op. cit.,* p.63.

20　立石・若松編，前掲書，225ページ。

21フランコ体制下の翼賛組織であり，全国民参加の唯一の政治団体（comunión）。cf., *supra*, note 16.

22　Couffignal, *op. cit.*, p.64.

23　立石・若松編，前掲書，224～225ページ。

24　Couffignal, *ibid.*

25　1978年4月，全国から無差別に抽出された1312人に対して行われたアンケート。原他編，前掲書，396ページ。

26　cf., 立石・若松編，前掲書，240～241ページ。

27　Couffignal, *op. cit.*, p.65.

28　Couffignal, *ibid.*

29　立石・若松編，前掲書，258～259ページ。

30　立石・若松編，前掲書，227ページ。

31　立石・若松編，前掲書，228ページ。

32　Blaustein and Flanz, *op. cit.*, p.32.

33　Blaustein and Flanz, *op. cit.*, p.33.

34　Blaustein and Flanz, *op. cit.*, p.34., 立石・若松編，前掲書，236ページ。

35　立石・若松編，前掲書，237ページ。

36　Jorge de Esteban y Luis López Guerra, *El Régimen Constitucional Español 2*, Editorial Labor, 1984, pp.9-10., Lavroff, *op. cit.*, p.35.

37　Lavroff, *ibid.*

38　これを「合理化された君主（Monarquía racionalizada）」と称することもある。de Esteban y Guerra, *op. cit.*, pp.13-14.

39　なお，新たに立憲君主制を創設する際のもう一つの選択肢として，国王に政策決定権を委ねながらその遂行は政府によって為されるという形も考えられる。スペインにおいては，国民連合あるいは民主中道連合の一部にこのような考え方があったという。

40　de Esteban y Guerra, *op. cit.*, pp.28 et s.

41　拙稿「スペインの議会制度に関する憲法学的考察」『大学院研究年報』第26号，1997年，4～5ページ。Newton and Donaghy, *op. cit.*, p.38.

42　cf., 拙稿，前掲論文。

43　cf., 拙稿「スペインにおける地方自治の構造と問題点－自治州を中心にして－」『大学院研究年報』第23号，1994年。

A Characterization of the Bi-Embeddability of a Graph into Surfaces

Toshiki Endo*

Abstract

In this article, we study the bi-embeddability of a graph into surfaces. The bi-embeddability of a graph into a surface means the embeddability of both the graph and its complement into the surface. It depends on the number of the vertices of the graph. For an arbitrary surface, a necessary condition for a graph to be bi-embeddable into the surface is given. The result is best-possible for some surfaces with high Euler characteristics.

§ 1. Definitions, notations, and the results

Graphs are assumed to be finite, undirected, and simple. We refer to [BM] and [GT] for the terminology and notation not defined in this article.

The following theorem is the motivation of this study:

Theorem 1.1 (Battle-Harary-Kodama [BHK]). *For every planar graph on 9 or more vertices, the complement of the graph is not planar. And, there exists a planar graph on 8 vertices the complement of which is also planar.*

Theorem 1.1 states that, for any graph on 9 or more vertices, at least the graph or its complement cannot embed into the plane. Then, a natural question arises from the topological point of view; for a given surface other

*E-mail: toshi2@mn.waseda.ac.jp

than the plane, does there exist an analogue of Theorem 1.1?

Without loss of generality, we may assume that surfaces are closed. It is well-known that there are two ways to construct surfaces; the way of attaching g handles to the sphere ($g \geq 0$), and the way of attaching k crosscaps to the sphere ($k \geq 1$). We denote these surfaces by Σ_g and $\widetilde{\Sigma}_k$, respectively. Any surfaces falls in one of these two infinite classes. For example, the surface obtained from the sphere by adding g handles and k crosscaps is homeomorphic to $\widetilde{\Sigma}_{2g+k}$. These surfaces Σ_g and $\widetilde{\Sigma}_k$ are called the *orientable surface with genus* g and the *nonorientable surface with nonorientable genus* k, respectively. Particularly, the surfaces Σ_1, Σ_2, $\widetilde{\Sigma}_1$, and $\widetilde{\Sigma}_2$ are called the *torus*, the *double-torus*, the *projective-plane*, and the *Klein bottle*, respectively.

For a graph G embedded in a surface Σ, the number of $|V(G)| - |E(G)| + |F(G)|$ is called the *Euler characteristic* of G, and is denoted by $\chi(G)$. It is also well-known that the Euler characteristic $\chi(G)$ depends only on the surface Σ and not on the embeddings. Thus, $\chi(G)$ may be called the Euler characteristic of the surface Σ, and may be denoted by $\chi(\Sigma)$. If the surface is the orientable surface with genus g, then the Euler characteristic is $2-2g$, and if the surface is the nonorientable surface with nonorientable genus k, then the Euler characteristic is $2-k$. See [GT] for more details on surfaces.

For our aim, it is convenient to introduce the following definition:

Definition 1.2. A graph is *bi-embeddable* into a surface if both the graph and its complement are embeddable into the surface.

From a simple observation, we have the following:

Proposition 1.3. *If there are no graphs on n vertices bi-embeddable into a given surface, then there are no graphs on $n+1$ vertices bi-embeddable into the surface.* □

By Proposition 1.3, the bi-embeddability of a graph G into a given surface Σ depends on the number $|V(G)|$ of the vertices, that is, $|V(G)|$ gives a necessary condition. Obviously, G is bi-embeddable into Σ if $|V(G)|$ is sufficiently small, so our concern is the maximum of $|V(G)|$ such that G is bi-embeddable into Σ. Thus, the following notation makes sense:

Notation 1.4. For a given surface Σ, the maximum number of the vertices of the graphs bi-embeddable into Σ is denoted by $\xi(\Sigma)$.

Theorem 1.1 states that $\xi(\Sigma_0) = 8$. The answer for the question posed above is "yes", and the question is re-stated as follows:

Question 1.5. Determine $\xi(\Sigma_g)$ and $\xi(\widetilde{\Sigma}_k)$ for each $g \geq 1$ and $k \geq 1$.

In this article, Question 1.5 is settled for the projective-plane, the torus, and the double-torus. For other surfaces, an upper bound is given:

Theorem 1.6.

(1) $\xi(\widetilde{\Sigma}_1)=12$.

(2) $\xi(\Sigma_1)=13$.

(3) $\xi(\Sigma_2)=14$.

Theorem 1.7.

(1) $\xi(\Sigma_g) \leq \left\lfloor \dfrac{13+\sqrt{73+96g}}{2} \right\rfloor$.

(2) $\xi(\Sigma_k) \leq \left\lfloor \dfrac{13+\sqrt{73+48k}}{2} \right\rfloor$.

Here, $\lfloor * \rfloor$ denotes the greatest integer not exceeding $*$.

We now outline the rest of this article. In Section 2, we review the thickness of a graph, and then use known thickness results to prove

Theorem 1.6. Section 3 is devoted to prove Theorem 1.7. Section 4 is the conclusion.

§ 2. Thickness and its application to the bi-embeddability

We begin with the definition of the thickness of a graph:

Definition 2.1. For a graph G and the orientable surface Σ_g with genus g, the minimum number of subgraphs of G, each embeddable into Σ_g, whose union is G is the Σ_g-*thickness* of G, and is denoted by $\theta_g(G)$.

For the nonorientable surface $\tilde{\Sigma}_k$ with nonorientable genus k, the $\tilde{\Sigma}_k$-*thickness* $\tilde{\theta}_k(G)$ is defined similarly.

In order to prove Theorem 1.6, we need the following thickness results for the complete graph K_n on n vertices:

Lemma 2.2 (Beineke [B1] [B2]).

(i) $\tilde{\theta}_1(K_n)=\left\lfloor \frac{n+5}{6} \right\rfloor \quad (n \geq 1)$.

(ii) $\theta_1(K_n)=\left\lfloor \frac{n+4}{6} \right\rfloor \quad (n \geq 2)$.

(iii) $\theta_2(K_n)=\left\lfloor \frac{n+3}{6} \right\rfloor \quad (n \geq 3)$. □

Proof of Theorem 1.6. It follows from Lemma 2.2 (i) that $\tilde{\theta}_1(K_{12})=2$ and $\tilde{\theta}_1(K_{13})=3$. Note that if a graph has n vertices, then the union of the graph and its complement is K_n. Thus, $\tilde{\theta}_1(K_{12})=2$ guarantees the existence of a graph on 12 vertices bi-embeddable into the projective-plane, and $\tilde{\theta}_1(K_{13})=3$ means that there are no graphs on 13 vertices bi-embeddable into the projective-plane. Therefore, $\xi(\tilde{\Sigma}_1)=12$.

Similarly, $\xi(\Sigma_1)=13$ and $\xi(\Sigma_2)=14$ follow from Lemma 2.2 (ii) and (iii), respectively. □

Remark 2.3. For a surface Σ, the number $\xi(\Sigma)$ gives a necessary condition for a graph to be bi-embeddable into Σ, that is, the number of the vertices of the graph must be less than or equal to $\xi(\Sigma)$. However, all graphs on $\xi(\Sigma)$ vertices are not bi-embeddable into Σ. Then, what is the sufficient condition? This is the matter of the structure of the graph. Although the analysis of it should be done, this subject is not our present concern.

§ 3. Proof of Theorem 1.7

Let G be a graph on n vertices bi-embeddable into Σ_g.

Since $|E(K_n)|=n(n-1)/2$, we may assume without loss of generality that $|E(G)| \geq n(n-1)/4$.

On the other hand, by combining Euler's formula $|V(G)|-|E(G)|+|F(G)|=2-2g$ with $3|F(G)| \leq 2|E(G)|$, we obtain $|E(G)| \leq 3|V(G)|+6g-6$.

Thus, we have $n(n-1)/4 \leq 3n+6g-6$. Solving the inequality, we have $n \leq \lfloor (13+\sqrt{73+96g})/2 \rfloor$. This completes the proof of (1).

Replacing $2g$ by k on the argument above, we have the proof of (2). □

§ 4. Conclusions

By Theorem 1.6, the results of Theorem 1.7 are best-possible for the torus (g=1), the double-torus (g=2), and the projective-plane (k=1). Unfortunately, Theorem 1.7 is not sharp for the sphere (g=0).

The question which we must consider at first is the Klein bottlal case

(k=2), that is, does it hold that $\xi(\tilde{\Sigma}_2)=12$? This question is equivalent to $\tilde{\theta}_2(K_{13})=2$? To the author's knowledge, there is no detailed study of the $\tilde{\Sigma}_2$-thickness. If K_{13} is decomposable to two Klein bottlal subgraphs, then they must be triangulations of the Klein bottle. It is known [BM] that K_{13} is decomposable to two subgraphs which are triangulations of the torus and the Klein bottle, repectively. But the author conjectures that K_{13} is not decomposable to two Klein bottlal triangulations and that $\xi(\tilde{\Sigma}_2)=12$.

Let call the orientable surface Σ_3 with genus 3 the *triple-torus*. Another point which needs to be clarified is the triple-toroidal case; does it hold that $\xi(\Sigma_3)=16$? This is equivalent to $\theta_3(K_{16})=2$? If K_{16} is decomposable to two triple-toroidal subgraphs, then they must be, again, triangulations of the triple-torus. But surprisingly few studies have so far been made at the triangulations of the triple-torus.

References

[B1] L. Beineke, *The decomposition of complete graphs into planar subgraphs*, Graph Theory and Theoretical Physics (F. Harary ed.), Academic Press, London, 1967.

[B2] L. Beineke, *Minimal decompositions of complete graphs into subgraphs with embeddability properties*, Canad. J. Math., **21** (1969), 992--1000.

[BHK] J. Battle, F. Harary and Y. Kodama, *Every planar graph with nine points has a nonplanar complement*, Bull. Amer. Math. Soc., **68** (1962), 569--571.

[BM] J. A. Bondy and U. S. R. Murty, Graph Theory with Application, North Holland, New York, 1976.

[BM] O. V. Borodin and J. Mayer, *Decomposition of K_{13} into a torus graph and a graph imbedded in the Klein bottle*, Discrete Math. **102** (1992), 97–98.

[GT] J. L. Gross and T. W. Tucker, Topological Graph Theory, Wiley, New York (1987).

TOSHIKI ENDO
DEPARTMENT OF MATHEMATICS, SCHOOL OF EDUCATION,
WASEDA UNIVERSITY,
SHINJUKU-KU TOKYO 169-50, JAPAN

Submitted 2 July 1997

三奏本『金葉和歌集』所載、寂照の「とどまらん」の和歌から（その一）

――『宝物集』の関連説話におよぶ――

西脇哲夫

〈はじめに〉

三奏本『金葉和歌集』や『詞花和歌集』に採られている、寂照が入宋に際して詠んだといわれる和歌にまつわる説話について考えてみたい。『金葉和歌集』の撰者・源俊頼は、この歌を二度本では採用しなかった。三奏本の撰歌にあたって、加えたのである。また、三奏本が流布しなかったために、藤原顕輔撰の『詞花和歌集』にも入集したのである。ただし、両者の選歌資料は異なるらしい。

寂照は、俗称大江定基。三河入道・三河新発意・三河聖などとも呼ばれていた。大江斉光の子で、大江匡衡の従兄弟にあたる人物である。『尊卑分脈』には、「蔵／参河守／徳明博士／図書頭　従五下／後拾遺詞花新古今作者／寛和二六出家　法名寂照／長保五八廿五入唐号円通大師」とある。しかし、いつ出家したのか、正確なところはよくわからない。寛和二年（九八六）の他、永延二（九八八）年（『百練抄』）、長保五（一〇〇三）年（『扶桑略記』）などの

諸説がある。寂心（慶滋保胤）や源信に師事し、長保五年（一〇〇三）頃に入宋したらしい。宋では皇帝真宗に厚遇され、円通大師の号を授かっている。三十数年を宋で過ごし、帰朝することなく、長元七年（一〇三四）に没したという（大江匡房『続本朝往生伝』など）。また、藤原道長らとの交渉があったことが『御堂関白記』・『小右記』などによって知られ、出家・入宋・入滅等にまつわる逸話も『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの説話集に取り上げられている。また、その和歌は、後拾遺集以下の勅撰集に三首入集している。[注1]

〈詞書の相違〉

まず、三奏本『金葉和歌集』と『詞花和歌集』[注2]から引用する。

①三奏本『金葉和歌集』巻六「別離廿五首」（三四四）

参河入道もろこしへまかるべしと聞えけるが、又とまりにけりと聞えければ、

人のたづねたりける返事につかはしける　　入道

とゞまらん　とゞまらじとも　思ほえず　いづくもつひの　すみかならねば

②『詞花和歌集』巻六「別」（一八一）

唐土へ渡り侍けるを人の諫め侍ければよめる　　寂照法師

留まらむ留まらじともおもほえず いづくもつゐの住かならねば

寂照の壮年期の作と思われる和歌である。「日本に留まろうとも留まるまいとも考えませんよ、日本であっても宋であっても、いずれにしても私の最終的な住処ではありませんので。」と、ある人に応じた和歌である。三奏本『金葉和歌集』では、寂照が何らかの理由で「又とまりにけり」という状態にあった時、ある人からの問い合わせに答えた和歌ということになっている。これに対し、『詞花和歌集』では、入唐することをある人から諫められた時、その返事として詠んだ和歌ということになっているのである。三奏本『金葉和歌集』の詞書を前提にしてよむと、入宋の決意を内に秘めつつ、自然体で問い合わせに応じた和歌と理解することがが可能だろう。それに対し、『詞花和歌集』の詞書だと、人の諫めに対し入宋への意気込みを示し、きっぱりと拒絶した歌という解釈をした方がいいのだろう。いずれにせよ、僧侶の作としてふさわしい和歌ではある。「つひのすみか」とは、現世を仮の世と見て、死後の世界（極楽浄土）をイメージしているものと思われる。この言葉はあまり和歌には詠まれていない語句のようで、八代集では次の二首を含めて三例のみである。[注5]

＊『拾遺和歌集』哀傷　一三二六

世のはかなき事をいひてよみ侍りける　　源順

草枕人はたれとかいひおきしつひのすみかはの山とぞ見る

＊『詞花和歌集』雑下　三五四

秋の野をすぎまかりけるに、をばなのかぜになびくをみてよめる　源親元

＊はなすすきまねかばここにとまりなむいづれののべもつひのすみかぞ

「とどまらん」の和歌は、寂照とほぼ同時代に生きた能因による私撰集『玄々集』にも採られている。『玄々集』は、三奏本『金葉和歌集』や『詞花和歌集』の撰集資料の一つと考えられている歌集である。しかし、『玄々集』の詞書には、「唐にわたるとて」とだけあって詳しい事情は記されていない。従って、詞書を見る限り、この歌の撰歌資料は両勅撰集とも『玄々集』ではないと考えた方がよさそうである。また、三奏本『金葉和歌集』や『詞花和歌集』の詞書の方が、よりドラマティックな筋立てになっていることにも留意すべきであろう。

西岡虎之助氏によれば、[注1]長保四年七月七日に船出した寂照は[注4]すんなり入宋したわけではないらしい。西岡氏は、長保四年八月十五日の年記のある青蓮院文書の「寂照授皇慶両部伝法灌頂印信」に次のような記述があることを紹介している。

弟子指鎮西府発向之間、船中受病、於長門報恩寺、当于病重命迫之時、為怖断種、今以伝法灌頂秘印而付属之、宜守祖業以継仏種矣、（下二中上）

つまり、寂照は船出した後、船中で病にかかり長門国・報恩寺に於いて療養していたらしいのである。この病がかなり重いものであったことは、「当于病重命迫之時」の文言や、弟子の皇慶に伝法灌頂の秘印を授けて法統を守ろうとしたことなどから明らかであろう。その後、快復した寂照が実際にいつ入宋したのか、はっきりしない。西岡氏は、寂照が師の寂心追悼の為に書いた請文が存在することから、少なくとも長保四年十二月までは日本に留まっていたとする。三奏本『金葉和歌集』の詞書にある「又とまりにけり」という一節は、一度出発した寂照がしばらく日本に留まらざるを得なかったという出来事に照応するものとも思われる。しかし、なお不審な点も残る。

三奏本『金葉和歌集』には、もう一首、寂照の入唐と関わる和歌が採られている。三四一番の小大君の歌である。

わづらふ頃、参河入道唐へまかると聞きてつかはしける　　小大君

長き夜の闇にまよへる我をおきて雲がくれぬる空の月かな

この和歌は小大君が寂照に贈った和歌であることには間違いはないが、寂照の入唐に際して詠まれた和歌としているのは、三奏本『金葉和歌集』だけである。たとえば、『小大君集』では、次のような詞書になっているからである。(注3)

惟仲の朝臣やまひにわづらひて、三河新発意を呼びて、宮の大進統理をやりていはせけるに、さらに聞き入れざりけるを、しひていひければ、すこしよろしきを頼みにてあか月にと約束して寝ぬるに、夜なかばかりに起きゐて、

手洗ひ、鐘うちならして、仏にもの申す音しければ、いまやいまやと思ふに、音もせずなりにけり。弟子を起こして、いづちおはしぬるぞと問へば、驚きてもとむれど、なくなりにけり。あさましうて書きおきて来ける。

長き夜の闇に迷へるわれをおきて雲がくれぬる夜半の月かな

入道の返し、あしたにぞありける

かさなれる深山がくれに住む人は月にたとへん扇だになし

解釈に困る部分もあるが、寂照が小大君との約束を反故にして姿をくらましたという話であることだけは間違いなさそうだ。『小大君集』の詞書では、そうした折に、小大君が寂照に贈った和歌ということになっている。この歌は、『玄々集』に「わづらふころ、参河入道をよびて戒受けたるに程なくて死にければ」、『続詞花和歌集』（八五五）に「わづらふ比、寂照聖人を迎へて戒受けなどしけるに、ほどなく帰りにければつかはしける」という詞書でとられている。この小大君の歌の場合も、『玄々集』と三奏本『金葉和歌集』との間で、詞書の相違が大きいわけである。『玄々集』の詞書も不審で、「死にければ」とは、一体誰が亡くなったと解釈すべきなのであろう。寂照と考えるのが妥当なところであろうが、事実に反する。いずれにせよ、この和歌は、小大君が寂照に仏事を依頼した際に交わしたやりとりとするのが妥当であろう。しかし、寂照を「夜半の月」に、入宋することを「雲がくれ」と喩えたと解釈すれば、この和歌は、そのまま寂照の入宋を惜しむ歌ともなり得る。三奏本『金葉和歌集』の編者である源俊頼は、少なくともそのように理解したのではなかろうか。そこに作意があるにせよ、この歌を寂照の入宋を惜しんだ歌と理解しようとする心意は、一体どこから生まれてきたのであろうか。勅撰集にとられた寂照の歌三首は、すべて入宋と直

接関わるものである。また、寂照にまつわる和歌のほとんどが、入宋にかかわるものであることにも留意すべきであろう。このことは、寂照の入宋がいかに人々の耳目を集めていたのかを暗示しているように思う。

注1　西岡虎之助氏「入宋僧寂照に就ての研究」（西岡虎之助著作集・第三巻）
久曽神昇氏「三河入道寂照の研究」（愛知大学綜合郷土研究所紀要・第五輯／第九輯）
久保木哲夫氏「三河入道寂照とその入宋をめぐって」（国語と国文学・昭和五五・一一）

注2　三奏本『金葉和歌集』及び『詞花和歌集』からの引用は、新日本古典文学大系9『金葉和歌集　詞花和歌集』による。他の勅撰和歌集は特にことわらないかぎり、新編『国家大観』による。

注3　竹鼻　績氏『小大君集注釈』（私家集注釈叢刊1）による。引用にあたっては、ルビを省略した。

注4　『後拾遺和歌集』巻八別に見える藤原公任の和歌（四九七番歌）の詞書には次のよにある。
寂照法師入唐せんとてつくしにまかりくだるとて七月七日船にのり侍けるにつかはしける
あまのがはのちのけふだにはるけきをいつともしらぬふなでかなしな

注5　新編『国歌大観』勅撰集編を検索しても、他には六首あるだけである。その中では、次の二首の作歌時期が古い。
＊木のもとぞつひのすみかと聞きしかどいきてはよもと思ひしものを　大僧正行尊
（『新千載集』雑下　二〇二九）
＊遠からぬつひのすみかをいづくとて野べに一夜を明しかぬらん　鴨長明
（『新拾遺集』哀傷　八八七）
私家集編でも、行尊の歌が一番古く、その他に十首余りしか見られない。
＊かくしつつつひのすみかをおもふにものべのたびねはつひぞこほるる（広言集　九四）
＊かつみるにさてしもはてぬよにしあればつひのすみかをみおくばかりぞ（実国集　六九）

＊このよをばいとはでもただすぎぬべしつひのすみかもそことしらねば（隆信集　八七五）

注6　『後拾遺和歌集』別　四九八

入唐しはべりける道より源心がもとにおくるはべりける

そのほどとちぎれるたびのわかれだにあふことまれにありとこそきけ

『新古今和歌集』離別歌　八六三　八六四

寂昭上人入唐し侍りけるに、装束おくりけるに、たちけるをしらで、おひてつかわしける　読み人しらず

きならせとおもひしものをたび衣立つ日をしらずなりにけるかな

返し　寂照法師

これやさは雲のはたてにておるときくたつことしらぬあまのは衣

『遠野物語』における「家」と異界

――民俗宗教の世界観（一）――

紙谷威廣

Ⅰ　『遠野物語』からの出発――「家」の神話学

柳田國男は、佐々木喜善（鏡石）によって知った岩手県遠野地方の伝承を、自ら『遠野物語』という一冊の書物にまとめ、さらにそこに掲載できなかった諸伝承を『遠野物語拾遺』として佐々木にまとめさせた。いわば、遠野地方に伝わるさまざまな物語の中から、佐々木鏡石と柳田國男の目を通して選ばれ、特徴づけられた物語群を「報告」する事になったのである。[1] 柳田國男も佐々木喜善もそれぞれの一生を通じて、この研究の出発点を練り上げ、その後の諸著作の中へと結実している。[2]

この『遠野物語』は、近代日本を理解する上で重要な視点を提供してくれている。それは、古い日本の共同性や近代以前の俗信を残したままで近代へと突入してしまったなどという、「遅れた近代化」の問題ではない。むしろ、日本の近代社会がどのような「信仰心」をバネとして、近代社会への胎動を始めたのかという、根本的な問題を指し示

す材料を、何気なく見せてくれると言う意味で重要なのである。[3] さらに言っておくとすれば、柳田國男と佐々木鏡石の二人が心から触れあう部分（＝「家」の伝承への興味）がなければ、『遠野物語』も『遠野物語拾遺』もこの世に生まれてこなかったであろう。

ところで、『遠野物語』という日本民俗学の出発点は、柳田國男が一生抱え続けて取り組むことになった「家」という課題を引き出す役割を担っていたのである。本来ならば佐々木鏡石が生み出した『遠野物語』を、柳田国男が産婆として取り上げたという評価が適当なように思われる。しかし、現実は逆であったのかもしれない。佐々木鏡石が物語った「遠野の伝承」によって、柳田がその渦中にあって苦悩しつつあった自らの「家」の問題に向けての、研究の火種に衝撃を与えることになったと理解したらどうであろうか。[4]

その意味から見れば、もしこの二人の出会いがなかったとしたら、柳田が終生取り組むことになった「日本社会」における「家」という課題、すなわち、日本の近代社会を決定的に説明する課題も、民俗学の対象としてはこの世に誕生しなかったかもしれない。だがしかし、この「家」という課題は、柳田國男のみならず多くの社会科学者たちが、戦後の高度成長期と呼ばれる時期に至るまで、他の課題を捨てても精力的に取り組まざるを得なかったのである。[5]

今では、「家の盛衰」という言葉は、ほとんど死語に近いといえる。日本では、家族関係の崩壊さえも話題とされるこのごろである。同じ屋根の下に起居しながら、別々の朝食を勝手な時間に一人一人が用意して、カウンターのような座席で食べる。夜になって寝る時間も、それぞれの都合で決められる。いったん扉を閉めて自分の部屋に閉じこもれば、そこへは他人同様に立ち入ることもままならない。それぞれがポケベルを持っていて、電話から送られるメッセージを待ち続けている。そのような中では同じ家族でありながら、同居人ほどの関わりも持てない親子もある。

あるいは逆に、社会福祉の欠如から、老人を抱えた家族が、その重圧に押しつぶされそうになっている。

しかし、十数年前まで、人々は先祖の残した土地に家を建て、先祖が切り開いた土地を耕し、あるいは先祖と同じ職能を継ぎ、先祖とともに同じ墓に入ることを誇りとしてきたのである。自分と同じ一族から有名人が出れば、自分自身のことのように喜び、それらの人々の活躍が自分の活躍であるかのように誇りに思う。かつては武士であったとか、古代の貴族の末裔であるとか、天皇家と自分の家がどのように関わっていたとか、およそ個人とは別の次元での喜びをも求めていた。つまり、「家名を上げる」とか、「家の誇り」であるとかいうような、平安時代から江戸時代に至るまでの軍記物に見られるような意識が、人々の心を支配していたのである。

そうは言っても、近代に入れば、人々がめざしたのは中世の武将ではないから、戦争の駆け引きや武術で領地を獲得して「名」をあげるのではない。いかに財産を蓄積して豊かな「家」を築き上げたのかと言うことである。『遠野物語』をながめまわしていると（私の資料の読み方はその程度の読み方でしかないのだが）、「運命共同体」などという言葉とはほとんど無縁の殺伐とした「因縁」話に満たされていて、村の共同性や互助協力などという「お題目」のかけらさえも見つからない。さらに、豊かな家に対する嫉妬心や妬み、栄えていた家が急速に衰退して行くさまを冷たく見つめる眼、それらの変貌を楽しむ冷ややかな思いさえも感じられる。

近代とは資本主義社会への道を歩み始めた時代を意味していよう。その点では、商業資本なり、産業資本なりが形成されてきたことで、その最初が理解できるはずである。社会科学という視点からは、まさに豊かな富が農村社会にも広がりつつあったし、遠野という地方都市にも富の蓄積を示す徴候が現れつつあったのであろう。言い換えれば、そのような富の蓄積によって、豊かな「家」を形成する者と貧しく没落し始める者との差が大きくなりつつあったと

いうことになる。だから、経済学者が資本の蓄積と貧富の差の拡大として理解する現象を、遠野の人々は「家」の盛衰という形で理解したのである。[6]

そういった点から見れば、『遠野物語』こそは民衆の眼から見た近代社会の現実であったといえる。なつかしい牧歌的な風景などという、甘っちょろい「反近代主義者」の見た現実などではない。その意味でも、柳田國男は反近代主義者ではあり得ない。むしろ、眼前に展開する近代社会を見つめた人物であり、またその近代社会へと展開する中で、自らの境遇を問い直さざるを得なかった研究者なのである。

だが、民衆自身にとっては、近代社会の中でも「家」こそが生きる場であり、「家」の盛衰こそがまず問題にされなければならなかった。したがって、民衆の生活の中では、社会の変化は「家」にまつわる物語として語り直されなければならなかった。そのような伝承的世界を受けとめて、研究対象として取り上げたのが、柳田と佐々木鏡石の共同作業になる『遠野物語』だったと理解しておこう。ここでは、そのような物語の読み直しから、民俗宗教の世界観をとらえてみることにする。

Ⅱ　山中のマヨイガ

筆者にとって、『遠野物語』の中でもっとも心に残る一文をあげろと言われたら（実に困る質問であるが）、六三番の「マヨイガ」をあげるだろう。小国の三浦某という村一番の金持ちの家の話である。[7]

六三　小国の三浦某というは村一の金持たり。今より二三代前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍なりき。この妻ある日門の前を流るる小さき川に沿いて蕗を採りに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲き鶏多く遊べり。その庭を裏の方へ廻れば、牛小屋ありて牛多くおり、馬舎ありて馬多くおれども、いっこうに人はおらず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳椀をあまた取り出したり。奥の座敷には火鉢ありて鉄瓶の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなければ、もしや山男の家ではないかと急に恐ろしくなり、駆け出して家に帰りたり。この事を人に語れども実と思う者もなかりしが、またある日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き椀一つ流れて来たり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたらば汚しと人に叱られんかと思い、ケセネギツの中に置きてケセネを量る器となしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経ちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由をば語りぬ。この家はこれより幸運に向い、ついに今の三浦家と成れり。遠野にては山中の不思議なる家をマヨイガという。マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出でて来べきものなり。その人に授けんがためにかかる家をば見するなり。女が無慾にて何物をも盗み来ざりしがゆえに、この椀自ら流れて来たりしなるべしといえり。

すなわち、二三代前の三浦家は貧しく、その妻は「少しく魯鈍」であったという（このような記述はプライバシーを傷つけることになるが、論旨を進める上で重要なので、この際原文に忠実に記しておく）。この妻がある日蕗を取

りに家の前を流れる川に沿って入ったが、よいものがないので谷の奥深くへと登っていった。ふと見ると、黒い門の立派な家があるのに気がついた。怪しく思いながらも、門の中にはいると、大きな庭に紅白の花が咲き、鶏が遊んでいる。裏にまわると、牛小屋と馬屋にたくさんの牛馬がいる。人の姿が見えないので、玄関からあがってみると、玄関の次の間には朱と黒との膳椀がたくさん出ている。奥の座敷には火鉢があって、鉄瓶の湯が煮えたぎっている。しかし、ついに人影がないので、「山男」の家ではないかと恐ろしくなって、帰ってきてしまった。このことを人に話しても信じてはもらえなかった。ところが、ある日自分の家の「カド」（川端の洗い場である）に出て洗い物をしていると、上流から赤い椀が流れてきた。たいへん美しいので拾い上げたが、食器に用いれば汚いとしかられると思い、ケセネギツ（日常の食物を入れる箱）に入れて、ケセネ（米や稗などの穀物）をはかる器とした。これで量り始めてからは、ケセネが減ることもなく、三浦家は村一番の金持ちとなったというのである。

遠野地方では、山中の不思議な家を「マヨイガ」と呼んでいて、行き当たった者は、何を持ってきてもよいのであるという。無欲な女のために、この椀が流れてきたのだと、柳田は付け加えている。この小国村の三浦某家の妻は、少々魯鈍なために日頃から家人からも粗末に扱われていたのであろう。さらに、その女の「嫁」という立場を考慮すれば、遠慮に遠慮を重ねて、肩身もせまく、小さくなって暮らしていたと考えられる。そして「山男」の実在を信じて、山中の立派な屋敷から逃げ帰ってきてしまうような、気の弱い女でもあったようである。だからこそ、美しい朱塗りの椀も、家人から隠して「ケセネギツ」に入れて使ったのである。そんな風に読めるし、佐々木鏡石もそう語り、柳田もそう書いたのであると考えられる。これに続く六四番の話題もまた「マヨイガ」である。しかし、主人公は婿であり、その実家に帰る山中で「マヨイガ」に出会う。このことを聞いた主人公の家族や親戚が連れ立ってその場所

に急ぐが、何も見つけだすことができなかったという。無欲で、魯鈍な三浦家の妻とは全く逆の結果になっているのである。

この三浦家の妻が本当に無欲で魯鈍であったかは確かめる必要はない。人々が好むのは、このような人物によって展開される「物語」であって、その事実ではないからである。この「マヨイガ」にまつわる物語を、小国村の三浦某家の話題として流布させたり、話題として取り上げてきたのは、それが事実であるからでもない。これを事実として信じたい人は、そう信じればよいであろう。この世の中に減らない食物はないし、穀物を増やしてくれる食器もない。「家」が繁栄するには、繁栄するだけの理由があったであろう。だが、近代に移行しようとする時代の人々にとって、「家」の繁栄は合理的な説明で明らかにできるものではなかったのである。「家」の繁栄を説明する「原理」として人々が選び取ったのは、桃太郎や舌切り雀、「おむすびころりん」といった昔話と同一のレベルの物語であった。その意味で、個別の「家」のプライバシーを侵してまで、事実を確認する必要はないのである。[8]

ここで我々が知りたいのは、このような物語がどのような場合に適用されたのかという、まさに民衆の意識構造とその意識構造を発現させた歴史状況の問題である。小国村の三浦某家に戻ろう。「二三代前の主人」の時代には、家は貧しかったというのである。貧しかった家がわずか二三代のうちに、村一番の金持ちになっている。この「マヨイガ」の話を三浦家に付着させた原因は、この短期間の蓄財であると考えればよいであろう。大げさに歴史状況などと言ったが、これだけのことである。しかし、まさに「家」の繁栄や衰退といった、村落社会の秩序の変動こそは、人々にとって説明されなければならない事実であっただろう。ことに、元々貧しかった家が急に豊かになる。ましてや、その妻と言えばほかの人々よりも「魯鈍」であって、決して金儲けが上手な《はずがない》のである。これらの

《事実》からは合理的説明は不可能である。そこで、山中の「マヨイガ」こそがすべてを説明する鍵となる。問題は、「家」の繁栄とそれをもたらした「マヨイガ」ということになる。

ところで、この物語の展開をたどりながら（といっても単純なプロットであるが）、三浦某家の「神話」を分析してみよう。あくまでも、この「神話」は「家」の神話であって、「村」の神話ではない。「村」がこの神話を公的に、あるいは暗黙のうちに認めていたとしても、説明されるのは三浦某家であって、「村」の構造そのものではないことに注目しておきたい。余分な説明が先行してしまったが、物語の展開は簡単である。すなわち、第1段階は貧しい家とそれを構成する魯鈍な妻という家族の状況である。第2段階は、川の上流に迷い込んだ妻が「マヨイガ」に出会い、そこから逃げて帰るという進展である。さらに、第3段階は、妻の元に「マヨイガ」からの贈り物が届くという状況の変化である。第4段階は、この贈り物によって幸福がもたらされるという結末である。アラン・ダンダス風にいえば、幸福の欠如という主人公の状況が、山中の「マヨイガ」との接触によって変化し、幸福がもたらされるということになる。(9)

二項対立による構造分析の図式を持ち出すまでのこともないほど、単純な展開と構造の物語である。しかし結論からいえば、ここでは現実の「家」と山中の「マヨイガ」という二項対立こそが、すべてを決定しているといってもよいであろう。六四番の物語では、主人公の家は貧しくはないのであろう。なぜならば、この家では婿を取っており、婿を取るにはそれなりの維持すべき「家」が存在するからである。もし、主人公の家が豊かであったならば、結末は貧しくなったと終わるのではないかと、筆者なぞは想像する。そうすれば、六三番と六四番は一連のつながりを持った「語り」であって、「隣の爺型」の話型をもった「昔話」ということになる。もちろん、そのような勝手な読み方

が許されてよいわけはない。

主人公の獲得した呪力の源泉が朱塗りの椀であったことに注目すると、若干気になる伝承がある。すなわち、日本の各地に伝わる「椀貸し淵」の伝説である。客を招くときの膳や椀が、川や沼の淵の主からから貸し与えられることになっていたが、不心得な者がたまたま美しい椀が気に入って返さなかったために、それ以後は貸してもらえなくなったという伝説である。この伝承では、たった一つの椀は盗み取った物であり、不幸の象徴ともなっている。したがって、豊かさを失う原因となったのが、盗み取られて家に残された椀なのである。美しい椀に魅せられて、それを私物化したいという欲望が、異界からの贈り物を失わせる結果をもたらすのであり、人間の欲望こそが不幸の原因であるという結論に導くのである。「マヨイガ」の話では、主人公は逆に無欲な存在であって、贈り物を受け取らずに帰る。ひょっとして、「マヨイガ」の前段階として、「椀貸し淵」の話が存在したと推定することも可能である。[10] これもまた、勝手な推定にすぎないことはいうまでもない。

さて、余分な議論はやめて、この「マヨイガ」の物語についての結論を出しておこう。すなわち、『遠野物語』の六三番の物語は、三浦某家の繁栄を説明する《神話》であって、語られるモチーフは「異界への訪問」と読むことができる。そして、物語の世界は現実と異界という二項対立によって構成されており、異界を訪問した主人公は富を生み出す呪力（＝呪宝）を獲得して幸福になるということになる。この呪力は主人公の「家」を豊かにする。さらに付け加えておけば、この主人公はロシア魔法昔話の主人公「イワンの馬鹿」のように、愚鈍で周囲から卑下されていた存在でもある。[11] ここに登場する二つの非現実的な要素、すなわち「異界」と、そして一見無力な主人公が現実の豊かさを生み出すことになる。およそ、経済効率などの論理性とは異なる次元の「論理」が支配する物語である。その意

味で、この物語は《神話》的なのである。だとすれば、『遠野物語』という「物語世界」では、この「マヨイガ」の物語は一種の《神話的》役割を果たしているのであって、三浦某家の豊かさの起源を説明する機能を果たしているということになる。

Ⅲ　異界とつながる「家」

さらに、『遠野物語』から「家」の神話を探しておこう。といっても、そのためにたいして努力する必要はない。ぱらぱらと『遠野物語』の頁をめくっていけばよいのである。廉価な文庫本のそれをめくってみてほしい、実例はいくらでも見つかるであろう。ここでは、筆者の恣意的な選び方を許してもらおう。二七番の物語も日本各地の昔話によくあるモチーフが使われる話であって、遠野の町の中にある「池の端」という家の物語である。この家の先代の主人が宮古から帰るときに、閉伊川の原台の淵と呼ばれる場所を通った。そこで、若い女から一通の手紙を託された。遠野の町の後ろにある物見山の中腹の沼で、手をたたけば宛名の人が出てくるという。一人の六部がこの手紙を読んで、災いが起こるからといって、別の手紙と取り替えた。手紙を相手の若い女に渡すと、その礼に石臼をくれた。米を一粒入れて回すと黄金が出る。しかし、欲深な妻が一度にたくさんの米を入れたので、石臼は回り続けて止まらなくなった。ついには、水の窪みに落ちて見えなくなってしまった。この水たまりが池となって、家の呼び名の由来となったという。

災いをもたらす手紙を六部の力で取り替えたという「昔話」が「伝説」、あるいは「世間話」に変化したものである。この話の中では「川の淵に棲む若い女」が、主人公の運命を左右するほどの不思議な力を持っているということになる。この若い女の姿で現れる者は、災いをもたらすこともできれば、豊かな富を与えることもできる存在である。ただし、ここでは妻の欲深さが原因で、夫の得た福徳が失われるという展開である。主人公は偶然に通りかかった川の淵、原台の淵で、淵の主とも思われる女に声をかけられる。淵の主は、この男にとっては災いをもたらす手紙を渡す。ところが、六部はこのことを知って、主人公のもっていた手紙を取り替える。代わって主人公に与えられたのは黄金をもたらす石臼である。であるから、主人公の男はたまたま川の淵を通りかかったために、運命に翻弄されることになる。欲望に満ちていたわけでもないし、逆に無欲なわけでもない。偶然に「異界」にふれただけである。[12]

東北地方、ことに岩手県の周辺は平泉の藤原氏に代表されるような在地勢力による、古代以来の黄金の産地である。したがって、黄金の産出という記憶が物語のモチーフとしても定着していたのかもしれない。石臼の回転から塩が噴き出して止まらなかったという昔話も広く知られているが、黄金が噴き出せば、さらに豊かな富のイメージがそこに生じるであろう。この主人公の家も、そのままであれば黄金を噴き出す臼によって、豊かな長者となり得たのである。[13]

しかし、主人公は、突然に現れた、見知らぬ若い女の願いを疑いもせずに引き受ける、無類のお人好しである。あるいは、相手が「若い、（美しい）女」であるから引き受けたと読んでもよい。おまけに、この臼の呪力とその後の展開を知らなかったとはいえ、実に愚直な存在である。もし、六部が気づいて、川の淵から出現した女のたくらみを見抜いてくれなければ、殺されていたのである。いずれにしろ、この「池之端」の家も淵の主との関わりを持つことによって、福徳を付与されることになった。そのような意味では、「池之端」の家に関わる物語も《神話的機能》を

持っていたことになる。もし、主人公の妻が無欲な存在であれば、この家は豊かな長者となったはずであると、『遠野物語』は語っているのである。

この物語では、旅に出た主人公が川の淵に住む「女」と出会い、殺される運命を与えられるが、旅の六部の験力によって、「女」の呪術的な危険から逃れる。この事件は、家からは遠く離れた場所で起きた出来事である。すなわち、自分たちの住む「現実の世界」からはるか離れた外にある「旅」の世界の出来事である。実は、物語の語られる「遠野の町」はこの盆地の中心になっていて、近隣の生産物の集散地であり、この物資を都市に運ぶ交通の要衝でもあった。したがって、旅に出る者は豊かな富を持ち帰ることが期待されており、不思議な「旅」の世界を巡ることで家を豊かにするはずの存在であったのである。つまり、遠野の町を離れて旅をする者は、現実の世界に生きているのではない。山中などの「異界」へと迷い込んだ者と同一視されているのである。そしてさらに、主人公の旅の世界は、遠野の町の裏山、中腹の沼へとつながっている。この旅を通じて、「池之端」と名付けられた家は、遙かに距離を隔てた川の淵と裏山の沼から、さらに遠い「異界」とつながっているのである。

一見すると、水の世界とは断絶してしまったようであるが、「池之端」という家は豊かであるかどうかは別にして、池を通じて水の世界につながったままであることが分かる。さらに言えば、池で水の世界とつながっていることで、「しるしづけ」が行われているのである。おそらく、この家を構成する人々を見れば、何の変哲もない人々であろう。この世に生を受け、近隣の人々とともに育ち、子供をもうけて、あの世に旅立ってゆく。さして、特別の生涯を送ることもないかもしれない。歴史が人々の人生を変えるように、周囲の人々と同様の変化の中で、人生を終えるかもしれない。だがしかし、「池之端」の「家」の人として、遠野の町の中では意識され続けるのであろう。その意味で、

この家はしるしづけがなされた「家」と言うことになる。

ところで、この家の主人はなぜ旅に出て行ったのであろうか。昔話でも、伝説でも、さらには世間話でも、旅に出ることが「物語」の展開にとって重要な役割を果たすことが少なくない。つまり、筆者が問題としたい「異界」との接点ということでもある。しかし、この『遠野物語』の世界では、旅とは「異界」を指すだけであろうか。何の理由もなく、貧しい庶民が遠隔地への旅をするとは思えない。これを近代の伝承としてとらえ直すとすれば、当然、現実の世界での商売のための旅とすべきであろう。もちろん、近代でなくとも「商業」の旅は不可欠なことであり、そのことによって利益を得ることもまた、自然なことであったはずである。

しかしながら近代社会においてこそ、名も無い人々が初めて広域の流通経済に巻き込まれるのである。遠野は地方都市の常として、物資の流通の中心地であった。そのために、商人の家も多かったことが、遠野の町を形成した理由であろう。「池之端」の主人の旅は、当然、村から出て行く必然性のあるものであったと推定される。すなわちそれは、明らかに商売だったはずである。商業にたずさわる主人公が富を蓄積しても、何の不思議でもないと、我々は考える。しかし、「遠野」の「世間」はそうは考えなかった。すなわち、村の中で、平凡な生活を送っても不思議ではなかった主人公が、旅の世界に出かけたために、不思議な「水の精」に会って、福徳（本来は殺されるはずであるが）を与えられたのである。その結果として、この「家」と「家」に属する人々は、水の世界とつながるという「しるしづけ」がなされたのである。しかし、遠野では、もっと明らかな特徴で「しるしづけ」の見られる物語も伝えられていたようである。

Ⅳ　「異界」の呪縛を受ける「家」

『遠野物語』の五五番は、猿ヶ石川の川端、松崎村にある家の話である。この家については、二代にわたって河童（柳田は「川童」と書いている）の子を産んだというモチーフが語られている。主人公は家付きの娘なのであろう、婿は新張村の川端の家の出身であるという。生まれた子供は「極めて醜怪な」形で、切り刻んで一升樽に入れて埋めたという。家の者が一同そろって畑に行った夕方、女が水際にうずくまってにこにこと笑っていたという。このようなことが繰り返されるうちに、女のもとに村の男が通ってくるようになったというわさが立った。はじめのうちは、婿が浜の方に駄賃づけに出かけた留守に来ていたが、婿と寝た夜にも現れるようになったという。「一族」や母親が守ろうとしたが、娘の笑う声で来訪を知っても身動きさえできなかった。その出産は難産であったが、「馬槽」に水を入れてその中で生めば安産であるというので、その通りに試みて無事に生まれた。手に水掻きがあったという。この娘の母親も河童の子を産んだことがあるという。

この家の姓（名字）は伏せてあるが、「如法」の豪家であると同時に士族でもあり、村会議員をしたこともあるというのである。さらに、「其主人人に其始終を」語ったということである。これは、どこまでが本当のことであろうか。しかし、ここではこの内容を疑ってみても始まらない。家の主人が言ったか、言わなかったから始まって、その一部始終が「伝聞」に過ぎない。果たして生まれてきた醜怪な子供が河童の子であるかどうかとか、女が水際でにこにこと笑っていたかどうかとか、河童が女のもとへ通ってきていたかどうかとか、ここで語られるすべてが疑わしいことなのである。[14]

遠野の河童淵と呼ばれる場所を訪れる観光客は少なくないし、有名なボランティアの老人が河童淵の説明をしてくれる。だが、この河童の子を身ごもった女の話を知っている観光客はどれほどいるのであろうか。この話を知ってもにこにこと笑って、写真撮影をして帰ってゆくことができるであろうか。ここで語られた家の人々は、この「うわさ」をどのように聞いてきたのであろうか。「三流週刊誌」に書かれるゴシップなみに「有名税」と割り切ってきたのであろうか。「世間」とは、このように残酷なものなのだろうか。

『遠野物語』の五七番はごく短い文章である。雨の日の翌日などには、河童の足跡が川岸の砂の上に見られると言う。河童の足は猿の足と同じく、親指は離れていて人間の手の跡に似ているというのである。近世の随筆などには、河童を猿のように描いたものもあるようで、「猿猴」などと言う異名も使われている。河童は水界の霊的存在として、馬を水際に招いて、すぐれた子種を授ける者とされていたし、一方では、猿まわしが馬屋を守護するお札を配って歩いてもいたから、猿と河童のあいだには一種の近縁性が考えられていたのであろう。しかし、猿の足は人間の手に似ているのであるから、河童も人間と共通する種類と考えられていたと理解することもできる。「猿聟」もしくは「猿聟入り」と呼ばれる昔話の類型があるが、それと同様に「河童聟」の話がある。もちろん、「蛇聟」や「蛇女房」などの動物神を思わせる、昔話のキャラクターが存在することからすれば、似通ったものと見てもよい。だがしかし、河童の子供を身ごもる話には、独特のグロテスクさを感じる。

五六番の物語は、このような「忌まわしさ」と不愉快さを笑いで吹き飛ばしてくれる話である。上郷村の何某の家でも河童らしき子供を産んだことがあるというのである。身内（体内と言うことであろう）が真っ赤で、口が大きく、「まことにいやな」子であったという。「忌まわしい」ので、この子供を捨てようとして「道ちがへ」（＝追分け、分

かれ道）においてきた。しかし、「見せ物」に売れば金になるかと思って立ち返ったが、「早取り隠されて」見えなかったというのである。

かつて、縁日や盛り場の見せ物で「ろくろ首」などと言う奇形を演じる芸人がいた。登場する「ろくろ首」が芸人なのではない、誘い込みの話芸が人々を呼び寄せただけである。河童の手と称して見せ物になっている、乾燥した奇妙な物体も各地に残されている。どこでも、そんな見せ物に金を払う観光客が少なくはない（ちなみに、筆者もその一人で、眉をひそめながら、金を払ってのぞいてくるであろう）。この士族の家の「うわさ」＝「忌まわしい」はずの話も、ひっくり返してみればありきたりのことでもある。

五五番と五六番の二つの物語を対照することで、河童の子を身ごもった女のモチーフを相対化してしまえば、遠野の里の人々の「笑い」に還元されることになる。しかし、河童が馬を淵に引き込もうとして失敗する話などのおおらかさと比較すると、河童のもたらす「笑い話」などとは持っている意味が異なることがわかる。五八番の物語は、小烏瀬川の姥子淵にまつわる伝承である。「新家」の家の子供が馬を淵で冷やしながら遊びに行っているすきに、河童が馬を淵に引き込もうとした。しかし、馬の方が力が強く、河童は馬に引きずられて馬屋まで連れてこられた。村の者に捕らえられたが、これからはいたずらをしないという約束で許されたというのである。このような話は日本中の各地に分布している。[15]

しかし、この話と河童の子を身ごもった話とを同列で論じるのは問題がある。それは、河童という「異界」の存在が、人間の世界の内部に侵入しているか、あくまでも「異界」の存在として留まっているかという、基本的な相違を持っているからである。川端に住む人々は、遠野では「異界」との接点に住まうことになるのかもしれない。そして、

その「異界」との境界は、時として相互に入り交じり、相互に侵入しあっているのかもしれない。ことに、河童の子を身ごもる女が出る家は、「異界の存在」の侵入を許している家とされていたのであろう。むしろ、「異界の存在」がこれらの家を取り込んでいたと見ておく方がふさわしいのかもしれない。遠野物語を伝えた人々は、このような「異界」の侵入を当然のこととして認めてきたと言うことになる。したがって、この「家」の女性が二代にわたって河童の子を身ごもるのは、この「家」が「河童」という「異界」の存在に魅入られていて、その呪縛からは逃れることができないからだというふうに、人々に見られていたのである。

V　「異界」の存在を祀る家

『遠野物語』がとりわけおもしろく感じられるのは、ほかの地方で昔話や、神の由来として語られている物語も、「家」の伝承として定着していることにある。つまり、昔話や祭文などの物語が、「家」を説明する機能を持たされていて、固有名詞を持った特定の存在についての物語へと変化しているからである。あらゆる物語のモチーフが、特定の存在に結びつけられて伝えられている。したがって、遠野地方のあらゆる存在には、物語のモチーフがその由来として、飾り付けられているのである。このような物語の役割を珍しがっているのは、我々がすでに生きている物語を忘れ去ってしまったからに相違ない。もともと、すべての物語はそのようにして生き延びてきたのである。人の口から口へと渡り歩いて、その時々に憑依する対象が入れ替わり、その主人公とともに独特の味わいを持つ。それを聞い

た人はその話を自分の記憶の中に留めておいて、まったく別の場面で新しい主人公を見つけてやって、その話を生き返らせる。

ところが、物語が記録されて文学とか小説などという名前に変化させられてからは、他人の所有物になってしまって、著作権を主張させられることになる。口承文芸の自由な性格が失われて、誰かに所属する不自由な存在に成り下がってしまったのである。人々を楽しませるにも、特別な許可が必要になる。これは柳田國男の著作物であって、許可なく語られても引用されてもならないというふうである。だがしかし、実際のことを言えば、柳田國男も佐々木鏡石などという人々も本当の著者ではない。そのモチーフはどこかの老婆か老爺が語ったことの、又聞きに過ぎなかったりする。そして、一番不自由なことはそこにあってふさわしい対象からも切り離されてしまうことである。また余分なおしゃべりに貴重な紙面を使ってしまった。すみやかに『遠野物語』に戻ろう。

馬と娘の婚姻を物語るモチーフは、東北地方と民俗学者のあいだではあまりにも有名である。津軽や南部のイタコの祭文では、馬と長者の娘の物語として知られるが、『遠野物語』六九番では貧しい家の物語である。それによれば、土淵村山口の大同と呼ばれる家にはオシラサマという神が祀られている。この由来の物語が馬と娘の婚姻の話なのである。山口の大同と呼ばれる家の老女が、佐々木鏡石に正月十五日に語った話が、この物語である。そして、この老女は鏡石の祖母の姉である。昔あるところに貧しい百姓がいた。この百姓には妻はないが、美しい娘がいた。また、百姓は一匹の馬を飼っていた。「娘此馬を愛して夜になれば厩舎に行きて寝ね、終に馬と夫婦」になった。父親はこのことを知って、馬を桑の木につり下げて殺した。娘は死んだ馬の首にすがって泣いていたので、父親はこれを憎んで、馬の首を後ろから斧で切り落とした。娘はその首に乗ったまま天に昇り去ってしまったという。馬をつり下げた

桑の木の枝で「オシラサマ」の像を三つ造った。桑の木の本で造った像が姉神で山口の大同にある。中で造った像が山崎の権十郎の家にあったが、この家は絶えてしまって神像の行方はわからない。末の部分で造った妹神の像は附馬牛村にあるという。

この物語は、父親と娘、そして馬という不完全な家族に起こった悲劇であるように見える。イタコが語るオシラ祭文では、必ずしもこのような設定ではない場合もある。『遠野物語』では、中国古典の『搜神記』に記載された西方遠征の将軍の物語と同様に、父親と娘の物語となっている。『搜神記』では、娘が父親の将軍を連れ帰る者があれば婿にするという。娘の言葉を信じた馬が将軍を連れ帰るが、娘はこれをあざ笑う。父親の将軍は馬を殺して皮をはぐ。ところが、はがれた馬の皮が娘を天に連れ去るという筋書きになっている。『遠野物語』に見られる特徴は、馬と娘の愛情を描く展開である。イタコのオシラ祭文に共通した特徴が、この馬と娘の愛情なのである。おそらくは、遠野地方のオシラサマ信仰は巫女の祭文によって祀られた痕跡かもしれない。あるいは、イタコたちが家々のオシラサマの祭りを自分たちの巫業の一部に取り込んでいったのかもしれない。[16]

また、この物語に見られる有様を北方アジアのシャーマニズムの儀礼と比較して考える最近の研究も、[17] 新しい視点として注目される。すなわち、ツングース系統の儀礼の中で、天の神への犠牲として、馬の皮を生き剥ぎのまま長い竿の先に掲げて献げるという事例が見られるのである。この北方シャーマニズムの儀礼と関連させて考えてみると、伝承された異類婚姻の物語が持っている意義がより明らかになっている。すなわち、生け贄として献げられる馬は、花嫁をともなって「異界」に赴く存在であり、天の神と人間とのあいだを取り結んでくれるのである。桑の木の枝に出現する蚕が、その奉献の結果としての、豊かな実りとなるのである。しかしながら、この物語がどのように伝えら

れ、受容され、いつ頃に定着したのかは明らかではない。

いずれにしろ、遠野に定着したオシラサマの物語は、ただ単にイタコが語る祭文ではない。それは、特定の桑の木につるされて殺された馬を祀る「家」の物語なのである。三つに分けられた桑の木は、この三軒の家のどこかにあったことが暗示されている。してみれば、これらの家のいずれかは、馬と結婚したが故に殺された娘とつながっているのである。しかし、オシラサマと呼ばれる双体の木製人形を祀る習俗は岩手県に限られたわけではないし、巫女が祭文を唱えてこの人形を遊ばせる（舞わせる）儀礼は茨城県北部にまで広がる分布圏を持っている。たとえば、下北半島ではイタコが正月十五日にオシラ祭文を唱えて人形を舞わせるなどの儀礼が報告されている。また、ひたち那珂市（旧茨城県勝田市）では「オシンメサマ」と呼ばれる双体の人形を祀る巫女が活躍していた。[18] 遠野でもこれらと同様の儀礼形態が広く見られたのであろう。

だが、『遠野物語』に見られる物語の場合にそれらの事例と違っているのは、この神がこの事件の時に祀られ始めたと認識されていることと、その桑の木の枝で神の像が造られたと考えていることの二点である。特定の桑の木の枝につるされて殺された馬は遠野の人々のあいだでは実在し、その馬と結婚した娘もまた実在したのである。だからこそ、現実に桑の木の枝で造られた神の像が祀られていることになる。したがって、この事件はどこか別の世界で起きた出来事ではなくて、眼前にある世界で起きたことなのである。そして、その出来事を記憶している子孫がこの神を祀っていると信じられていたらしいことが、後に採集されることになったほかの地方の伝承とは異なっているのである。いわば、遠野の人々にとっては、現実の世界と「異界」とはかつて交流があったか、あるいは現実に交渉の行われる可能性が認められていたということになる。

Ⅵ　異界の神に見離される「家」

オシラサマは目に見えるように造られた神の像である。だが、神は目に見えるものとは限らない。むしろキリスト教などでは、目に見えないからこそすぐれた神＝絶対者であると説明している。ザシキワラシもまた、ふだんは人々の目にふれない存在であるとされていたようである。この神が、その存在を示すことは何らかの変化を表現することであったのであろう。十八番から二十一番までの物語は、土淵村山口の旧家「山口孫左衛門」にまつわるザシキワラシと「家」の運命との話である。ある時、村の男が橋のほとりで、孫左衛門の家から来たという見慣れぬ娘に会う。娘はそのまま別の家に行くのだと答える。「さては孫左衛門が世も末だな」と思ったが、「それより、久しからずして、此家の主従二十幾人、茸の毒に」あたって、一日のうちに死に絶えたというのである。

この茸は梨の木の周囲に生えた見慣れないもので、最後の代の孫左衛門が食わぬ方がよいと言った。しかし、一人の下男がどのような茸でも水桶に一日入れて、苧殻でよくかき回せばあたることはないと言ったので、家中の者が食べた。たまたまこの昼飯の時間に遊びから帰らなかった女の子が、これを食べずに助かったという。この事件の後で、親類の者たちが貸した金があったとか、約束があったなどと言って、家財を持ち去ってしまい、「此村草分の長者なりしかども、一朝にして跡形も」なくなったというのである。また、この出来事の前兆らしきこともあった。それというのも、まぐさの中にいた蛇を男たちが見つけだし、主人の制止にも関わらず殺してしまい、さらにこの後から出てきた大量の蛇もおもしろ半分に殺したというのである。蛇を家の守護神とする考え方は多くの地方で聞くことができる。この部分では、柳田もそのことに言及していないが、当然考慮されるべきであろう。いずれにしても、いくつ

もの事件が関わる中で孫左衛門の家は崩壊してゆくのである。

ところで、これに先立って記載される十七番の話もザシキワラシが主題となっている。その出だしの文章は「旧家にはザシキワラシと云ふ神の住みたまふ家少なからず」とあって、最後に「此神の宿りたまふ家は富貴自在なりと云ふことなり」と付け加えている。この神の姿は「多くは十二三ばかりの童児なり」とされていて、子供の姿なのである。男の子のこともあれば、女の子のこともあるようで、その点は定かではない。姿の見えることもあれば、そうでないこともある。柳田はこのザシキワラシという名前を「座敷童衆」と解釈している。後に、佐々木鏡石はザシキワラシの話をまとめた一冊の著書を出版している。それだけ、多くの人々の興味を引くことになったのであろう。[19]

それはともかく、ザシキワラシの「宿る」家は富に満ちて豊かな暮らしぶりが約束されているというのである。その福徳を約束してくれるザシキワラシが家から立ち去るところを、他人に目撃させているというのは、よほどの事件であったということになる。というよりも、ザシキワラシが立ち去るのを目撃したというのは、ほかの人々が後日になって話したことに違いなかろう。この「家」をめぐる、いくつもの事件を物語る中で、このザシキワラシの話題も物語られたのではないかと考えられる。

しかし、ともかくも豊かな家にはザシキワラシが住み着いていると信じられたのである。「家」を豊かにするのは、ザシキワラシのような存在、言い換えれば「異界」から送られてくる存在ということになる。だが、その家の運命が変われば、ザシキワラシはその家に落ち着いてはいない。ザシキワラシはその家を後にして立ち去るということになる。そして、そのことは豊かさの源泉である「異界」から、その家が切り離されるということを意味したのである。あるいは、ザシキワラシの住み着いている「家」こそ、そのまま「異界」であったのかもしれない。ザシキワラシが立ち

去るとともに、豊かな「異界」からの実りも消え去って行くのである。

中間的な結語―「家」繁栄の神話

ここまで述べてきたことは、『遠野物語』の中にどれほどの伝承が「家」をめぐって、語り継がれてきたかを列挙してみたにすぎない。「家」の神話が『遠野物語』に記載された「物語群」の基本的なモチーフの一つとして語られていたことを明らかにしたわけである。ところで、社会学者の上野千鶴子は、網野善彦・宮田登との対談による『日本王権論』の中で、日本神話と『遠野物語』の物語群とを比較して論じている。すなわち、『遠野物語』が古代の日本王権の基盤となる神話と、同質の構造をもつ物語群であることを前提としているのである。上野は「権力というのは、象徴的な〈外部〉に対するコントロールの、非常に特権的なあり方のことを言うのではなかろうか」として、日本の古代王権が特権的に外部と関わってきたと考える。そして、特定の人が「その〈境界〉を媒介」する役割を握っていたと考える。これに対して、『遠野物語』では「いつでも、どこでも、誰にでも、その〈境界〉における媒介者の役割が開かれているような世界のあり方」であると論じる。[20]

上野の趣旨は、特権的な外部との媒介者が王権を基礎づけているというのである。しかし、この結論を裏返してみれば次のようなことが明らかになるはずである。すなわち、遠野では、誰でも、どこでも、いつでも、特権的な《外部》との《媒介者》となることができたのである。その意味では、誰もが特権的な媒介者として、豊かな外部からの

富を獲得して、支配的な存在へとなりうる社会であったということになる。『遠野物語』を神話として理解しようとした研究者としては三浦佑之をあげることができる。三浦はばらばらにされたモチーフ群を再構成して、『遠野物語』や佐々木喜善の収集した昔話から、「家」と「村」の神話を展開させてくれた。[21] この研究方法については、いずれ論じてみたいと考えている。しかし、上野の指摘がもたらしたことは、神話（＝王権の物語）も「家」の物語も基本的には同質であるという事実である。

象徴的な〈外部〉の独占による超越性の獲得こそが古代王権の目標であったというふうに、上野は指摘するが、これは昔話の中では当然のように出てくるテーマ＝主題ではないだろうか。「舌切り雀」や「おむすびころりん」といった昔話を思い浮かべてもらえばよいであろう。善良な、お人好しの主人公は「異界」におもむいて、宝物を持ち帰る。富を獲得して、福徳に満たされた主人公は満たされた存在となる。しかし、欲深な隣の主人や老婆は「異界」にたどりつけても、宝物は持ち帰れないのである。その意味では、「民俗社会」では富を獲得して成功する者は選ばれた主人公であり、排他的な存在となる。ロシアの魔法昔話に出てくる主人公「イワンの馬鹿」は、空を飛ぶ馬や「異界」の力で王女と結婚して、王となる。[22]

昔話や、伝説、世間話などという口承文芸の枠組みを越えて、民衆の文芸は繰り返し語り継がれてきたはずである。たまたま『遠野物語』が記録されたのは、柳田國男と、遠野出身の文学志望者佐々木喜善が出会ったことに由来するのである。これほど多くの物語を伝えている社会を、不幸にして我々は失ってしまって、目にすることはできない。しかしながら、遠野だけが、これほど多くの物語を抱え込んでいたのではないはずである。民俗学者である我々の怠慢が、日本の各地にあったはずの〈遠野〉を見失わせたにすぎないのではないだろうか。それはさておいて、ここで

得られた結論を明らかにしておこう。

上野の指摘するように、『遠野物語』では象徴的な〈外部〉との媒介者は、いつでも、どこでも、誰にでも開かれていたのである。それというのも、遠野の物語が語られた時代は、商業の発展と経済活動の展開が見られた近代だからであろう。すでに江戸時代には、物資の集散と他地方への物資の積み出しを中心とする交易も発展の端緒についていたはずである。ことに、遠野は地方の集散都市であって、中央と近辺の地域を結ぶ結節点の一つであったと思われる。そこに見られる多くの「家」は、御伽草子などに見られる「長者」の家ではない。かといって、街の中に店を広げるような商家でもないようである。農家ではあるが、作男や下女を含み込んだ、大家族のようである。どうして成功したのかは明らかではなく、周辺の人々には不思議な力を感じさせていたのであろう。[23]

東北日本には、そのような大家族が多く見られたようである。「家」の形態については、改めて論じる必要があるので、ここではあまり立ち入ることができない。いずれにしろ、いつなのか、どこでなのか、その「家」の誰によってかなどは、はっきりしたことはわからないが「成功をおさめた家」なのである。周囲に住む人々にとって、この成功を説明する材料は、自分たちのもっている「物語」しかなかったかのようである。間に合わせの「器用仕事」で説明してのけることは、ごく当たり前の精神活動である。[24]昔話でもよい、伝説のかけらでもよい、それらのモチーフをもってきてみれば、簡単に説明が付くではないか。〈不思議な世界＝異界〉におもむいて、超越した力や富を獲得する。その〈異界〉こそが、その「家」の繁栄を約束してくれるのである。そして、世間の人々にとって、成功した「家」には、成功の神話としての《物語》が必要だった。誰でもが成功の可能性をもった近代社会であればこそ、これらの物語をあちこちの「家」にかぶせておけるのである。佐々木喜善はそれらの眼前に展開する「家」の変化の物

語を聞き、柳田國男はそれを一流の筆致で書きとどめた。『遠野物語』は、その意味で近代の商業や産業の胎動を見せて発展する社会での物語＝「家の神話」なのである。プロテスタンティズムの浸透する以前の日本にとっては、この「異界」への信仰こそが近代社会へのばねとなっていたのではないだろうか。

註

(1)『遠野物語』の成立についてはさまざまな議論が行われてきた。遠野における調査研究の進展によって、さまざまな異説の存在が指摘されることもあり、資料としての信憑性についての議論も少なくなかった。ことに、柳田國男の執筆をめぐって、岩本由輝は柳田が「感じたるまま」書いたことを重視している。すなわち、柳田は自らの主張した民俗学本来の手法である、伝承者から「聞いたまま」を書いたのでないことに注目した。しかし、そのことが『遠野物語』の伝承資料としての信憑性を疑わせるものでないことは、岩本由輝の『もう一つの遠野物語』(刀水書房、一九八三年四月、一九四頁)の「柳田が天皇制の体系の外にある人々のことを考えようとしていた『遠野物語』は、常民の学という形でまとまってしまう民俗学よりも、はるかに大きな学問的可能性を秘めているものといえるのではなかろうか。」という発言で明らかにされているであろう。筆者も『遠野物語』をそのような意味で読み直してみたいと考える。また、『遠野物語拾遺』については佐々木喜善が執筆した原稿を柳田が推敲していたが、佐々木が待ちきれずに『聴耳草紙』を出版してしまったために、重複する内容となった。そのことのためか、柳田は『遠野物語拾遺』の推敲という作業を鈴木棠三にまかせている。柳田と佐々木の共同作業と考えれば、文体は明確に異なっているが、両者は切り離せないものであろう。

(2) 柳田國男の『山の人生』、『先祖の話』、『家閑談』といった諸著作への展開が、明らかに『遠野物語』に原点を有していることは、誰しもが認めることであろう。また、佐々木喜善については、『遠野物語』に代表される伝承の収集と整理を、生涯に渡って続けたものといえるであろう。

(3) 我々現代人でさえも、さまざまな宗教的価値観や、呪術的行動に束縛されて生きていることは、否定できない事実である。その意味では、我々自身の「信仰心」や宗教的心性を問うておく意味が充分にあるはずである。これは「近代以前」の問題ではない。そのことを明確に認識させてくれたのは、「オウム真理教事件」である。さらに科学技術や科学的研究の成果さえも、宗教に従属させようとする思想が自然科学者たちの中にも、伝統的に見られる。

(4) 柳田國男が「家」を自らの問題として問いかけざるを得なかった事情については、最近の柳田論が示している。とくに、岩本由輝『柳田民俗学と天皇制』(吉川弘文館、一九九二年一二月)が明らかにしている、養家からの精神的な脱却と民俗学研究の関わりについては考慮すべき点が多い。その意味でも、『遠野物語』の成立過程はゆるがせにできない問題である。そのような基礎的な研究について論じるだけの余裕は筆者にはない。

(5) 明治民法に代表される「家」イデオロギーを含めて、日本社会を支配していた「家」の実態と「思想」は、日本民俗学にとっても重要な課題であった。有賀喜左衛門や喜多野清一など、戦前の農村社会学者に始まり、戦後の社会学者や経済学者による「家」研究は、日本社会を理解し変革しようとする実践的な意味合いも込めて、長い間取り組まれてきた。最近の「家族研究」は、そのような支配的なイデオロギーとしての「家」とは異なった問題を投げかけている。しかし、いまだに古めかしい儒教的な「家」イデオロギーから脱却できていない人々の存在(筆者を含めて)が、現在の「家族問題」を複雑なものとしているといえる。

(6) 資本の本源的蓄積といった課題を論じるだけの能力を筆者が持ち合わせていないのが残念である。現在たどりうる伝承にも、問屋制家内工業に近い生産形態としての機織りなどがあったことを確認できる。このような生産形態の中では、倒産による夜逃げなどの話が残されている。山梨県都留市での聞き書きの最中に聞いた話では、川を隔てて対岸に「夜逃げして」ほとぼりが冷めたら戻ってきたというような、「農村的」な倒産の話もあった。

(7) 『遠野物語』の記述は旧漢字、旧仮名遣いであるが、本稿では読みやすい新漢字と新仮名遣いに改めた。厳密な校訂作業のような研究とは異質であり、人々の語りの筋書きを理解していただければよいと考えた。『遠野物語』も引用や記述は番号で表すことにする。

(8) 本論が目的としたのは、このような「物語」による「家」の《しるしづけ》という認識作業である。その意味では、物語に登場する具体的な対象としての人物や家族は問題としない。またそれと同様に、同じ「家」の人々についての異なる伝承についても、基本的な筋書きだけを問題にすることにしたい。

(9) アラン・ダンダス『民話の構造』(大修館書店、一九八〇年一一月)、正確には〈欠乏〉／〈欠乏の解消〉に該当する単純な構造の民話ということになる。もちろん、山中における「マヨイガ」への到達や、そこにおける山男からの逃亡といった心理的描写を、正確に置き換えれば、この物語はさらに複雑な構造になる。

(10) 赤坂憲雄は『漂泊の精神史』(小学館、一九九四年一一月)で、この伝承が木地師によって流布された「椀貸し淵」の物語と関連していると推定している。それは、この豊かな世界が「白望山」をめぐって語られる物語群の一つと考えたからである。であるとすれば、木地師の活動の痕跡や、その人々によってこの物語が広められた形跡といった事実が、遠野地方で確認される必要があるだろう。しかし、このような歴史主義的な仮説を立証するには、より確実な論拠を探さねばならないであろう。

(11) アファナーシェフ『ロシア民話集　上・下』(岩波書店、一九八七年七月・一一月)などの昔話を参照。異界への主人公の旅と、そこでの魔法の獲得による、主人公の目的の達成や王座の獲得といったモチーフは成人儀礼、もしくはシャーマンの成巫過程の「神話」としての性格を持つ。「家」の豊かさとはすなわち、民衆における社会的成功を意味するのであり、ひいては王権獲得とも類似する意味合いが存在すると理解したい。なお、小松和彦『神々の精神史』(伝統と現代社、一九七八年五月、講談社学術文庫、一九九七年五月)所収の「神霊の変装と人間の変装―昔話の構造論的素描」に触発されたことを明記しておく。

(12) 伊能嘉矩「遠野のくさぐさ」(『日本民俗文化集成　第一五巻　遠野の民俗と歴史』所収、一九九四年一〇月、未発表原稿)によれば、「七　池端孫四郎の事」と題する異伝がある。この物語では、物見山の池から出現した神女の手紙を鴻ノ池の姉神に届けて、物見山の池の神女によって黄金を挽き出す石臼(碾)を得る。したがって、水界の神女は主人公を殺害する意図は持っていなかった。さらに、孫四郎は実直な人柄の故に、異界の存在から手紙を託されたことになっている。石臼が失われるのは、妻の欲望のためと語られるのは同様である。したがって、ここでは物語の基本的な構造展開の変化はない。「異界の存在による殺

害の意図」という物語の機能が付加されると、「六部による主人公の救済」の機能で構造が補完されることになる。

(13) 前掲註（11）小松『神々の精神史』所収の論文「民話的想像力の背景―『江差郡昔話』の世界を探る」に例示された昔話には、臍から黄金を生み出す小僧の話（竜宮童子譚）があるが、これも陸中地方の伝承である。もちろん、黄金を授かる主人公の昔話は例挙にいとまがないはずであるが、黄金の生産地としての歴史をふまえるとすれば、注目すべき伝承である。

(14) 佐々木喜善は後に「縁女綺聞」にこの類話を掲載した。前掲註（1）の岩本由輝『もう一つの遠野物語』（二五八頁～二六〇頁）によれば、佐々木が紹介する物語では新張村の豪家の独身の一人娘となっていて、この物語とは異なる人物である。しかし、そのプロットはほとんど同一であり、大きく異なっているのは文体だけである。柳田の初稿本では、この主人公の家は明記されており、佐々木も実話であることを主張していて、両者の物語の中で、新張村が出てくることからすれば、この二つの物語は同じものと判断できる。そして、佐々木喜善の文章では女性と河童との交情場面がリアルで、柳田國男はこのような記述を避けたものと岩本は解釈している。「家」にとってのスティグマ（聖痕）というべきであろうか。

(15) 後に柳田國男は『山島民譚集（一）』に収録した「河童駒引」をまとめている。水界からもたらされる名馬と、水界の神使としての河童という問題が論じられる。また、これに触発された形で石田英一郎が『河童駒引考―比較民族学的研究―』（一九四八年初版、新刊、東京大学出版会、昭和四一年、新版河童駒引考、岩波文庫、一九九四年五月）をまとめる。石田はユーラシア大陸全域に広がる文化史のテーマとして、水界から訪れる牛と馬の伝承という問題を論じようとした。また、日本の河童伝承をまとめたものとしては、石川純一郎『新版　河童の世界』（時事通信社、一九八五年六月）がある。

(16) 今野圓輔『馬娘婚姻譚』（岩崎美術社、民俗民芸双書5、一九六六年五月）本書では、イタコと呼ばれる津軽の巫女による、祭文の伝承がまとめられている。中国の古典文献『搜神記』の説話については、本書を参照した。また、下北における「オシラサマ」の祭祀については、楠正弘『庶民信仰の世界―恐山信仰とオシラサン信仰』（未来社、一九八四年一一月）が詳細なモノグラフをおさめている。

(17) 小島瓔禮編著『人・他界・馬―馬をめぐる民俗自然史―』（東京美術、一九九一年一月）。死んだ馬の首を切り取って飾る習慣が遠野地方にあったこと（九三頁）や、シベリアのアルタイ族が天の神に馬を殺して犠牲として捧げる風習が存在したことなど、

ユーラシア大陸全域の馬の習俗について広く論じている。後者については、総剥ぎにされた馬の皮を竿の先に高く掲げる儀礼であり、この物語の「桑の木にかけられた馬の死体」という記述と合致する。しかし、小島によって指摘されているのは儀礼との類似性だけであって、物語が伝承されているかどうか明らかでない。

(18) 下北のオシラサマ信仰については、前掲註（16）楠『庶民信仰の世界―恐山信仰とオシラサン信仰』を参照。また、茨城県勝田市の事例については、『勝田市史　民俗編』（勝田市史編さん委員会、昭和五〇年、五八七頁）オシンメ様と巫女・祈祷師の項を参照。柳田國男は、むしろこの「オシラ遊ばせ」が人形舞わしなどの芸能の源流と考えている。『遠野物語拾遺』七七番もまたオシラサマの物語であるが、これは天竺の長者の娘と言っている。したがって、特定の「家」にあった桑の木からオシラサマが作られたという伝承とは明らかに異なっている。しかし、このような成立を語らない場合にも、特定の「家」の祭祀対象であったことは明確である。

(19) 『奥州のザシキワラシの話』（炉辺叢書三、玄文社、大正九年二月、山田野理夫編『遠野のザシキワラシとオシラサマ』宝文館出版、昭和四九年二月に再録）

(20) 網野・上野・宮田『日本王権論』（春秋社、一九八八年一月、八頁～一三頁）、シンポジウムにおける発言記録集であるが、上野は『遠野物語』の神を外部から内部へと整理して秩序づけると同時に、「ザシキワラシ（中略）の場合でも、「家」のど真ん中、座敷の真ん中に、神が憑く異界みたいなものが突然ぽこっと現われるんですね。それは、誰に、いつ、どうやって、現われるか、まったく予測が不可能だということを考えると」、「それはもう、いつでも、どこでも、誰にでも、その（境界）における媒介者の役割が開かれているような世界のあり方だというふうに考えることができ」ると表現した。古代の天皇制とパラレルでありながら、民俗世界の神々はそのような特性を持っているというのである。

(21) 三浦佑之『村落伝承論『遠野物語』から―』（五柳書院、昭和六二年五月）に所収の論文「村建て神話―始まりはどう語られるか―」という示唆的な論文は、実に魅力的な伝承の読みとり方を提示してくれている。

(22) 前掲註（11）アファナーシェフ『ロシア民話集上・下』を参照。首だけの馬が異界への主人公の旅を助けるという語り口もある。異界での呪力の獲得や難題の解決、さらわれた王女の救出といったテーマは、大国主の命の伝承や甲賀三郎譚を思い起こさ

せる。もちろん、この『遠野物語』では、それほど複雑な展開を持つモチーフは見られないし、一般に日本の昔話もロシア民話ほどの大きな構想は持たない。

(23) 土淵村の山口孫左衛門の「家」を思い浮かべてみよう。主人家族の外に、複数の奉公人が働いていて、その家業が成立していたようである。もちろん、農業が主体となるのであろうから、家業経営体としての「農家」ということになる。これは、現在の日本で見られるような自立した「中農」ではなくて、地主手作り経営の行われる「大百姓」であろう。家族全員が死亡した後で、親族がその財産を持ち去ったというのであるから、分家も多数輩出している本家層とも考えられる。

(24) レヴィ＝ストロースが『野生の思考』で指摘した「ブリコラージュ」の概念である。さまざまな雑多な材料を寄せ集めて、一つの統一した物語が構成され、ある種の神話的な作用を作り出すという風に理解してみよう。

（未完）

東京立正女子短期大学論叢（第１巻～第５巻）並びに
東京立正女子短期大学紀要（第６巻～第25号）総目録

〈創立記念号〉　1966年

巻頭のことば	岩　本　経　丸
東京立正女子短期大学創立趣意書	
現代教育の危機と教育革新	岩　本　経　丸
戦後における女子高等教育の発展	藤　本　満　治
教育課程から見た明治二十年前後の私立女子学校	神　辺　靖　光
武氏祠画象石における「巨樹」について	土　居　淑　子
ラジオ的表現論	庄　司　寿　完
イレクトリック、タイプライター	井　口　美登利
「灯台へ」について	小　林　幹　男
冷凍鯨肉及び加工鯨肉中のカルボニル化合物について	太　田　禎　子
「白鯨」と「ハックルベリ・フィン」について	近　藤　久美子

〈第２巻〉　1968年

巻頭のことば	岩　本　経　丸
教育統計からみた女子青年の進路と女子教育の問題点	神　辺　靖　光
戦後の教養放送	庄　司　寿　完
Typewriting 教育法の研究　その一 ——Typewriterの開発とUniversal Keyboardの問題——	井　口　美登利
文型練習における問題点	田　島　富美江
発音教育についての一考察	田　所　南美子
対人関係とテレビ視聴パターンに関する一研究 ——国際基督教大学大学院提出・教育学修士論文——	カズコ・ムーア
ヘンリイ・ジェームズの「アメリカ人」について	近　藤　久美子

〈第3巻〉　1971年

学長就任記念講演
人倫の複合弁証法的発展としての歴史
——現代科学技術の揚棄について——　岩本経丸

小説「海軍」について　近藤久美子

日蓮における女性の救済　中尾堯

法華経薬王菩薩本事品と六朝の捨身　岡本天晴

菩薩像の円形肩飾りについて　田所政江

文型練習におけるチャート使用法　田島富美江

On "The Navy" by Toyoo Iwata　近藤久美子

〈第4巻〉　1973年

十法界の研究
——主として十法界が現代倫理に与える示唆について——　岩本経丸

ウィリアムブレェクと彼の二つの作品に就いて　近藤久美子

The Woodlanders　ノート　小林幹男

慧皎における亡身の意味について　岡本天晴

Typewriting 教育法の研究　その2
——Typewriting 教育の展開——　井口美登利

教育の経済理論に関する一考察　鍾清漢

The Anglo-Satsuma War in 1863：
From "The Navy" Translation Continued　近藤久美子

〈第5巻〉　1974年

反公害の哲学　岩本経丸

開発途上国における教育の課題　鍾清漢

教授・学習過程の再考　田島富美江

日・英対訳の問題点
——語学教育の一考察——　近藤久美子

〈第6巻〉(『東京立正女子短期大学紀要』に改称)　1978年

英語教育におけるPunctuationの用法について (1)	井口　美登利
英語教育における視覚教材のあり方	田島　富美江
動詞副詞結合の名詞への転化	蔭山　友行
*The Pearl*の文体と善悪について	深沢　俊雄
ウイリアム・フォークナーの*That Evening Sun*について	佐藤　秀一
隠れキリシタンの「天地始之事」	紙谷　威廣

〈第7巻〉　1979年

英語教育におけるPunctuationの用法について (2)	井口　美登利
Pidgin English——その発生と特徴——	杉本　豊久
*Of Mice and Men*について (主人公ジョージとレニーの意味するもの)	深沢　俊雄
*Pantaloon in Black*について ——*Go Down, Moses*論——	佐藤　秀一
ロレンスと黙示録 あるいは自然の両義性	山田　田津子
隠れキリシタンにおける穢れの観念について	紙谷　威廣

〈第8巻〉　1980年

日本人は何故英語が苦手か？	近藤　久美子
英語教育における数詞の表記について	井口　美登利
言語学習における映像の妨害要因	田島　富美江
黒人英語の音韻的特徴	杉本　豊久
『モーゼよ，行きて下れ』 ——意識の盛衰——	佐藤　秀一
小原国芳とデンマーク体操	杉江　つま
生月キリシタンの聖地信仰 ——民間信仰と殉教意識——	紙谷　威廣

〈第9巻〉　1981年

大学教育とカウンセリング　中村弘道

英語教育におけるVoiceの用法について　井口美登利

スタインベックのシンボリズムとヒューマニティー
——『月は沈みぬ』について——　深沢俊雄

吉田松陰の日蓮観
——草莽崛起策形成について——　石川教張

反キリスト者の系譜
サミュエル・ベケット序論『ゴドーを待ちながら』　山田田津子

生月島キリシタンの宗教複合　紙谷威廣

〈第10巻〉　1982年

日本管見（随筆）　堀教通

外国語教育における抽象表現と視覚教具　田島富美江

形容詞の配列順序　清水純子

『赤い子馬』における主題について　深沢俊雄

『死の床に横たわりて』
——狂気と正気のあいだ——　佐藤秀一

女子学生の健康調査　杉江つま

近代文学のなかの仏教精神
——近代仏教文学研究序説——　石川教張

〈第11巻〉　1983年

日本女子教育の発展　近藤久美子

オフィス・オートメーション（OA），ワードプロセッサ（WP），
とタイプライティング　井口美登利

『罐詰横町』について
——ドックとマックの人間像——　深沢俊雄

サートリス論
——romanticなるもののかげで——　佐藤秀一

津田梅子の女子教育について　石川教張

鎌倉幕府衰亡論
——蒙古合戦に敗れた東国政権——　堀　教通

〈第12号〉　1984年

日本の英語教員養成を考える
——ロンドン大学教育研究所・ソ連研修旅行に参加して　田島富美江

英訳『開目抄』（日蓮）　堀　教通

Begin＋後続動詞群の深層構造　清水純子

幼児・学童期における安全能力に関する一考察 —その2—　杉江つま

幸田露伴の文学と仏教　石川教張

キリシタンの神話的世界（一）
——「天地始之事」における天狗の意義——　紙谷威廣

〈第13号〉　1985年

私の歩んだ英語教育の旅　近藤久美子

英訳『開目抄』（日蓮）Ⅱ　堀　教通

英語能力の効果的測定方法に関する研究（1）
——英語能力テスト研究の動向——　神山正人

宮沢賢治における「まこと」の美と信仰
——『めくらぶだうと虹』を中心として——　石川教張

キリシタンの神話的世界（二）
——マリアの逃亡——　紙谷威廣

書評
『猫のフォークロア—民俗・伝説・伝承文学の猫—』

〈第14号〉　1986年

私の歩んだ英語教育の道　近藤久美子

日本語名詞の意味特徴・場所の一面　清水純子

バーンズの音楽性の抽出　難波利夫

宮沢賢治におけるまことの道と詩作への探求
——『龍と詩人』をめぐって——　石川教張

キリシタンの神話的世界（三）
——失われた原郷　——　紙谷威廣

《書評》城山三郎著『素直な戦士たち』　杉江つま

《報告》東京立正女子短期大学「校歌」制定の経過

「紀要」合評研究例会報告

〈第15号〉　1987年

視覚の情報処理
——より豊かな物の見方を求めて——　田島富美江

効果的な外国語学習に関わる諸要因の研究
——情意的要因研究の概観——　神山正人

スタインベックと笑い
——*Tortilla Flat*を中心に——　深沢俊雄

バーンズのコローデン　難波利夫

達成結果についての社会的評価　飯田宮子

闇への回帰
——宮沢賢治「ひかりの素足」論——　石川教張

矢祭町念仏和讃資料　紙谷威廣

《報告》（1）校歌発表会
（2）紀要研究例会

〈第16号〉　1988年

宗教的個性の形成の課題　石川教統

宮沢賢治の童話における修羅（しゅら）の捨身（しゃしん）　石川教張

《翻訳》マオリ女性のタゥマゥ婚　桜井真理子

《史料報告》江戸時代後期の民衆信仰史料
——石裂山文政争論（おざくさんぶんせいそうろん）——　紙谷威廣

〈第17号〉　1989年

バイリンガル秘書教育における
　ビズネス・イングリッシュの体系的指導プログラム　井口　美登利

二重符号理論と外国語教育　田島　富美江

Lena GroveとJoanna Burden
　——そのambivalenceをめぐって——　佐藤　秀一

幼児・学童期における安全能力に関する研究（No.6）　杉江　つま

江戸時代後期の民衆信仰史料（二）
　——石裂山荒井家所蔵文書（一）——　紙谷　威廣

江戸時代における寺僧生活の一側面　石川　教統

〈第18・19号〉　1991年

バイリンガル秘書教育における
　ビズネス・イングリッシュの体系的指導プログラム　井口　美登利

日蓮聖人の「如説修行抄」英訳　堀　教通

英文読解における「複数形」の識別
　——日本語との対比に基づいて——　田島　富美江

青年期女子における性役割構造の分析Ⅰ　山室　宮子

パターン・プラクティスの効果に関する一考察
　——『英語授業課程の改善』を中心として——　中岡　典子

アフリカーンス語の南ア英語へ与えた影響　佐々木　卓爾

認識的孤立：古典的問題のPragmaticな解決　出世　直衛

法律発案権に関する一考察　福岡　英明

江戸時代後期の民衆信仰史料（三）
　——石裂山荒井家所蔵文書（二）——　紙谷　威廣

〈第20号〉　1992年

バイリンガル秘書教育における
　ビズネス・イングリッシュの体系的指導プログラム　井口　美登利

青年期女子における性役割構造の分析Ⅱ
　——知性と美しさの評価——　山室　宮子

破裂音の発音に関する日・英語の比較研究：
　息の流出の仕方の違い　中岡典子

日本語の撥音：通時観　出世直衛

Light Verbに関する一考察　伊原睦子

国会法と議院規則　福岡英明

〈第21号〉　1993年

SalutationとComplimentary Close　井口美登利

鼻音の発音に関する日・英の比較研究　中岡典子

格付与に関する一考察　伊原睦子

短大生の健康意識と運動習慣，
　食生活の実態に関する研究（1）　杉江つま・原田寿子・大塚貴子

青年期女子における性役割構造の分析Ⅲ　山室宮子

あ・い・だの詩学
　——サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』　山田田津子

地蔵の田仕事再考
　——福島県の鼻取り地蔵譚を中心として　紙谷威廣

日蓮聖人「十一通御書」の考察　堀教通・西脇哲夫

〈第22号〉　1994年

文化と外国語教育
　——サピア・ウォーフの仮説に基づいて　田島富美江

強勢のメカニズムに関する日・英語の比較研究
　——リスニング活動との関連において　中岡典子

'Cram'——θ役割と統語構造についての考察　奥坊光子

発達に関する山鹿素行の考え方—分析（Ⅰ）　飯田宮子

ネバーランドのマイノリティ
　——"The Buddha of Suburbia"と"The Swimming Pool Library"における階級，人種，セクシャリティ　鈴木順子

あ・い・だの詩学
——サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』(承前)　山田田津子
日蓮聖人「十一通御書」の考察（承前）　西脇哲夫
キリシタンの終末論
——島原・天草の乱を中心にして　紙谷威廣

〈第23号〉　1996年

今こそ、建学の精神を　藤井教正
資料紹介「富士法会開山画行藤仏俤御一生記」　紙谷威廣
フレーム問題と世界
——人工知能・哲学・ハイデガー　芦田宏直
雇用における男女平等の道程
——男女雇用機会均等法制定10年を契機に　福岡英明
「やはり」の分析　その1
——関連性理論の視点から　小泉ゆう子
“Cram”についての統語分析　奥坊光子
日英語の文字と音声の関係に関する比較研究
——入門期の学習指導改善のために　中岡典子
高島平三郎の心理学研究（1）
——明治後期における日本心理学の概観　飯田宮子

〈第24号〉　1997年

英語の無生物主語構文とその背景
——文化と英語教育の関連に基づいて　田島富美江
子音連鎖／sn／と／stn／に関する一考察　中岡典子
属格の取り扱い方
——新旧の文法書の比較　ジョゼフ・フィリップス
「やはり」の分析（2）——関連性理論の視点から　小泉ゆう子
詩としての第16章
——A・シリトーの〈円〉と〈曲線〉について　横田由起子
『養生訓』の現代的意義　杉江つま

高島平三郎の心理学研究（2）
——知・情・意の発達　飯田宮子

欧州連合（EU）における男女平等とポジティブ・アクション
——雇用における男女平等の実現のための積極的措置について
福岡英明

〈第25号〉　1997年

大学におけるオーラル・コミュニケーション
能力育成に関する考察　田島富美江

「やはり」の分析（3）——関連性理論の視点から　小泉ゆう子

荒れ地としての郊外
——Anthony Burgess, *The Right to an Answer*（1）　鈴木順子

〈寄生〉と労働者階級　横田由起子

最後の問い——“Ode to the West Wind”小論　佐藤由紀

スペインの君主制　佐藤修一郎

グラフの曲面への双埋め込み可能性の特徴付け　遠藤敏喜

三奏本『金葉和歌集』所載、寂照の「とどまらん」の和歌から（その一）
——『宝物集』の関連説話におよぶ　西脇哲夫

『遠野物語』における「家」と異界
——民俗宗教の世界観（1）　紙谷威廣

執筆者一覧・掲載巻号数

芦田宏直　23

飯田(山室)宮子　15 18-19 20 21 22 23 24

井口美登利　1 2 4 6 7 8 9 11 17 18-19 20 21

石川教張　9 10 11 12 13 14 15 16

石川教統　16 17

伊原睦子　20 21

岩本経丸　1, 1 2 3 4 5

遠藤敏喜　25

太田禎子　1

大塚貴子　21

岡本天晴　3 4

奥坊光子　22 23

蔭山友行　6

カズコ・ムーア　2

紙谷威廣　6 7 8 9 12 13 14 15 16 17 18-19 21 22 23 25

神山正人　13 15

神辺靖光　1 2

小泉ゆう子　23 24 25

小林幹男　1 4

近藤久美子　1 2 3,3 4,4 5 8 11 13 14

桜井真理子　16

佐々木卓爾　18-19

佐藤秀一　6 7 8 10 11 17

佐藤修一郎　25

佐藤由紀　25

清水純子　10 12 14

出世直衛　18-19 20

鍾　　清漢　4　5

庄司寿完　1　2

ジョゼフ・フィリップス　24

杉江つま　8　10　12　14　17　21　24

杉本豊久　7　8

鈴木順子　22　25

田島富美江　2　3　5　6　8　10　12　15　17　18-19　22　24　25

田所南美子　2

田所政江　3

土居淑子　1

中尾　　堯　3

中岡典子　18-19　20　21　22　23　24

中村弘道　9

難波利夫　14　15

西脇哲夫　21　22　25

原田寿子　21

深沢俊雄　6　7　9　10　11　15

福岡英明　18-19　20　23　24

藤井教正　23

藤本満治　1

堀　　教通　10　11　12　13　18-19　21

山田田津子　7　9　21　22

横田由起子　24　25

論文執筆者紹介

田　島　富美江 …… 本　学　教　授
小　泉　ゆう子 …… 本　学　非常勤講師
鈴　木　順　子 …… 本　学　助教授
横　田　由起子 …… 本　学　非常勤講師
佐　藤　由　紀 …… 本　学　非常勤講師
遠　藤　敏　喜 …… 本　学　非常勤講師
西　脇　哲　夫 …… 本　学　助教授
紙　谷　威　廣 …… 本　学　教　授

紀要編集委員

西脇　哲夫　　鈴木　順子

東京立正女子短期大学紀要　第25号

平成９年12月20日　印刷
平成９年12月25日　発行

編　集　東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所　株式会社　三　協　社
〒164　東京都中野区中央４－８－９
TEL　０３（３３８３）７２８１（代）

発行所　東京立正女子短期大学
〒166　東京都杉並区堀ノ内2－41－15
TEL　０３（３３１３）５１０１（代）

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

No.25 **December 1997**

CONTENTS

Some Suggestions for Teaching Oral Communication……TAJIMA, Fumie 1

YAHARI and Other Expressions: Relevance-based Approach (3)
……KOIZUMI, Yuko 22

Suburbia as The Waste Land
——Anthony Burgess, *The Right to an Answer* (1)
……SUZUKI, Junko 40

'Paratism' and the Working Class ……YOKOTA, Yukiko 61

The Last Uncertainty : An Essay on "Ode to the West Wind"
……SATO, Yuki 84

Monarqía en España ……SATO, Shuichiro 95

A Characterization of the Bi-Embeddability of a Graph into Surfaces
……ENDO, Toshiki 115

On Jakusho's Waka in *Hobutsu-Shu*
……NISHIWAKI, Tetsuo 134

Some World Views of the Folktales
in Yanagita Kunio's *Tohno Monogatari*
……KAMIYA, Takehiro 142

The Complete Catalogue…… 122

Published by

Tokyo Rissho Junior College For Women

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161